麻生路郎主宰

川柳雑誌

第十一卷　第四號

大正十一年三月廿日第三種郵便物認可
昭和九年四月一日第十一卷第四號
（毎月一回発行）
定價十錢　郵税二錢
川柳雑誌社発行

川柳雜誌 第十一卷第四號 目次

題字 麻生路郎
表紙畫 森田ひさし

文苑

是の如く我れ聞く 長野吉高(三)
—如是閑氏のユーモア藝術論所見—
川柳時評 福田山雨樓(一〇)
詩價の測定 西田艸樂(二四)
句をめぐりて想ふ(續) 阿部閑生(二六)
武玉川初篇研究(二三) 梅本秋の屋
—初篇研究を卒りて 森東魚(三〇)
蛭子省二
句評陣 山雨樓、鮎美(四八)
川柳動物園 岡田某人(五六)
古狸窟雜筆(二) 梅本塵山(六〇)
悼吉田晩春 水谷鮎美(六二)

雜筆 春秋

熱河の話 岩崎柳路(四四)
街に住めば 高橋かほる(四五)
傳說を語る(一) 加藤文醉(四五)
街の風景 毛利九波(四六)
漫言 辻いの助(四七)
タヅの理髮場 吉田水車(四七)
江戸のうはさ 住田亂耽(三五)
川柳パイロット欄 福田山雨樓(五二)

創作

近作柳樽 麻生路郎選(六)
川柳塔 麻生路郎選(三六)
粒々集 柳秀、五健、一徹、鞍馬(三)

日本名所名物川柳 大阪の卷(一〇)

大阪城 麻生路郎選(五〇)
一路集 陰口 楊井二南選(五四)
初戀 廣江天痴人選(五五)
本社三月句會 角丸記(五八)
各地柳壇 路郎、綠雨、二南整理(六三)
川柳家戸籍調 係山雨樓(五四)
西之町MEMO 綠雨(七四)
編輯の窓 山雨樓(七五)

養榮の髪毛ぬせ戟刺を髓腦

伊豆椿ポマード

國產唯一　大島椿の精

今直に御愛用下さい

全國有名化粧品藥店にあり

伊豆椿香油本舗

是の如く我れ聞く

―如是閑氏のユーモア藝術論所見

長野吉高

古、印度の佛教學者は、總べて文辭の修飾形容を「音莊嚴」と「義莊嚴」の二種に分けた。莊嚴――即ち梵語のアランカーラとは、足らぬ所なく完備し、嚴飾して美妙を盡したのを言ふ。故に音莊嚴とは言語音聲の美、義莊嚴とは思想の美を指すものである。凡そ藝術は、國民性を離れ、この二つを離れては成立の意義をなさない。古來、洋の東西を問はず　さまゞゝと藝術に就て論じられるけれども、その根幹をなすものはやはり以上の二つである。勿論、その時と場合に應じ、角度を變じて音莊嚴のみを見ることはあり得る。義莊嚴また同樣である。然し、それは一の便法に過ぎず、若しその何れかの一方にのみ走る時その藝術はいやまた藝術論は、それ自體の價値を失ふものである。我々は二つの眼を所有する。さりながら、それは事物をより完全正確に見るためであつて、事物を二つに見るがためでは斷じてない。我々は不具であつてはならない。同時に藝術もまた不具に見立てゝはならない。

○

編輯局より「改造」三月號の長谷川如是閑氏の「笑の社會性とユーモア藝術」の一文に就て批判を求められた。が、然し卒直に言へば、これは私にとつての喜悲劇である。何んとなれば私は如是閑氏と多分にその意見を同じうする以上、こと更にその論を批判する何の氣持も無い。だからと言つて、何の所見も加へざるは却つて編輯局に對する不親切を意味する。これ即ち悲慘なる一の喜劇を演ずるにはあらざる莫きか。

○

笑ひが、例へば人間の矛盾、不統一等の時に起る、と見るアリストテレスやカントの說による要は無い。然してまた、彼等

が社會的性質を見ざるものとして排擊すべき理由も無い。何故なら、彼等はそこに社會的性質からの批判の要を、多く認めなかつたからである。なる程、私とて笑ひの社會的性質の重大さを否定はしない。寧ろ强調する一人である。然しそれは、何よりもその國々、それはその時代々々の社會的性質、即ち生活事實に對する別な認識及び表現の態度をとるべきで、たゞ觀念論的に味噌も糞もたゝき込んではならぬ。歐米人が、我々日本人を「實に不思議な笑ひ」をもつと評するのは、既に常識化された一揮話だらう。事實、私どもは悲しみの場合にも笑ひ、怒りの時も絶望の時も笑ふ。これは遠い古から我々の祖先のもつた「感情の美化された、又は英雄化された抑制」の美德で、誇るべき東洋の道德であつたかも知れない。笑ひと藝術を合一せしめる場合は、藝術の第一課を習得中の者は異常な混迷と誤解をする。かるが故に、それを說く者は極めて細心の注意を以てすべきである。私はこゝに如是閑氏の論を指すのでない。否、却つて如是閑氏の言はんとする氣持は私にはよく解るのである。たゞ、それが遺憾なことには、論點を一方的に集注した結果、やゝ不透明な調音を與へることで、私はそこに發生する誤解を惧れる一人に過ぎない。

○

「笑ひは悲哀や怒りより不眞面目とは言へぬ。寧ろ深刻な表現の力」笑ひを表現から見た時、この如是閑氏の見解は道理である。「藝術的笑ひは眞實の重大事をも笑ひの對象とするが、そこにユーモアの社會的使命」があるとする、これまた否定はしない。だが「暴露する者もされるものも反社會的衝擊を與へ與へらるゝことなく受渡しの出來る」ものが笑ひであり、その結果、悲哀憤怒などの感情は無能力、とするのはどういふ意味か。かういふ見方は、所謂ユーモア藝術至上論とつては甚だ都合が好い。けれども、古今東西何れの國の社會人もユーモア藝術だけでは慊らず、そこに別な表現形態の藝術を求めた。これ即ち、認識の態度を社會的關心に置いた悲劇である。こゝに誤解してはならぬのは、「笑ひ」と「悲しみ」は全然別個のものではないといふことである。たゞその表現形態が異るのみで、內面的社會批判は同一である。

○

常に偉大なる喜劇は、偉大なる悲劇で、偉大なる悲劇また偉大なる喜劇であるは言ふまでもない。ユーモア藝術が、笑はせる者と笑ふ者との間に共通的な認識を必要とするならば、悲劇また同樣である。そしてその共通な認識が深刻であればあるだけ、それだけ一層喜劇的となり悲劇的となる。故に、嚴密な意味から言つて、喜劇のみの藝術はあり得ない。同樣に、悲劇のみの藝術はあり得ない。これは嚴然不動の論理である。アリストファネスの喜劇とシェクスピアの悲劇と、この二つの異つた藝術的表現は、終に合一せねばならず「泣くまいとして笑ふ」といふ喜劇は、モリエールに於て明かに見得る。ボーマンシェの泣き笑ひに就ての言葉は、我々の最も味ふべきものだらう。

○

シエクスピアは「人間は悲劇的に弱いがこの弱さが哀れむべき人間性だ。人間は喜劇的に弱いがこの弱さがいとほしき人間性だ」と言つてゐる。さる物好きな一外人が劇場で、喜劇と悲劇と何れに觀客が多いかと、その統計を根氣よくとつてみた所悲劇の方の觀客が喜劇よりは多かつたが、たゞ喜劇の方が悲劇より智識階級者が多かつた、といふ妙な結果を得たといふ。ゼ・ビ・プリストリーは「悪い悲劇より喜劇がよい。劇に深い生命の刻まれてゐることは望むが悪く深刻にやられては堪らぬ」と言つてゐる。我々はこの逆の意味あることを見逃してはならない。

○

「日本の文藝は古代からユーモアに富むがこれは藝術的態度が古代よりリアリズム的であつた事を示す」と、如是閑氏は言ふ。果して然るか。藝術に於て、リアリズムと必然に結びついてゐるのは必ずしも笑ひのみではない。一體、かういふ見方そのものが極めて觀念的で、所謂論議の論議押しである。既に述べた如く、國民性を除外視してその國の藝術論は成立しない。この點、如是閑氏の一考を望む。そも、日本の言語は多節的な語である。例へば「霰(あ、ら、れ)」の如く二音節、三音節からなる。かくの如き語をなすのは、やがて日本に五七調の韻文の起つた所以である。また我國には母音が開く所謂開音語が多い。これは總體的に言へば、南國は開音が多く、北國には閉音が多いやうである。この開音の多いことは、國語の性質を輕快にする。西歐でもその如く、フランス語の方がドイツ語より輕快である。北歐の文藝が深刻で重みのあるに比し、フランスやイタリー等に輕妙な文藝の生れるのもこれに原因する。また我國には同音異語が多い。例へば「かみ」の字でも神、髪、上、紙、頭等の如くである。これが多いといふことはかけ言葉が多いといふことになる。このかけ言葉の多いことは、即ち國民が輕快漂脫で、甚だユーモアな性質をもつてゐることを示す。たま〳〵これが文藝に反映したに過ぎない。イギリスに於けるリアリズム傾向の小說は、リチヤードソンの「パメラ」に始まる我國に於ける同一傾向の小說は紫式部の「源氏物語」があるが「パメラ」より遙かに古い時代に完成されてゐる。然し、だからと言つて、一二の例により古くから我國のあらゆる藝術的態度がリアリズム的であつたとは言ひ切れない。

○

我國の演劇に、ユーモアが閉め出しを喰つてゐるのは注目すべきことである。つまり、喜劇が極めて少いのである。尤も、これは獨立した喜劇を指すので、單なるユーモアは如何なる劇にもあることはある。そしてそれはある場面に限られてゐる。たゞ淨瑠璃等には「八笑人」とか「彌次喜多」等のユーモアも

のがやゝ獨立した形になつてゐる。故に、明治以前には、獨立した喜劇は甚だ少い。喜劇が喜劇として獨立し、今日の如く發展したのは大正の中期オ期頃からである。この現象は日本演劇史的に見れば極めて注意せねばならぬ問題だが、固よりこゝに詳述すべき限りでない。

○

支那に於ては、清代の戲曲作家李笠翁が徹頭徹尾喜劇論者だつた。元來、戲曲といふものは、喜劇ならざるべからず、といふのがその主張である。戲曲「風箏誤」の末尾に、痛快な氣焰を吐いてゐる。要譯すれば「劇は元來は愁ひを消すがために設けたものだ。それに何を苦しんで錢を出してまで涙を買ひ喜びを變じて悲しみにしやうとするのか。自分は戲曲は書くが悲劇なんぞは筆にせぬ。一人でも笑ふてくれねばそれが惱みだ。世を擧げて盡く彌勒佛とならば」さらに加へて「人を度する禿筆はじめて投ぐるに堪ふ」と。私は未だ曾つて、この笠翁の如き痛快な喜劇論者を知らない。ギリシヤ、ローマ以來、近代にかけての有象無象の喜劇論者は掃き捨てる程あるが、笠翁の痛烈な言に及ぶ者は一人も無いたらう。笠翁の「閒情偶寄」には有名な戲曲論がある。彼の言はよく支那劇の本質を語るもので、たゞ注意せねばならぬのは、たゞに彼の一家言のみと見ることの出來ぬ事である。支那戲曲史上から言へば、悲劇的な發生發展をみず、多くは喜劇的に發達して來たもので、これは我國とは凡そ逆な位置になるのである。勿論、時代によつて悲劇も生れてはゐるが、必ずしもそれが主流とはなつてゐない。然も否定と肯定の矛盾社會を對照とせず、人間を對照としての人間相を嚴飾して客觀的に描き出さうとするのだから、從つて常識喜劇論のカテゴリーに押込んでこれを論ずれば、そのこと既に喜劇となる。國民性を離れ、概念化された喜劇論ではその國の、否すべて藝術といふものは永遠に見えない。

○

私は既に結論に達した筈である。本論の冒頭に於て述べた如く、普莊嚴と義莊嚴の關係が、藝術の上から分離せざると同樣「藝術的ユーモア」は「藝術的悲哀」と不可分である。この點は、朧氣ながらも了解された事と思ふ。私は決してユーモア否定者ではない。否、寧ろその强調者であることも既に述べて置いた通りである。さりながら、だからと言つて「悲哀のやうな退縮的でなく活氣と協同を示す」など、如是閑氏同樣に言ふ勇氣がないだけである。私としては、さういふ皮相な議論が成立たぬのである。分裂の運命を結合に引戻すのは果してユーモアのみだらうか。喜劇は悲劇である。人生は終に「笑ひ」でありよく見れば「悲しみ」であり、またよく見れば「笑ひ」である我々の生命の流れを無視して、ユーモアをユーモア以上のものとして扱ひきれず、悲哀を悲哀以上のものとして扱ひきれざるものこそ藝術的に低級である。我々の二つの眼は、常に我々に向つてこの眞理と事實を、無言のまゝに示してゐることを忘れてはならぬ。

（終）

近作柳樽

路郎選

特價品一べんひとつづゝ觸り　神戸　某人
凡人になる氣の屠蘇に目が据り　同
ごもつともさて棒引にしてくれず　同
一錢をしみじみ見れば御紋章　同

出産祝——鮎美氏に

赤ん坊を見るのに親の呼吸をつめ　同
童顏で寢てる夫が疑へず　大阪　大門
模擬店のぐるり落花に喰ひこぼし　同
國の家たゝんで來たる下げ鞄　同
病人は我意を通してから寒い　東京　薫舟
春芝居動けば匂ふ見合の娘　同
春なれや灰皿の煙一筋に　同
だしぬけに路次から躍る猫の戀　長野　柳兒

快方へ金の工面が迫るなり　同

金の相場へ齒科醫商賣じみてゐる　同

寄宿してボブラを渡る雲が好き　神戸　麥刀子

旅馴れて空氣枕に夢も良し　同

きぬ〳〵のみかんの皮に目をそらし　同

下役のなかの一人の髭に惚れ　高知　翠葉

醫院閑散

嘘の下駄ぬいでひまとは見られまじ　同

冬の水傭はれてゐる涙が出　同　雲ヶ池　松雨

雨はこゝろの疵をとかしてくれる　同

女をにくむ空はきれいに透きとほる　同

湯タンポ看護婦の手が霜焼けてゐる　同

春が來てゐたオーバーのポケット　神戸　貧兒

びんぼうの子は入院したいなり　同

許してあげると云ふなり　同

合掌へ金のにほひの賽錢箱　長野　有爲郎

ルンペンが人間らしくあくびして　同

口笛は悟りきれないさびしさか　同

眉濃ゆき女に不倖つゞくなり　高知　梨生

團體で出た日無口な人でなし　同

詰襟を着てゐる理屈侮られ　同

段梯子にそつと泣いたる思ひ出よ　大阪　舟々

三十の鼓動を聞いてゐたりけり　同

忘れてはゐない借金あるのなり　同　觀月

にぎやかに祖父のお通夜をしてるなり　同

勞働歌唄へば連れに來てくれる　大和　翠峯

男氣を出したばかりに笑はれる　同

毛糸針世間と別な陽があたり　高知　珍景

この鼻で稼いでゐますコンパクト　同

妻とゐて妻の氣を知る二月の夜　神戸　九葉

日向ぼこ誰か來た音陽がかげり　同

待つこゝろ落葉のおとはゆめになる　櫻ヶ池　噴兒

口あけて五十の母に夢があり　同

二ア人で金を嗤つてやりませう　入幡　十七八

恐しい豫感檢溫器をはさみ　同

御日様に童話を聞いて居るバルーン　大阪　勝二

水晶の印出勤簿は雇　　同

値切りさへすればよい氣の成り上り　　千葉山　沐天

屋根裏を擇つて二人は晴れて住み　　同

上づつた聲がさみしい女教員　　京都　晨一朗

つとめてる母へ

母に祈る言葉涙となつて出る　　同

腹立ちに物差しで背かいて居る　　神戸　吉左右

制服のまゝがうれしい晩餐會　　同

病氣して口の達者を憎まれる　　高知　青果

妻の智惠金借りに行く里があり　　同

北海道へ移轉の友へ

北陸に落着く便り雪模様　　今治　小松

ぞうにたく女房の息がまつ白な　　同

落ぶれたやうな木もある製材場　　高知　春水

病人へ足袋のコハゼが光るなり　　同

曇り日の時計が宗教的に鳴り　　大阪　葉光

夢に理由があつて淋しい　　同

いつの間か型にはまつてゐる夫婦　　同　夜王

金殘す氣になつたのをあやぶまれ　同　松江　祥月

母の眼がさつと變つた生活苦　同　神戸　朝雨

船中で拾つた戀と誰が知ろ　同　京都　ひろし

デパートに女中を女中らしく見せ

ふと訪ふて氣まづき夫婦の仲を知り

吹雪して故郷を想ふ人となり

病床に春を迎ふる三度

諦めへ春のめぐるも面白し　同　小松　しとし

おしつこが銀糸に見えてよい月夜　同　大阪　素月

患者をば待たせラヂオで相塲聞き

飲んでゐて親の苦勞をふと思ひ　同　同　卜居

中古の足袋と自分を見比べる　同　神戸　明坊

牛の瞳のうるみすゞめらおりてくる

空靑く靑くカナリヤの死

政治向なども話して服屋去に

病床の子

讀んでやる塙團右衛門に笑ふたり　同　京都　京美三歳メ　正祐

娘の歸る時間御飯が吹いて來る

どの友も生きてるだけの年賀狀　　同
おもしろいとんどお畫を敎へられ　　西宮　三代吉
金持つて腋の汗ふく五・一五　　同
のみこんでくれたへあつけなくもどり　　愛ケ池　眞弓

病床　吟

看護婦の手にながれたる日を想ふ　　同
眉墨がはつきり判る嘘をきゝ　　松江　莞路
吹雪する窓に自嘲をはき捨てん　　同
上役に叛き滿洲職があり　　和歌山　玉兒
下宿して一番風呂へ入れられる　　同
ハツトした瞳と出會ふ長廊下　　京都　半輪子
慰めの醫師の言葉が信じたし　　同
廊雀の老舗をさがす若旦那　　大阪　利生
倫落に泳いで怨つのるのみ　　同
廓一つ讓り合ふてる上女中　　同　栞
これが個性さ勤續二十年　　同
淋しさをます春雨は音もなし　　神戸　茂もよ
なぐさめの言葉のうらがうらめしい　　同

非常時をやとなの三味で踊らされ　巴巷　蕨ク池

アリランを唄ふ鮮女のうら若き　同　愛媛

昨日から急に冷たく左遷なり　宵明　同

火藥庫へ消燈ラッパ妖氣じみ　同　埼玉　いね三

風邪聲のお醫者は皆に親しまれ　同　今治　史郎

寒明けの水にも母の信心氣　同　同

子の爲に四十を過ぎて紙細工　たし路　金澤

社寶だと云ふのに逢へば只の人

杵の音病んでる父にたよりなし

今雨君祝結婚

晴やかな二人へ母も座り替へ　同　鶏天　藪川

正體もなく靴下も疲れてる　同　たけを　大阪

麥が好き芋が好きなり貧乏性　同　岩石　同

効能をきかせてからの注射針　同　三思樓　神戸

流感に死なせてならぬ妾の子

せき入る母へ燈明もえつくす

初午へ母と二人の膳につき

愛の巣のまだ當分は二階借り

日本の春安んじて耳そうじ　同

秀才で若く博士で親しめず　髮ヶ池　公平

惡友へ今日は幸ひ金がなし　同

窓に來て男にこりたタイピスト　香川　葉香郎

粕汁を子供啜つた顏になり　同

逢ひに行く氣で出たまゝのふところ手　今治　五郎

お早ようもそこ〳〵女中井戸へ行き　同

見た様な畫妹にとへば父の顏　高松　茂都子

新婚の友

愚痴を云ふにもあなたの嬉しさう　同

納骨へ乞食やたらに頭下げ　大阪　ライト

生前を悔みにまでも賞められる　同

定期券反對側で待つ土曜　同　佐津美

角砂糖溶けて演藝畫報見る　同

伏線の瞳に甘い男來る　同　絹代

移り氣の自分と知つた窓の雲　同

言葉合して小僧と夜業する　和歌山　昨夕

煙草盆ふつと亡父の影が添ひ　同

山肌のにほひになつてあるいてた　　蘆ケ池　一更

母のからだと思つて生きてゐる　　同

冬春と眞面目な自然ふと感じ　　大阪　天馬

懸引へ算盤玉の從順さ　　同

月給がたゞの男にしてしまひ　　同　小三

眼をとじて君が笑顔にまみえんか　　同

意氣地なく國へ結婚しに歸る　　同　正一

飛び乘りの出來る電車のなつかしさ　　同

ふと下駄の齒にはさまれてもがく夢　　同　白戀

まつ晝間戀持つおとめつめを切る　　同

九官に亦欺まされた臺所　　奈良　柳志

用水桶長脇差の子が隱れ　　同

長男も日の出を拜む年となり　　大阪　本圭

不平少しもつてかえつた下駄の音　　同

腕があるからと失業なぐさめる　　同　彩泡

クツションに凭れて眠い日なりけり　　同

逢へた夜の女が憎いことを云ふ　　高知　映珠

親として考へ拔いた名で死なし　　大阪　千雨

蝶一つ工場へ春を告げに來た　愛媛　默紅

あまんじる娘を正視できぬ母　大阪　萬雷

一年の計を朝から醉ふて。くる　新潟　善知鳥

甘いのはつまりコーヒで得た戀さ　大阪　しのぶ

春なれど我が地下足袋に有る吐息　松江　憲郎

店先で辷れば女將口を出し　大阪　朴甫

鞍替へは一番暗いとこで塗り　今治　尼花

蕎麥喰べて別れる辻の灯が暗い　名古屋　三八朗

往診の車夫等笑つて日向ぼこ　大阪　公子

春雷の音讀さしの本を伏せ　金澤　綠水

聽診器家計不如意も聞かされる　愛媛　孤鶴

香ひする女となつて久振り　石川　醉羊

女よく笑ふ電車の急停車　神戸　木通

負け惜しみ子がほしいとは口にせず　京都　白英

考へがつきて八卦へ妾來る　大阪　美津女

月給日下宿の膳も頭付　愛媛　世都象

骨あげやけものと同じ骨のいろ　大阪　正夫

地下鐵にのり空襲の話する　神戸　德三

落ちついた暮し我家の臭ひする　大阪　桂風

金借りて戻る足音淋しいな　今治　詩の武

猿又の紐がもつれて氣がいらち　大阪　小松園

人ごみに人を戀ひ行く夜となる　今治　一風

ステップを踏みバスガール強く生き　大阪　白蝶

友情も信じきれない恐しさ　京都　君男

嬉しさは氣安く酒のめる仲　愛媛　南葉

氣の強い女よ母がないそうな　尼ヶ崎　まさる

披露宴花嫁ビルに着きたまふ　大阪　野郎

スパークが空想破る宵の街　京都　曉子

別々の心でのんだ酒の醉　今治　バット

傷魂に温き手ぞ悲しけれ　大阪　潮

六神丸二粒のんでなをるかね　山口　宙芥

順番でやつと博士に診て貰ひ　大阪　美和

兒の首席卒業式に母は泣き　同　笛秀

洋服の商人背中丸うする　泉州　華坊

ほめられて居てはお金が出來ません　大阪　菊路

梅小路馬は澄した面で來る　京都　清春

カムフラージュ禿げた女給の朝となり　大阪　陸舟

名乗られぬ子へ十年のかわりよう　京都　朗笛

二日醉ストーブへ來て愚痴を言ひ　大阪　耕汎

高らかに笑うて子なき女なり　高知　青雨

まどろめば復々線の響する　大阪　花涙

童貞の散る日さびしく椿落つ　島根　一雄

あきらめて女氣のないとこで飲み　大阪　斜山

指先の職が猫背にしてしまひ　神戸　規堂

妹までだまし淋しく街に出る　大阪　白葉

あゝ叩けば響く彈力の友慾しき　松江　夢迷

病床吟

湯のふえぬまゝ痩せてゐて浸り切り　京都　貴代志

宿命論者に師走の風が吹く　大阪　以都女

分量を誇り食堂儲けてゐ　京都　丁路

催促を逃げて喜劇を見て歸り　大阪　元山

慈善鍋カフエー街の中に置き　堺　一柳

冷雨霏々ルンペン小屋の鼻唄よ　大阪　いの助

膝組めばチト牛肉に遠くなり　愛媛　白羽

ベリカンの首をもたげた朝の冷　大阪　水客

公用へ澄んだ大氣のなかの息　北海道　慕秋

未だ俺の世帶になれぬ首細し　大阪　いわを

春の風五勺の酒の頰に吹け　今治　伶人

氣を變へて見た夕空の赤いこと　大阪　一羊

斷りもなしに寫眞屋額に入れ　同　はるを

鍬を休めて朝の陽をおがんでゐ　臺中　耕朗

辨當を長官だけは喰べてゐる　高松　柳夢

階級が素直な戀をさせるなり　大阪　寒草

脚の裏見せて飼猫顏洗ひ　愛媛　健二

失業の身は吾れ乍ら低い腰　大阪　牧人

京阪遊走

清水の舞臺で人の世のピエロ　加賀　義風子

伊勢初詣

手拭を腰に日の出の二見浦　大阪　昇鯉

末法の世に金網を張つた塔　鶴ヶ池　左人

おちぶれた男眼鏡のふちがさび　松江　あきら

この頃の寒さに部屋がひろう見え　京都　久朗

帶動の胸から先へ兄歸る　大阪　さとし

算盤のけたを忘れて飲まんかな　鳥取　法泉子

獸性の指圖の儘の夜の底　大阪　泉流

葉平氏を圍みて

子の話父眞劍な顏となり　今治　小樓

女工等は初午祭へ隱し藝　大阪　良之佑

大山をながめ朝寢の齒をみがき　松江　榮吉

麥踏みの煙管啣へて頰冠り　大阪　堅

雪の日の夜勤へ靴をことづかり　松阪　沃里

月寒く袂に錢が鳴つてゐる　大阪　陸奥夫

鈴蘭燈今日から俺も戀を持ち　松江　冷兒

眞心へ女は少しもてあまし　大阪　阿古

蓑虫の出來心かな秋の空　今治　輝親

カフェーの音ばつかりで更けてゐる　大阪　白蛾

金の夢海老の如くに炬燵に寢　廣島　蛙庵

純金がウインクしてゐるエコノミスト　松江　梟人

失戀のベンチへ投げた己が影　今治　禧純

飯喰へと子を起させる風邪の妻　大阪　素萠

この下に子供が居ます滿員車　同　勇夫

川柳時評

福田山雨樓

中間派と云ふ言葉と本社の態度に就て

「たまむし」の昨年十二月號に松盛琴人氏が書いた「句より眺めたる川柳の進化」の中に路郎先生の句を初め、曾て「川柳雜誌」に載せられた句の多くが「所謂中間派の代表作品」として與げられてゐる　當時琴人氏は本社の同人であり、あの原稿の由來に付ても僕は預り知るところがあつたので、わざと默過しておいた。內心琴人氏は不用意な言葉を使つたものだと、穩かならざるものを感じてゐたのであるが、これは性格的に憎めない同氏の認識不足に基く瑕瑾として敢て問題としなかつたのである。ところが最近松丘町二氏（氏も琴人氏と共に最近迄本社の同人であつた）から僕への私信中に、本社の態度を目して中間派云々の字句があり、この儘で默過しておくことは一般の誤解を招くに至る憂もあることゝ思ふので、一應辯駁の筆をとつておきたい。

尤もこの中間派と云ふ呼び方は曾て「氷原」でも五呂八氏が書いたことがあつたが、それはしかし主として本誌の經營方針と云つた方面に對する呼び方であつたやうに記憶する。ところが今度のは明かに句（それも雜吟）そのものを列擧しての呼び方であるから、單に認識不足として濟ましてゐられぬのである。それにしても多年本誌の爲めに働き、本誌に據つて精進を續けて來た琴人氏に、斯樣な見方をされたことは甚だ遺憾に想ふところであるが、と云つてこれから書きたいと思ふことは一琴人に對する辯駁ではないのだから、その點ははつきり言つておく

一體句の傾向とか主潮とか云ふものは、大まかに決められるべきものではなく、個々の作家について仔細なる檢討を遂げ、その個色的獨自性が濃厚に表はれた場合に、初めて總稱し得るのである。その個々の色彩が比較的少人員の集團に於て、類似の傾向を辿つて進みつゝある場合に於て、或は革新派とか、自由律派とか云ふ風に指稱することは妥當と云へるかも知れないそれ以外の場合に於ては（假令それが讃辭を呈する意思にもせ

よ）輕々しく何々派などゝ決めらるべきものではないと思ふ。殊に中間派と云ふ言葉は通例、革新と傳統の旗幟が鮮明だつた時代に使はれたので、今日の如く兩者の對峙が意識的に終熄せる場合に於ては、無意味ですらある。

「川柳雜誌」の態度は從來から中間派でも何でもない。本社の主義主張は從來屢々聲明した通り、（一）初心者指導、（二）川柳の社會進出、（三）柳誌の經濟確立、（四）川柳の質的向上、（五）川柳の文壇進出、（六）個色作家の養成、（七）評論、感想、研究の發表機關等にあるのであつて、初心者にも誌面の幾分かを提供する關係上、比較的未完成の句、陳腐なる句、平凡なる句も時になしとしない。從つて、その雜吟欄に於ても玉石混淆の實があるかも知れない。その意味に於ける不透明さはあらう。けれどもこれは川柳の進展と普遍を祈る精神から、敢て辭せない措置であつて、進んで低劣に伍する退嬰の歩調ではないのである。

以上述べたやうな本社の眞精神と苦衷とを知らずして、本社の態度が微溫的、灰色でもあるかのやうに速斷するものは、高踏に走り過ぎる潔癖者か或は共に語るに足らない凡庸の徒である。

ところで筆が走り過ぎたやうに思ふが、琴人氏は決して「川柳雜誌」を中間派として斷定したものでないことは、爾餘の文章に依つて察知出來る。只書き方が不用意な爲め誤解を招き易いのだと思はれる。それからも一つ、斯る問題となるべき例句をあげる場合、句主及出所を省略することは面白くない遣り方だと思ふ。尙句に付て一々批判を加へるならば意はよく通ずるのであるが、誌面の都合でそれは避けることゝしたい。その代りに僕の最後の切り札をあつさり出しておかう。實はこのことが最初から言ひたかつたのである。自惚れかも知れぬが確固たる信念の下に。

それは「川柳雜誌」の執りつゝある、若くは勸めつゝある作句精神とその表はれは、川柳に對して最も忠實な、最も價値的な道を選んでゐると云ふことだ。も一つ言葉が許されるならば最善であると云ふことだ。

斯う言へば益々手前味噌になつてくるやうであるが、論より證據、路郎先生がいつも句作について敎へられる言葉、即ち「いのちある句を創れ」「非凡なれ」「眞實を詠へ」「響きは强く、鋭く」等は恐らく何人と雖も否定し得ない句作上の信條であり要諦ではないか、しかも「川柳雜誌」の門戸を潛る限りに於て、何人と雖もこの言葉の洗禮を受けぬものはないではないか。

決して誇る言葉ではない。最初にそして最後迄植付られた信念そのものなのである。

久良伎翁に筆劍

久良伎翁を尊敬し謝恩することにおいて、敢て人後に落ちないつもりの僕が、翁に筆劍を見舞ふなどとは誠に穩かならぬものざしではあるが「三味線草」一月號に翁が書かれた「甲戌柳壇を迎えて」の中に路郎先生の「君見たまへ菠薐草が伸びてゐる」に對する一項を讀んで、何としても僕の良心が默殺を許さなかつたからだ。

斯う云ふと如何にも翁に對して私憤を洩らした公開狀、のやうに思はれるかも知れぬが、そんな意味では毛頭ない。

名吟「菠薐草」の句が――しかもあの句は路郎先生の創作の歴史過程に一轉機を劃した記念すべき作品である――翁のあの文章に依つて、飛んでもない誤解を受けるやうなことがあつては大變だと（僕はあの句が冒瀆されたとすら感じた）思つたので特に此の標題を掲げたわけである。

さて翁は「過日ある川柳の雜誌と稱する人が、手拭へ自句を書いて配布しました。

君見給へホーレン草が伸びてゐる

と云ふのです」と書いてゐられるが、其の場限りの話ならまだしも、麗々しく雜誌に載せる原稿として、甚だ不謹愼な書き方である。その手拭には確かに「路郎」と書いてある筈だ。これは「川柳雜誌」の路郎氏の句であるが、と云ふ風に書くのが禮儀だと思ふ。字も原句とは違ふがこの場合その點には觸れまい。そして次に

「某君曰く、ソレは私のお仲間の碧梧桐や井泉水のやる變態俳句の一種で私には川柳とは受取れません」とある。この俳句老大家の言葉は氏の勝手な獨斷であるからてんで問題にならない問題は次の

「余曰く、いかにも此句は川柳として其君と云ふ人格が分らず會社員か官吏かワカラない、又其場所もはつきりしない、ホーレン草が八百屋の店にあるのか、郊外の畑にあるのか、其郊外ならビクニツクの場合かソレ共他の場合かも判然しない。川柳としては極めて約束連想に缺けた、抽象的概念的の句で川柳としては極めて幼稚の句だと思ふ。それより、むしろ

君見給へ君の鼻毛が伸びてゐる

とでもしたら川柳らしく感じられる、此句が良いとか、惡いとか云ふのでなく川柳の範圍を脫し俳句へ編入さるべき者なることは確かである、此等の人の速かに反省あらんことを望む次第である」といふにある。尤も翁の場合は獨斷は獨斷でも多少見解を示してゐれるから反駁も出來るが、斯樣に單純な感受性で句を見られることに對しては反駁も骨が折れるので、幸ひあの句に付ては「川柳雜誌」第二卷第一號に永尾宋斤氏（同氏は俳誌「早春」を主宰してゐられる有名な俳人です）が「菠薐草の一句から」と題し、堂々五頁に亘る評論を書いてゐられるし、又「川柳雜誌」第七卷第八號にも松丘町二氏が「振幅」と題し、あの句を引例した川柳詩論（この文章は町二氏幾多の詩論中でも最も感動と示唆を與へた名篇の一つである）を書いてゐるからそれ等に依つて參照が願ひたい。で、句の鑑賞の相違點從つて

粒々集

―路郎選―

鎌倉　富士野鞍馬

未亡人又轉向をする惱み
相談をするのを好きと別に持ち
前掛を氣にして女中猪口をうけ

松山　前田五健

人間の油斷木の芽が驚かせ

萬策は盡きたり凭れ込む技術
馬鹿らしい事におじぎをする係

弘法大師千百年遠忌

霞から霞へ四國縫ふ遍路
雪洞の底に去年の花らしい

御影　長崎　柳秀

見送に掏摸の出さうな出世振
洗濯の母を離れぬ水あそび
セフアードに散歩をさせる朝を起き
スキー場たのまれて來る處でなし
旅の恥女房に云へぬ面白さ
晩酌にへんてつもなし妻の留守
養生は俺には出來ぬ酒の味
探し物誰れかさはつたやうに云ひ
松過ぎてもとの姿の妻になり
夜着きせる手つきも戀の姿なり
うなづいて女のぼせた顏をあげ
奉公の二字を忘れた朝の床
萬歳の舞臺の夫婦羨まれ

大阪　長谷川一徹

令夫人こんな踊は知るまいが
淺智惠を擴げ來賓御祝言
何をする人か知らねど同じ風呂
一刻の死時魔ありけり堺筋
切れますかなどゝ業物のぞく輩
暴力も良しこの腕を貸して見ん

翁への反駁についてはその方に讓るとして、僕の指摘したいのは、翁がものを書かれる態度に一考を煩はしたいと思ふのである。一言にして云へば、大家は輕々しく筆を執るべきでない、と云ふことだ。翁が毎號「川柳倶樂部」や「三味線草」などに執筆される努力は全く敬服に堪へない。殊に一生川柳を止めないと心に期してゐる自分には衷心感謝と羨望の念禁じ難いものがあるが、努力の量は兎に角、翁の川柳觀乃至それに根ざした一家言は實に千遍一律の感が深い。大家はさうお念佛見たいに一つ事を何度も何度も繰返すものではない。況んや翁の江戸情調鼓吹の一徹さと來たら次第に相手にするものがなくなる程、陳腐なものであるにおいて、全く氣の毒になつてくる。翁は若い者の言ふ事にも少し耳を傾けられて、よく時流を洞察し、若い者が心から首肯し敬服するやうな議論なり意見なりを吐かれるやう留意せられたならば、翁の威信と聲望は益々加はり、其の永き川柳生活に有終の美を加へられることゝ信ずる。翁は自信も強いがそれよりも自我が強すぎるのだと思ふ。卒直非禮の言は翁を心から崇拜し畏服する情熱の迸ばしりであることを寛恕せられたい。

「菠薐草の句」に對しても篤と前記參考論章を閲見せられ、更に條大なる論歩を以て應酬せらるゝならば刮目して待望するでありませう。

「川柳倶樂部」二月號に品川陣居氏が「恐る恐る久良伎先生に進言す」を書いてゐる心持とは別の意味で、そしてより謙虚な意圖において翁の猛省を乞ふものである。

詩價の測定

西田艸樂

◇嘗て、賀川豐彦氏が、「涙の二等分」といふ詩集を出して、世に好評を博した事があるが、當時、文壇人、詩歌壇人達から、その標題が數學の問題集のやうで、堅くるしいと批難された事を記憶してゐる。

にも不拘、私は今茲に、化學の計算問題の如き題を掲げた事を笑ふ人があれば、何卒最後迄讀み終る迄、可笑しさを御辛抱願いたい。

◇一、清酒　一〇〇グラム　無銘市販品

本品は蒸米に、種糀を蒔き醱酵せしめ、水に浸漬し絞搾し得たる、澄明、微帶黃色の液體にして、滲透性の香氣を有し、特有の味を存す、是れが分析を遂ぐるに、

比重　一、〇六六〇八　酒精二〇、六(容)　エキス分九、〇六二

糖分　一、四二　糊精〇、九四　グリセリン一、二七〇

全酸　一、七九〇　粗白質窒素〇、二一〇　非蛋白質窒素〇、五四三　殘餘水

此の成績によれば、清酒としては優良品である。而て、右表の如くして、各種の清酒を分析してそれ〴〵、成績表を作つて見ると、大同少異の數字が表はれる。

併し、これでは分析の結果の優劣は決るが、直ちにその數字を以て、高級の數字を示すもの、萬人の嗜好に適するや否やは論外である。酒はその材料たる米の質にもより、酒造りの技倆により、天候の加減、水質、其他の條件によつて、出來上りの成分、風味等が違つて來るし、又之を飲む人によつて、甲を好み、乙を賞すと云ふ次第で、「白鶴」が口に合ふ者もあるし「富久娘」に限るといふ者もあり、「白鷹」、「松竹梅」の如き高價でなければ美味としない者もあつて、酒の酒たる本領を發輝し、其價値を讃へらるは、そんな化學者が百分率の成績表を示したとて、大體の優劣を決めるめやす位にはなるが、大して關りのあるものではない。又、化學者が、それ程各成分を分析したとて、その各成分を組立たら人工的に清酒が出來るかといふと、理化學研究所（東京財團法人）あたりで造られる理研酒位なものは出來るが、天然の釀造によつて出來た、銘酒に比して、その芳醇なる風味は、眞似し能はざる處である。

右に掲げた成分は、極めて大雑把なもので、そのエキス分といふ中にも、更に十種類以上の微細な成分に分ち、そして人工清酒を造る組立にしても、尙天然と同樣のものは到底得られないのである。天然は人智の及ばぬ處にある。

◇けれども、よく醉ふ酒、醉はぬ酒、甘味の多い酒、水臭い酒、醒い酒、惡醉せぬ酒といふ注文のもとに、他の事は第二として特種一二の要求に應ずるものなれば、人工でも出來るし、釀造時の手加減によつても、ほゞ注文に近いものは出來る。

◇そこだ、詩、歌、其他藝術品にしても、穿ちのもの、洒落なもの、ユーモアなものといふつもりなれば、少し手法に馴れて來ると出來はする。併し、假に川柳にしても、時計師が時計を作る樣な譯には行かない。時計師なら造つたものの、齒車が何個、螺線が何個、文字板が何センチと分解してその性能を立派に說明し、之を操る事が出來やうが、川柳はそんな風にして創るものでないから、自分が創つたものでも、時によつて出來不出來があり、自分が句を釀し出す力、個性、情操といふものは時にとつて如何ともし難いのである。故に川柳なども決して人工品ではない、又人工品ではいけないのである。

◇だから、他人の作品については、科學的の論據から評價して行けない事勿論であるけれども、さきに掲げた酒の分析表は、各成分のパーセンテージによつて、人々の嗜好に當はめて行く上に於て、大なる効果を奏する事を否め得ない。その如く句も古來の傾向を參酌し、近代の尊重される標準を知り、而して叙法、素材、迫力といふ事から點檢して行けば、句の優劣を定むるに或程度迄の成績表が造れ得るので、特に變態的嗜好を有する人でない限り、よいものを良いとし、惡いものを惡いとするのに大きな開きが出來まい。それ故句に天地人、五客等の等級を附する事も選者の嗜好によるの一辯を以て否定し得べきではない。作品に等級が附せらるのは當然の事である。

◇萬國の度量衡條約では、世界中に只一個の白金イリヂウムかの、寒暑に對する、膨脹收縮率の最も少い合金を以つて作られたる原器といふものがあつて、それに準じて、各國に同樣の原器一個宛を備へ、度量衡の精確を保たれあるから、日本の百グラムも、英國の百グラムも厘毫の枉差を見ないでよいのである路郎師が嘗て、自らを選句機械にたとへられた事がある。その文中正確な精密な器械程、選句は精密であるが、粗惡な句には器械の損失が甚だしいと云つた事を言はれた。少くとも川柳吟社にとつては、白金イリヂウム位な原器を備へつけて置きたいのである。それでないと近來の如く、途方もない句（例ば遠慮する差支ないものは追つて述べる）が飛出しかけた日には、川柳といふもの、どこへ飛んで行くか測定するにどの尺度を以てしていゝか解からなくなる。選句の標準とか、これが川柳であると示す原器に等しい人物を持たず、同人達が勝手に句を作つて、勝手に印刷に附して、川柳であると稱して世に出されるものゝ中には隨分困つたものがある。

◇自分の樣な事をいへば、折角の微妙なる藝術品の味を機械的ものして甚だ冷い味氣ないものにすると早合點する人があると困る。で、最後に我が社の原器に當て、合格した佳句の數例を示して、私の冷めたい文章を讀まれた口直しに、御馳走したいと思ふ。

食堂の同じ物をば殘すなり　新水
いざのむとなれば流石に灘の人　亂耽
正月の酒がこゝにも倒れてゐ　綠雨
醉ひ足らぬだけ神樣の酒を借り　閑生
庖丁へたかゞのり卷一つ賣れ　二南

句をめぐりて想ふ（續）

阿部閑生

奇拔

奇拔のスタートを切つて、一路眞實のコースを進み、遂に滑稽のゴールに入る、個人としての句作の過程を跡附けると斯うなつてゐると云ふのではなく、斯くあるべしと主張するのでは無論なく、斯ういふ經路を辿る者も百人に一人はあつてもよいと思ふ迄である。

關口柔心翁といふ人は猫が庇から落るやすぐ起上つて走り去るのを見て、請け身と當て身の妙を悟りわが國柔術の祖となつたと云はれてゐる。耳で見て眼で聞くすべを知つてゐる川柳家は猫を見て悟る前に、自ら犬猫の地位に身を置いて人間を見直す必要がある。前屈みに杖に倚つて歩く老人、倒れたまゝ起上らうともせずわーツと泣いてゐる子供、何れか奇異ならぬものはない。更に一個の中年男を拉し來つて夜となく晝となく彼が目的の空しき工作を微細に觀察するならば、いよ〳〵失笑せざるべからざる一擧一動が間斷なく展開されるであらう。そして必ずしも奇想に限らず、平凡事も續々天外から來ることに氣附くであらう。

植木屋の嚏が松の高さより　氷炭

眞實

凡そ摑み難きはものゝ眞相である。あらゆる事物を說明し盡しても肝腎のところはぽつんと穴があいてゐる、よしんば政治のコツが其處にあるにしても文藝の的は正しく射拔かねば承知の出來ぬものである。探せば中心にありながら觸れてゐて摑めない、眞實はそれ臍の如きものかと歎ぜざるを得なくなる。

一歩退いて云へば「模索こそ眞實なり」と云ふことになる。これを圖解すれば群盲撫象の姿である。いきなりその尾に觸れた者は「象は繩のやうな動物だ」と頓狂聲を出し、腹を撫る者

は「ふゝ象は壁のやうな動物だよ」とにつたりすれば、背の低いのが脚を抱いて「象はこのとほり柱のやうな動物ぢやないか」としたり顔する。あの六百一幅の繪に外ならない。

青春を掴みぞこねた金遣ひ　路郎

滑稽

奇拔の圈外をめぐり、眞實の裏を描いたフキルムは今私の胸壁に、次のやうな字幕を明かに映出してゐる

「涙を過ぎて沈默あり、沈默を過ぎて滑稽あり」

漱石の云つた「死ぬことの外は盡く喜劇である」の言葉を早わかりする爲には、太陽のネヂを捲いて地球の運行を百倍位早める事だ。その目まぐるしい廻り舞臺に躍り出る百面相のかずノ〳〵、即ち椅子席から眺めた人生は道化以外の何物でもないのであつて、見よ、明日の傾向を論議すべき時に何の滑稽なんかと眞向から嘲殺してかゝる嚴肅にして悲痛な種類の人こそ、最もよく道化を演出すべき役割に配されて居るではないか。

七百餘種の譯本を出して、聖書の次ぎに多く讀まれてゐるといふドン、キホーテの著者はレパントーの海戰に捕虜となり、幾度か脫走を企てゝ失敗する毎に取扱ひの苛酷が加はり、虐げられたる五年の後やつと自由の身となると生活のどん底に墮ち旅役者にまじつて慘めな月日の中にこの書が成つたのである。それ程面白い本か否かは別として、これによつても滑稽の門は入り拔け出拔けではあるが、遣瀨ない涙の淵の彼岸に建つてゐる事を知らねばならぬ。翻つて今日の川柳を見渡すと、高低鋭鈍どの句もどの句も幸福な作者を持つてゐる事を祝福せずには居られない。

頂上に立てば日本は山ばかり　綠雨

句の妙所

一度發表した句は取消のしやうがないから表現の手を最後まで緩めない必要がある。この點の粗漏が川柳の輕視される大部分の理由だらうと思ふ。實感が現はれてゐても平凡と單調だけでは物足りない、樹の幹に瘤があり竹に節があるやうに一句のうちにも何處か妙所があつて欲しい。

十文字槍の名人高田又兵衛が紀州南龍公の御意で其の臣大島流の槍の名手と試合はねばならぬ事に立至つた。さて槍を取つて立つや目にも止まらぬまに對手を突き止めてしまつた。餘りの呆氣無さに「今一槍所望」との申込を受け「死人と槍を合はすことは致しませぬ」と云つて引上げたとの事である。句を作るにもその意氣で、一句毎に辭世のつもりで練技完成の句を吐きたいものである。

退屈のいきなり力瘤が出來　雀竹

錬金術師

笑ふからおかしいので、涙が出るから悲しいのだ。といふジエームス、ランゲの言は俄かに信ぜられないが、新しい句があるから新しい理論がたち、新しい運動が起る順序に間違ひはないらしい。

錬金術が他の元素から黄金を造らうと苦心して、黄金を造るかはりに化學を造り上げた。その化學が他の元素から黄金を造ることを完全に否定してしまつた。理論から詩は生れないものだと云ふ事を肯定するために理論は大いに必要だといふ迄のものだ。

自動車の搖れるに任せきつた醉ひ　榮　二

大器晩成

弓を學ぶ者は大きな的から次第に小さい的に進み、最後にかちり〳〵と金的を射るに至るのだ。苦心を拔きにした名人の手並みを見ただけでは本筋を悟れない。藝術の殿堂も亦土足のまゝで駈け込むことは許されない。

「もう五年生かしておいて呉れたら、本統の繪を描いて見せるのだが」と云つて九十歳でしぶ〳〵死んだ葛飾北齋は文化六年に音羽の護國寺で、四斗樽に墨を入れて藁の箒で百二十疊敷の厚紙に大達磨を描いた。それから本所で同じ大きさの馬の繪を畫き、兩國で布袋の大畫をかいたが、其すぐ後で一粒の米に雀を二羽かいて世間を驚かした。この人は畫道の上ならば何んな藝でも出來たので、横にかき逆さまに畫き、指頭で描き、卵で、桝で、德利で畫いた。極端に無愛嬌で同程度に無精で朋輩からは排斥せられ師からは破門され、糊口のために唐辛子賣りとなり一文も賣れぬので暦賣りにかはり、知名になつてからも逸話だらけの一生を送つたが、大成するのはこれからだと云ふ氣持は最後まで持つてゐたらしい。川柳も嗜んだがどんな句を作つたか私は知らぬ。

まだ死なぬ勢見せて揮毫する　一　久

句と句評

句評といふものが隨分微に入り細を穿ちながら重きを置かれない理由は、多くは句に對する好惡と鑑賞以外に出ないからではなく、句とは別に獨立した評言だけを買つて欲しいらしい言ひ廻しからでもなく　權威ある評者は同時に選者でもあつて、誤解されたる迎合を避ける爲に自由な批評を憚るからでもなく實際は句の優劣よりも親疎愛憎による人の關係に基いて、友人の句は上げて他人の句はこき下ろすに決めてをり、同僚の句は褒めて他派他流の句は貶すことに決めてゐるからであり、同僚のうちでも少數の人に偏しない好意の發露から夫程でもない句を、さも名句でもあるかの如く最上級の評語で滿遍なく押上げやうとするからである。この遣り口が句評を輕からしめるに與つて大いに力があるやうである。

それとは趣を異にするが、ある俳誌の合評欄で採擇された一句を例の如く順次に評してゐるのに、その上五音の配列に注意を拂ひ五音の中に使つてある一つの漢字を抽出して、點睛の一語と無上に賞めちぎり、この字によつてこの句は活きこの字を除けばこの句は死ぬ、一字一語も忽に出來ないことを指示された句だ、お互に心得置くべきであると皆が皆感心して了つてゐる所が何の事はない其の一字は誤植であつたのだとは、豈計らんや。

子を叱る順番もある寄り世帶　禿　山

未醉未醒

全然かけ離れて獨りで生きてゆく方法がない以上仕方はないが、不得手な事に半分頭を突込んで悶搔いてゐるのは端の見る目も辛い。何事にも自我を忘れて沒入し得る人は幸福である。

灰屋紹益は吉野大夫を身請してこれを溺愛し吉野が三十八歳で病死した時は悲歎遣る方なく、遺骨を灰にして酒に混ぜて飲んでしまつた都をば花なき里となしにけり吉野を死出の山に移して、とはいゝ氣なものだ。戀に限らず藝術でも事業でも酒でも乃至人生そのものでも、全く沒頭ができれば樂しいに違ひはない。

立腹の自分の鼻が見えて來た　芳　岸

水月一如

岡本某の一搖りで「平常心」がぐらつき出して「明鏡止水」に書きかへた鳩山前文相はこれが貴院をほろりとさせた文句だけに、讀み直して自分でも悅に入つてゐるやうである。

月光寒いある夜ごろ、はや深更といふに巡査が關口水道へ來かゝると、一個の黑い影がくる〳〵と裸になつたかと思ふと、ざんぶと水煙をあげて跳び込んだ。それとばかり巡査も脫ぎ捨てゝ跳び込んだ。少時は相追ひ相搏ちて水中の至技を見せたがやがて前後して堤上に立つた「姓名は」と息か喘んでゐる「桂月」と簡單、「あん、理由を云へ」「月を捕りに」「月ぢやない、身投げの理由を云へ」銀鱗まだをさまらぬ水面を眺めて「水も映さず月も映らず」と踵を返すと陶庵公の雨聲會の時よりは若い聲で朗々と詩吟し去つた當時春浪と好一對の酒豪大町桂月が酒後の散策の足が伸び過ぎた餘興に外ならなかつたのだ。

人生觀金と酒との違ひなり　柳　秀

不即不離

古事記の異說では木村鷹太郎の希臘說はその尤なるものであつたが、更に遠き昔太平洋に沈下したレムリヤ大陸の神話だと云ふのがあり、宇宙創造の天文記錄だと云ふのがある。八雲立つ出雲八重垣妻ごめにの歌詞は混沌時代の作にしては整ひ過ぎるやうであるが、それよりも其のレムリヤ人の云ふのが現在北米の西海岸シエラネバタ山脈のシヤスタ山中に通貨も有たぬ別社會を形成して生存してゐると云ふに至つては耳よりどころの話ぢやないが神話の端くれでも殘つてゐるか何うか。

いづ地の神の末裔かは知らないが、產みに產み殖えに殖えて我國人口九千萬、殘りの亞細亞八億六千四百萬、歐洲四億七千八百萬、北米一億六千二百萬、南米七千七百萬、阿弗利加一億二千萬、濠洲九千萬、全世界の推定人口十八億人の半數が非常時を叫び、日本は孤立を、英佛米露獨伊それ〴〵に危機を叫ぶ翌年、翌々年、强弱共に國運を賭するの時　支那よどう動くつもりか。

決斷のにぶい男を犬が嗅ぎ　大　門

武玉川初篇研究（三）

梅本秋の屋
森東魚
蛭子省二

（696）

たいこの顔の殘る墨染

省二＝何にかに因て發心して、墨染を纏ふても、太鼓持時代の面影は、やはり殘つて居る。（或は悲しみの折りの喪服を着たのでせうか）

東魚＝矢張り僧衣の方ではないかと思ふ。

秋の屋＝一念發起して俄道心となつたが、まだ前の幇間らしい、とぼけ面が失せぬのである。

（697）

時あかり女心をよろこはせ

東魚＝縫ひ急いでゐる樣な場合であらう。ぱゞッと一時でも薄い日さしでもするのは、五月雨時などにどんなにか女達は喜ぶ事であらう。

秋の屋＝五月雨の宿である。

省二＝女性の感じが現はれてゐる。

（698）

瘧あけくの損をした貝

省二＝發作的の患、瘧の擧句は疲勞と苦痛のため、氣のぬけたような、損でもした面持ちのものだ。

東魚＝全くぼけた樣な顏になる。短兵急にきて時間が過ぎると、ケロリとして、たゞグッタリなつてしまふ。私も朝鮮にゐた時經驗がある。

秋の屋＝如何にも物を取落しでもした氣がするであらう。

（699）

垣間見に美し同士の湯かこほれ

東魚＝よく場合がわからぬ。湯は入浴の湯で、垣間見られ

たと氣がついて女同士一時に湯に浸つた、湯があふれたと云ふ事かと想像するが、甚あやしい。

秋の屋＝伊勢物語の初段にある、春日の里に住む姉妹のやうなのが、前說の如く透見をされたので、二人一時に湯槽に浸つたのであらう。

省　二＝表現が難澁ではある。

(700)

妻の出立に餘所目して居

省　二＝妻君のフエルト草履でも揃へてやるのが現代のハズ昔は妻の出立を知らぬ顏をして居る、そこが亭主振りであつた

東　魚＝着かざつた女房をみて見ぬやうな。クスグツたい氣持でゐるのだらう。

秋の屋＝ア、滿艦飾だな、餘所の奴等がみたらば何と云ふだらう。と口に出さずに、鼻の下を長くして看てゐるのである。

(701)

兵庫の命室へ着く船

省　二＝室は室津の事、今日では神戸大阪に勢力を奪はれたが、江戸時代は九州四國への繫船港として要所であつた。

東　魚＝兵庫行の書入れの樂しみは、室へ寄航する時だとの意であらう。

秋の屋＝前說も首肯れるが、「命」の字があるから、兵庫附近で暴風雨に遭ひ、漸く命拾ひをして、室へ着船したのではない歟。

(702)

稻妻にその氣の付ぬ門田守

東　魚＝稻妻などはあまり見馴れてゐるので物珍しがる都人なら、その氣もつかうが、門田守にもとめぬから、シカと見ても見た氣がしない。

秋の屋＝稻妻には「稻つるみ」だの「稻の殿」などと、種反の理屈があるけれども、農夫は其樣な事に氣も附かず、只みてゐると云ふのであらう。

省　二＝「その氣」に二樣のお說が出たわけ、さてドノ氣であらうか。

(703)

焦るゝと言ふ人の夕くれ

省　二＝夕暮はセンチメンタルにするものだ。（前出に等しい作があつた）

東　魚＝別けて「焦るる」ものの身になつては、ヒシ〳〵と哀愁を覺へ、或はときめきを感ずる事であらう。

秋の屋＝少し氣が拔けたやうな句で、天窓の中にピンと來ない。

(704)

看板を見ても入齒の哀也

省　二＝入齒の看板は、哀を越して、氣味惡しし。

東　魚＝多少滑稽にも見えるものだ。柳樽の調子なら「入齒は哀なり」とやるだらう「の」の方が連想にうつたへ處が多い

秋の屋＝昔の松井深水の看板は、總入齒の上部を、文字の上に篏込むであつたが、餘り看よいものでは無かつた。

(705)

假名で書せる鴛の賣上

省　二＝鴛鴦などと書くのはむつかしい、假名でかいて事足る。

東　魚＝漢字でかくとイヤに六ケ敷字だが、假名なら又馬鹿に簡單に「をし」ですむ——單にそのおかしみ丈けであらう。

秋の屋＝讀むで字の如き句であらう。

(706)

橘丁に夜畫の顏

省　二＝踊子へ夜畫の熱心

東　魚＝「夜晝の顔」と簡單な巧い云ひ方だと思ふ。
秋の屋＝踊子に熱心で通ふ客の顔であらう歟。私は夜と晝とに使ひ分る踊子の顔だと思ふ。

(707)　**國家老日は赤々と太夫買**

省　二＝古川柳では國家老を、朴念仁に取扱つてゐる。晝日中の太夫買などは、國家老らしい遊び方。
東　魚＝却てそれが眞の大通なのかも知れぬ。芭蕉の「赤々と日はつれなくも秋の風」の句を、匂はしてあると思ふ。
秋の屋＝「日は赤々」は、朝日か夕日であつて、白晝の日とは思はれない。芭蕉の句も夕陽である。

(708)　**惣身を耳とおもふ當言**

省　二＝あてこすりが耳に入つては、惣身の神全を耳にしてしまふ。
東　魚＝からだ中を耳にして、とよく講釋師なども云ふが、巧い言葉だ。
秋の屋＝盲人には斯る場合が多からう。

(709)　**刈人の丈イも五尺のあやめ艸**

省　二＝百花譜には「あやめは小づくりなる女の目を病る心地ぞする」。
東　魚＝芭蕉の「ほととぎす啼くや五尺のあやめ草」によつた句構である。
秋の屋＝異議なし。

(710)　**湯屋の二階は侍の物**

省　二＝浮世風呂卷頭の挿畫をみても、二階へ侍が上つてゆく。
東　魚＝面白い。侍て反感を感じたやうには取れぬ。洒々落々とした句振りが嬉れしい。
秋の屋＝昔の湯屋の二階といふものは、武士に必要であつたので、其れは下の脱衣場では、兩刀を置く所が無い故、己むを得ず二階に上つたものだと云ふ。

(711)　**鯰を提て田の中を行**

省　二＝句意平明、やがて賣られるのか、汁に入れられるのか。
東　魚＝前句と呼應しなければ、面白さがハツキリこない。單にこれきりでは報告みたやうだ。（或は大事の田を踏みまくツて、つまらぬ鯰なんか大事さうに提げて行くと云ふ處をねらつたものかも知れぬ。
秋の屋＝私の舊宅の裏は一面の田圃で、夏の夜は鯰突きとて手にカンテラを提げて、畦路を歩いて鯰を捕る者が多く有つた

(712)　**蠅をうつして代る關守**

省　二＝古川柳に「見附番蠅をうつして代り合ひ」と。
東　魚＝ユーモアがある。關所の佗しさも連想出來る。
秋の屋＝見附番よりも關守の方が、野趣が有つて面白いと思ふ。

(713)　**冬の牡丹の魂て咲く**

省　二＝「冬枯の庭に又照る牡丹哉」（卜我）で、寒牡丹を魂で咲くと賞したもの、さもありなむ。

東　魚＝魂で咲くは如何にも、キビ〳〵した表現だ。凛たる花の姿が思はれる。

秋の屋＝冬牡丹の句には、感傷的なものが多いが、此句は常套を脱してゐる。

(714)

きのふけふ起請の指の冷て居

省　二＝小指を切つた時は、夢中であつたが、昨日今日と冷えて痛みを覺ゆる。（吉原には此手管があつた）。

東　魚＝指が冷える。然かも戀ゆゑに切つた指が冷えると云ふ處に、淋しさ哀愁がある。

秋の屋＝戀ゆゑに截つた指ならば、冷も痛も覺えまいが、金故に截つたのであるから、冷が感じるのであらう。

(715)

無い齒を鳴らす百日の行

省　二＝年寄が辛抱して、苦行をする。

東　魚＝陰慘な氣分がある。無い齒を鳴すと云ふに滑稽味を感ぜず、凄じさを感じさせる處が手柄だと思ふ。

秋の屋＝玄冬に水垢離でも取つてゐるのである。

(716)

あふなからるゝ商人の衣

省　二＝商人が立派な、みなりをして居るようでは、末が思はるゝと云ふのか。或は危險だと云ふのか。

東　魚＝商人がよい絹の着物を着るやうでは、奢に長ずる樣では、商途が危まるゝと云ふ意味であらう。

秋の屋＝昔は中産の商人でも、店頭に出てゐる時には、總て木綿物を着てゐたので、絹物の長羽織などは、殊に擯斥されたのである。

(717)

眞向な顏の多い入舟

省　二＝入舟の際は、皆港の方を向き眺めてゐる　上陸の樂しみなどあらう。

東　魚＝早く上陸したい心持ちで、ぢつと陸を見てゐるのも人情の然らしめる處だ。句としてはその輕い味が面白い。

秋の屋＝斯る光景は、私も看た事があるが、餘り巧まずして要點をよく捉へた句である。

——初篇　終。

初篇研究を卒へて

森　東　魚

兎に角、蛭子君の勞を感謝する。一つ二つでも、皆さんのお說を補ひ得たものありとすれば、私の滿足此上もない。然しつく〴〵難かしいものだと思つた。第二編に進むに先立つて、特に秋の屋翁の御健在を祈つてやまない次第である。

梅本秋農屋

明治の末に、阪井久良岐氏が「川柳五月鯉」を刊行して、頻りに古川柳の研究に努められた時、偶々私に對して、難句の解釋を訊れれ、其れに應答したのが動機となつて、「青柳」「獅子頭」の誌上に

をり〳〵愚說を發表した事が、遂に世間の人々より、古川柳研究家と見做されるに到つて、一人窃に苦笑を禁じ得なかつた。其後「鯱鉾」の寧堂家となり、亦「柳多留研究」に掲載される「柳多留拾遺」の輪講の共述者の中に加へられ、亦近く竹馬居君の發意で、「武玉川」初篇を輪講する事となり、私も依憑に由つて驥尾に附くことと成づたのである。此「武玉川」は人の知る如く、「柳多留」の先驅をなしたものであるが其所載の句の格調は、彼れ此れ多大の相違が、有つて「柳多留」の句は、江戸時代の町人の如く、少し野卑 る點が有り、「武玉川の句は、當時の武士の如く、やゝ高尚なる點が有る。亦、十四文字の短句は、此れに有つて彼れに無 所で、現代の作家等が企て及び離い、奇絶妙絶の句が多く發見される。世間には古句研究無用論を唱へる者も有るが、其れは全然謬見で、新川柳の作家たる者は、「柳多留」と併せて此「武玉川」も研究すべきであると私は思ふ。

今回、私がこの輪論に加はり、多くの難句に逢着して、解釋し得なかつたものゝ、尠からず有るのは、頗る慚愧に耐へぬ次第だが、古句研究家の少數であつた、明治の末頃に較べると、今日は多士濟々で有るから、縱ひ私の解釋し得なかつたものも、能く解釋し得る人が、後に續いて出るであらう。私はそれを窃に期待するのである

蛭子省二

初篇研究は四月中旬（昭和七年）から、筆を興す、十月上旬一應了つた。約半歲を要した。市魚氏からのお端書（四月二十四日附）に武玉川輪講第一卷本日御送申上ます。丁度昨日ふら〳〵と雨の中を嵐山へまゐり人が少しもゐない實に靜かな嵐山の風光を味ひました。記念に丁度尊稿を持つてゐましたから大悲閣の印をもらつて置きました。

雨洗ふ碑の句親しき落花かな

とあり、輪講册子に二題が寫されてある。

此研究が讀者諸氏に、理解され且つ親愛をも得た事は、その後援振りでも判知し得て頗る滿足にたえぬ。時に當こすりのような事を書いた徒もあるけれど、兎も角「武玉川」の全解は、本稿を以て始とするのである。

秋の屋氏から、倒れる迄やるとのお端書を頂いたが、どこへ仕舞込むだか見當らぬ 六月二十六日附のでは

老生に於ても最早餘命も僅かならむと云へば息の通ふうちに勉強致すべくと存じ候實兄は御壯年の事にもあり充分の御加養ありて柳界に御蓋力あらむことを祈り申候

私は持病のため、非常に體の調子が惡るく、果して當刹の希望通りついてゆけるかどうか不安を覺えた。藥餌に親しみつゝある身は、最後の數十句の分の如き、何にを書いたのか判らぬ程、苦痛を感じ家族からも注意をうけた。九月十四日附秋の屋氏の御書翰中に

武玉川輪講は誌上の都合もあらむと思へば徐々に掲載する方然る可きかと存じ候。貴君は餘りに古句の研究に努力せらるゝ故に御體に障るかと御案じ申上候。老生などと事かはり斯迫に無くてはならぬ御方なれば平素充分御靜養なさるゝ事祈り申候

と、御見舞を蒙つたが、間もなく（九月二十一日）倒れて、如何ともなし得なくなつた。が只初篇の終つた事柄に於て、安神と慰安の下に感謝しつゝ、第二篇に着手するの日を樂しみとした。いづれ視角を替えて初篇をも檢討はしたい。（昭和七年十月三十日記）

追記＝輪講册子は原稿紙に淨書したので、燒棄する事にした。

江戸のうはさ

▼三月四日、飴ン坊の墓に詣でられた柳友會の同人諸氏より奇特な寄せ書を頂戴。

▼三月五日、「きやり同舟會」の寄せ書拜受。

▼品川陣居氏目下「啞三味・陣居——川柳評論集」原稿整理中尚ほきやり記念號へ、長編「前田雀郎論」を執筆中との事。この二雄篇期して待つべし。期して待つべし。

▼三月十三日　「川柳研究」到着三太郎氏久方振りに二頁にわたつて堂々「短冊」頒布するの辯」を述べられ、無料强請揮毫にわづらはされる柳壇名士の身邊をつくづく歎いておられるが、同氏の短冊が三圓といふ限定額で求め得られるとはいきり決れば、著々亭宗匠は今迄より以上の揮毫のうるさゝを感じられる程、申込が殺到するにちがひない。

▼三月十五日、「柳友」つく、同誌の一ヶ年合點局長杯は、綿貫青峨氏獲得せらる。四月には、「一周年記念」が出、といふ「柳友」期待すべし。

▼きやり三月號に、御約束通り三太郎氏番象を俎上にのせて、「柳誌月評」に鮮かな古刀の切れ味を見せ、快哉！快哉！

▼啞三味氏の推擧により、陣居氏新たに、「柳談會メンバー」に加名いたされし由　三月の同會幹事は太郎丸氏ださつだが、氏の名幹事振りは未だ耳に入らない。

▼「メモ」四月號に、太郎丸、雨吉兩氏の句が五、六十句宛掲載される運びとなつてゐるときく。「潮騷」にまとめた拙句も、同誌に轉載される豫定。この糸井武雄氏の勞に對しては、小生多謝の外なし。

▼茶六、啞三味兩氏より「四月には逢へると、たのしみだ」といつて來られてゐるが、麻雀に一言も觸れてないのは心細い。きやり大會の準備に夫々の部門で忙殺されてゐるのか、このごろあまり「東念寺麻雀ニュース」に接しない。四段不二郎、二段醉月の打牌ぶりにも、今度は是非敎へゝ乞ひたいと念願してゐる。

▼全國のどの柳誌をみても「きやり全國川柳大會」の廣告が眼を射る。四月のきやり句座へは各地からわんさ〳〵と押しかけて柳壇史上特筆すべき豪華句座を現出する事であらう。想ふだに壯快！

▼三月十五日—芥子粒句會、十八日—晝は三越川柳會の春季大會、夜ゝ川柳研究句會、二十五日—柳友會一周年記念句會で、東京はまさに句會黄金時代の觀がある。

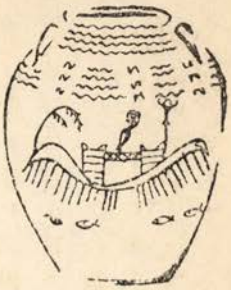
▼正岡聲氏より舊暦仕立て御年始ハ挨拶狀をうける。彼氏の更生メニューは「時代ユーモア小說、青春ゆうもあ小說、創作落語、漫談の製作と實演」そして鄭寧迅速、興味無盡がモットーださつで、ジャン〳〵御下命のほど、彼氏　代つて私からもみなさんに御願ひ致します。

▼きやり四月號では三太郎氏が「川柳雜誌」評をものされる由、刮目期待

▼今夏啞三味、陣居兩氏が大阪訪問の豫定だゝの情報あり。鶴首。

▼この頁も今月で半年になる。貴重な雜誌を、六頁も汚してきた。駄文の罪おそるべしゝ思ふ　今月位が退却のよゝチャンスであると私考するから、一ッづ之で「江戸のうはさ」を打切るもし拙文をよんで下さつてゐた方がありとすれば永々御愛讀の程ひとへに御禮申上げる。

迷亭氏は「江戸」の字が氣になると言はれたが、將來この頁を復活する機會があれば、さしづめ「東京の聲音」とでも名付けやうかと思つてゐる。（亂耽）



川柳塔

路郎選

福田山雨樓

電球に網が・公衆電話室

亡き養父に似た自轉車がやつて來る

戀の瞳にはあらず妻の虎眼

路郎先生渡滿を見送りて（三句）

大阪の煙を蹴つて旅の窓

旅の窓へ原稿の束渡される

國の海は光つてませう詩と夢に

このごろの綠雨兄に（二句）

話すれば只川柳のことばかり

病院と家と街頭へ重い靴

山本丹路

資本家よ稚拙の妙を知らざるか

貧しきにあらずくらしが手にあまり

十本のたばこが空になつたゞけ

陽のおちることを女中に教へられ

五分ほど鏡と居れば死ぬならむ

或るときは尻尾をもつて引きずられ

不覺にも口を衝いたり佐渡おけさ

空に聲それ見たことか見たことか

住田亂耽

母體健全に純喫茶のマダム

歸朝して描く青い村青い川

路郎師滿洲川柳行脚

異境の空の拋物線くれる

君達といふ名に於て侮られ

ルンペンと自ら名乘るのを恥ぢず

人間を燒くに別ある火葬料

白足袋の方面委員無表情
鮮やかにマッセーをする戀敵　朝田新水

死は易し甲板まではさう思ひ
職工の腕組だけを注意され
葉牡丹のしほれし如き娘の家出
失職のあきれた事に論をする
外交の戻りこんなに冴えた月
恨みの禮をいつまでも聞く
いつまでも曳子息子が無心に來　關本雅幽

借金とともに人物出來かゝり
妻を說き伏せた淋しさに眠れず
よき父たらん日々をうろたへて
咲くからに病む散るからに病む
春の夜の女に風がみだれたる
世の中を話すマントの裾がきれ　春元紀太

さかなやはさかなの匂ふ錢で醉ひ

自制心ここまでなれば惚れてよし
家族だけそう信じてる敏腕家
書遊び色足袋で來るなじみの妓

波止場にて

なごり紐波止場氣分で持たれたり

奉祝踊を見て

自尊心踊りの輪から一歩のき　吉田水車

豆の皮拂ひ電話を聽きに起ち
御用聞き其處のコーヒも飲んでをき
劇場のやうに銀行灯をとぼし
お嫁入り福引ほどにならべたて
忙しい筈が手製の卷煙草
母の手で主なき雛を飾りたり　阿部閑生

ベン擱いて犬の開けたる戸をしめに
櫻餅一つ殘して客はたち
舷庫の戸外れたまゝに春となり
夕飯を妻の讀みさし讀んで待ち

僕の頭痛と君の頭痛とはちがふ

橋本　綠雨

酒つぎに出るマダムのつめたい手
鐵柵がくちて資本家三代目
チップだけのおぢぎに外は寒い風
病室の滿月が氣をやはらげる
病人に貸借のことたづねてみ

西田　艸樂

あいつカンニングしよるねんと小さき憤り
俺に眞似は出來ぬがこゝをこうもせよ
踏み迷ふて何にもならぬ花を摘み
堺筋しばらく立つて見てゐ給へ
行く末を思ふ妓にその糸が切れ

加藤　文醉

考へて置けと氣前のいゝチップ
花の留守家主は春を敎えられ
今借りた金から切符代を出し
失戀を慰さめるのに酒が要り

○　喜多　春秋

女房の怒つた顏のうつくしさ
吊皮を持つて淡嶋さんもゐる
活字に組んで二頁ほどの怒りなる
大阪の灯から神戸の灯へ歸り
妹のいでたちスキー列車にゐ
飲み仲間自分の事を他人のやう
草の露踏んで家出のフェルトです
自轉車の　先　と　右　右　左　右
病人の耳へ飛行機飛んでゐる
笑ひ乍らもうたのまぬと腹をきめ
寒い鼻湯呑の中へ入れて飲み

平井　冬呼

梅林出張寫眞寒むう立ち
女給するつもり別れるつもりなり
鷄を飼ふて田舍のレストラン
女給もう弟の無職氣にしてず
門口も出ずに一ト月養はれ
袂からホテルのマツチ女給出し
地味な襟かけて女給も幹部なり

ひざ堅く消毒箸の客になり
怒鳴つてる顔はお金がありません　大鶴喜由

久し振り逢ふ友達の爪の垢
やつぱり春が來て居る告知板　合服にちと早すぎる球をつき
蒐集家が忙しいのか痩せてゐる　西村明珠

借りに來て苦勞の足らぬ手を見られ
本願寺母と坐れば廣すぎる　昇給のうはさ默つて待てぬなり
改札で少し大きな子もあはれ
一字丈け違ひ受附叱る事　白粉をつけてゐるのへオイと呼び　明石柳次

當然のやうに山菓子貰はれる
代理代理がつゞく燒香　オブラート神經質な指の先
臨終へ行方の知れぬ子が一人

小大丸賣出し手傳ひにて

二十七コートあづかる役もせん　結婚の弟へ

新世帶硬且つ軟の使ひわけ
母の眼にあんまりひどい接骨醫　これ印よ俺とお前も久しいな
飲む人の舌にすげない處方箋　おごり返しおごり返してはてがなし　石森靜太

火葬場のけむりは美しくながれ　朝鮮出兵の弟を想ふ

雪がチラ〳〵新年の手があれてゐる
吹雪して看護婦さんがきれいです　ははの手紙墨のうすいがさみしまれ
風ありて一つの灯けさむとす　村田新市街

足元をあぶながられて落日で居
金言のこんぼんにふれ鼻をかみ

蜜柑の色に純情の娘がくすれ
紋服のうつろに立たす石疊
平然と寫す寫眞に罪があり　江戸みつる

ダンサーを醉はしてノーチケットで居

病床のあや美君へ

日本は春だ君の全快待つばかり
おでん屋のコロに大阪懐しく
月はたゞ下界見下すばかりなり　彼女へ

相傘で送られし夜を思ひ出づ　水谷鮎美

雪みせてやろか子を抱きながら醉ひ
兒が泣けば明日をわすれて抱いてゐる
朝の霧いのち忘れてゐたりけり

夕鐘君の結婚を祝す

海越へてきた花嫁のまごゝろよ　奥野禿山

撞球場誘ひに來たは十五なり

B氏より搾りA氏へ貢ぐ戀
宿直にラヂオの止んで借りの事
桃色の遊戯の相手有りせとば　芝四葉

白魚とまごふ指なり口づけん
死んでから病名だけはつけて呉れ

マルタマ酒場に於て（二句）

たまさかの酒場天井眺めてる
帽子とる事は忘れぬ醉つぱらい　姫田夕鐘

君ちつと柳に風となりたまへ

奉祝踊

顏してくれる娘はんが膝のせて來る
孝行をしますふたりは手をつなぎ　石曾根民郎

寢にゆかず母は炬燵の火を案じ
職工の戀の電話を取次げり
妓の名刺刷つて渡しにお出掛けか
電柱と煙突話しこむよなべ

市塲沒食子

春が春が姙娠女としてしまひ
やつと内金にお世辭がありつきぬ
考へる事あり布團敷してくれ

中澤濁水

通勤の眼に暮が殖え家が增し
宿醉のどこに預けた折鞄
人格を酒は分析する如し

後藤青兒

眠れない夜は子供をかぞへて見
たまさかに病めば夫を大事がり
割箸へ國の話がまだつゞき

日野華水

ふぐ仲間思ひ出してる雪の空
搖籃へ思ひをはせて父となる
金言をペタツと貼つて朝寢する

北川あや美

病床にて

日の丸の旗はためいた街思ふ
中食が二圓の戀をどうします

寫眞結婚悲劇

小をんなの故の破綻ぞ記事淋し

近藤勇

節分を彼氏の好きな髮で待ち
女學生笑ふ聲にも春の艶
男の子大阪音頭で戻つて來

眞田幸捐

長靴を干して魚屋定休日
北陸の雪へかうもり傘をつき
日曜の人出をよそに武德殿

熊谷紅

ウエトレス造花へ春の身繕ひ

熱の手を延せば午前二時が鳴る
家賃拂はず鬼は外福は内　大西八歩

妻と子と母に涙ぐむ日の多く
道具屋で聞けぬラヂオの巾を取り
金を取る方も遠慮はしてるなり　越智虹子

石丸春峰兄男子出産

神國の春へ男の子が生れ

松ヶ枝遊廓にて

いつぱしの妓としての帶の巾
略歴は夜學の事を言ふてなし　毛利九波

安全なとこから敵を射つてやろ
級會おけさになると仲居來ず
レヂスターコーヒ一つのあさの音　笹田角丸

飯粒になつて汚なくはじかれる
キリストの教に惱む十八九
美しい女へ聖書思ひ出し　平井春光

見學のしつこく聞くは萬歳師
朗かな女給うどんが好きといふ
十二から酒を覺えた流行ッ妓　尼絲之助

ちと醉へば女の戀のはゞからず

縣議選擧風景

理想選擧ものゝ美事な御落選　長谷川三汀

初生兒死す（二句）

よく寢入れ初湯の湯醒めせぬ内に
み佛を抱けばかる〳〵際間風

竹内機見女

ハンディキャップと春のかすみによふ女
はゝがはゝがの友の話をじつときく

首藤竹楓

澄み切つた心にきこゆ落葉踏む

伊吹スキー場にて

三合目雷の中なる竹の皮
親の氣も知らずお下げを結ひたがり

宮岡白峯

ともすれば白粉つけて戻つて來
卷ぎやはん大阪の土奈良の土

湯原美笑

兄嫁は俺れの嫁でもよい若さ
なま意氣な子供親より脊が高い

廣江天痴人

果樹園の春噴霧器が孕む虹
叔父さんを叩いて逃る敏速さ

平井冬呼

信仰の倖せ借金忘れたり
人形で居ればと女給氣にもせず

荒井英賀夫

集金の重さも悲し人の金
子を生まぬ女房利殖を考へる

石丸春峰

他人にまで貸す金子には出ししぶり
眞直ぐに歸れと巡査まだ若し

植山九天

椅子の足がたつくまゝに年度末

子の癩疹

頰おちて俺に似て來たとは淋し

渡邊曉童

すれ〳〵に歩くは戀でないのなり

松下小柳子

池は青空をうつして誰を待つてゐるのか

雜筆春秋

熱河の話

岩崎柳路

昨年六月憧の熱河入りして以來各地ジプシー生活して居るが今では馴れたせいか餘り印象に殘つてゐるものが少ない。其れでも內地の諸君には一寸珍らしいと思はれる事を紹介します。

(一)電信柱に花が咲く……

まさか花は咲きませんが、朝陽から凌源迄の百二十粁間始終トラックで往復した私が、四方山を見乍ら流石はと思つたのは通信兵が架設した國道の各電杭は山より生木を伐採して其の儘建てたので、どれもこれも皆芽が出て青々とした小枝が延びて居た。是も熱河風景の一つ。

(二)馬賊より怖しい……

熱河特有な蝎と云ふ寧ろな毒蟲があり、其れに刺れると立所に全身に毒が廻り一命をとられる。昨年十二月號キング連載小說江戸川亂步氏の「妖蟲」を此書に示した如く百足に蟹の樣な爪を生やし、尻尾に針のある一目見てぞつとするグロテスクな毒蟲で、兵隊さんにも相當犧牲者があり、熱河土民は馬賊より怖しいと云つてゐる「蛇蝎の樣に忌み嫌ふ」言葉は此の蝎と云毒蟲から傳つた諺と思ふ(寫眞參照

(三)秤り賣の酒……

覺悟の上の酷寒なれども、上戸黨のコボス事は日本酒は凍り、火に溫めて呑めば不味く　ビールは結氷して割れ、熱河の冬期は酒類全く不可能なり。支那酒は凍つた固形を割つて秤で掛けて賣つてゐる高粱酒は强烈なるが故に火で解かせば我々には丁度よし。

屎籠乍ら糞尿は金廷子とシヤベルで取り瓶に入れて運び去る。お蔭で臭氣を感ぜず。

(四 熱河土民の神仰……

私は目下軌道布設工事に從事する數百名の土民苦力を監督してゐるが、現場移動の時村から村へ驢馬で連れ歩くが、各部落に小さな御堂があり其の前を通る度に苦力共は一樣に歩みを留めて禮拜する。先づ蹲づいて右足を膝に折り重ね左足を後ろへ投げ出し、左手を地面へつき右手

を額に當て數度頭を下げて拜んで行く。土民の深き神仰心に感動される事多々有り。其他面白き實驗談は又稿をあらためて送る。（大同參年舊正元旦記、於熱河凌源）

街に住めば

高橋かほる

生玉の表門を東へ行つた所の、堅氣の家並の中に出節の柱にやまと家根の粹な、新建表札は東愛子とあるので嬉しかつた

足袋をはくのが嫌ひ？いつも素足の食滿南北氏に會ふと、今日はりりしい紺の足袋をはいてやはつたので……

「殿様が召せばりりしい紺の足袋」の古句を思ひ出して嬉しかつた。

傳說を語る（一）

苧ケ瀬池さわらじ餅

加藤文醉

昨年の五月、名古屋鐵道局案内所の佐藤氏や名古屋旅行協會の松川氏や日本遊覽案内所の伊藤氏等と共に、傳說の蒐集會なるものを設け、全國名所舊跡に殘された隱れたる傳說の蒐集に沒頭しつゝある私なのだ。そして、先づ名古屋を中心として各名所地に存在せる面白い傳說の蒐集に傾注したのであるが、その効や奏し、今日では一冊の著書にせんものと意氣込んでみる程、色々なものが集つてゐる、その中で私の蒐集した傳說を本誌を通じてお目にかけることゝする。

さて、名岐鐵道新鵜沼驛で各務ケ原鐵道に乘換へ苧ケ瀬驛下車北へ約三町餘り當に滿々と水を滿へてゐる美しい池がある。この池を苧ケ池といひ、次のやうな奇しき一つの傳說が秘められてゐる。

昔、この池の近くの里に北面の武士の末なる小池貞友といふ人が住んでゐた、或日のこと尾張の國の本宮山に詣で歸途一人の美しい女に會ひ、その女を連れかへつて妻とし、睦じく暮してゐた、やがて子供も生れ夫婦の仲は一層深くなり、十年の年月は水のやうに流れ何の變化もなかつたが、女は各務ケ池の主の大蛇の化身であることが夫に知れるとそれを恥ぢて「もとめなき契りの末の現れて、遂にはかへる故郷の空」と一首の歌を殘しこの池に身をかくしてしまつた。それを知つた貞友は妻戀しさの餘り後を追つてこの池に來て見ると、池の上に「おがせ」の一卷と見ゆる山姥の白髮一束だけが殘つてゐて遂にその姿を再び現さなかつたその後この池を苧ケ瀬池と呼ぶやうになつたのである　今この池中に八大龍神を祀り、痔疾の神として効驗顯著と云はれてゐる。

○

次に日本ライン犬山の城山の北に當つて小さな森がある。村の人達は俗に畑中のお宮と呼んでゐるが、眞墨田神社の幟が立つてゐるから文字通りのお宮様である。此のお宮は鵜沼三千石の鎭守神で、次回に詳はしくお話するが曰米城の傳說と一脈の連絡を持つてゐるから面白い。大澤和泉守が城山に築城するに當り城廓地域内にある鎭守のお宮が邪魔になるため現在の塲所へ移動鎭座させた。ところが翌朝になつて見ると城山から遷座した

祠の道に草鞋の足跡が印せられてある事が明かとなつた。これは前日祠の移轉と共に神様が引き遷りになつたもので、それ故草鞋の跡が殘されてあるのだとしてその尊き草鞋の跡に因む草鞋餅を作つて此の宮の神主から氏子八百軒へ配つたといふ。そしてその俤を偲ぶためその行事は明治初年まで毎年十二月には繰り返されたといふ事であつたが今は廢れてしまつた。私はその神主の家に就いて聞いて見たが草鞋餅といふのは草鞋の形の如く稍細長いものであつたといふ。現在關西線の桑名や四日市などで賣つてゐる餅に「なが餅」といふのがある。その土地の古老に就いて聞いて見るに、封建の昔東海道の往來盛んであつた時代各驛の茶店では草鞋餅と稱して賣つてゐたとの事で、その後星移り歳變り現今の如く鐵道の發達に伴ひ草鞋餅の名稱も名實相添はぬものとなり自然「なが餅」と名稱も變つたものであらう。察するに前述の「草鞋餅」も「長餅」もその軌を同じうするものであると思ふ。此の草鞋餅を復興して日本ラインの名物としならば趣味深く意義あるものと思ふ。

街の風景

Q H A

「君何を欲む」「うちも紅茶」ランデヴーの經驗のあるらしい女給はほゝ笑ましい一瞥を與へて去ります。紺セルの制服金釦白いカラーを高目につけたのが少し氣障つぽい彼と、チョイと洒落れた洋裝の踊子見たいな彼女。

僕達現實惡魔派主義者？共はこのつゝましやかな典型的なカップルに對して、凡そ意味なき戀人よと、會體の知れん罵笑を與へて居たんです。事程左様にロマンチックな二人なのです。彼は僕達の同級生、彼女は喫茶店の娘です。

はつすじの風は初夏です
ネオンがかなり煽情的です
しかも
肩ふれあふて初鮎のごと　愚陀仲のいゝ二人、S座そしてK ISSHINGのオレンヂエード、NAMBA、丹平の棒紅、明治製菓のチョコ人形、土曜日の夜、彼等にサタデイ・クレセント（土曜の三日月）といふ渾名をつけて紅顏の美少年の頰をより以上紅潮さすことによつてわすかに滿足してたんですな。

かくて5月6月——7月になつて我々は二人の姿をとうとう心齋橋筋の何處からも見失なつて仕舞ひました。彼はレツスンに缺席勝ちになり、圓々した頰も神經質にとがつて、その娘も店に出て僕達のでたらめを聞くことも無くなつて仕舞つたのです。

失戀——ボク達は憂鬱なる彼から眞相を訊ねて酒と彼女以外に世にも女の多いことを敎へてやらふと思ひました。夏休——あわたゞしくやつて來て、そしてまたすぐに、休暇中の戀愛事件と倦怠を一掃さすべく二學期を迎えました。彼、僕達一せいに驚異の眼を見張つたのです。ロマンチストがフアツショに轉向、非常時日本の影響かも知れんです。ボマードでくつつけてあつた髪の毛は無慙やいが

ぐりあたまに、顏はネグロそのまゝ正にシューチョーのムスコです。

さては何事ぞありしよな。所が彼ムスコは勇敢に云ふたです。

「彼女NINSHINしたんだよ、僕パパになるかも知れん」。「？」「!!」「！」「★」かくてデカダン派の惡童共完全にT・K・O喰つちやいました。

漫言——

辻いの助

貧乏人であることは、多くの場合、無能者たることになる

×

どんな偉い宗教家でも危險に際して、まづ自己の安全ならんことを願ふ

×

社會の第一線に立つには學問よりも人格よりも度胸が必要である

×

人間は常に第三者であるときの心を備ふべし

×

世間は多角面である、その境遇に應じて違ふ

×

現代に於て「純情」は凡そ「白痴」である

×

金持心理とは十錢費つて二十錢の收得を考ふる

×

笑ひは性格を語る

×

地球から秘密が無くなれば、人間は生きてをれない

タダの理髮場

吉田水車

▽滿場騷然として緊張したり、悠々として矢の様な球を投げたりするのは野球實況放送で聞く愉快なことである。

▽タダの理髮場、と言ふ店が西の方にある。タダなら嘸門前市をなすの盛況であるべきにさてそうでもない。これは名前がそうであるのは勿論乍らわざ〳〵假名にしてしかも麗々しく大きい立看板にしてゐるところなど其處の主人のユーモア味たつぷりを思はせる。

▽近頃電車の通る橋(大體大きい橋)の新造は大方行通整理の關係から片側づつ施行され從つて一方から開通する結果となり完全に出來上つても開通のけじめがつかず床しい渡り初め式も昔語りになりそうである。

▽近代廣告の粹輕氣球應用の空中文字は地上に直角である以上裏から望む位置にある所は避け難く逆文字と言ふ惱みがないでもない。口先きばかりのサービスが流行する昨今、下手に乘つたバスなどでタツタ一と停留場で一區になる時これを注意してくれるのはうれしいことである

▽ある工場へ這入つてはいたづらをする鷄をたまりかねて職工の一人がそつと處分して職用のメスで料理してしまつた。その鷄がオスであつたとは萬歳にもならない。

月評 金★銀★鐵

福田山雨・樓
水谷鮎美

――山雨樓

近作柳樽より

日は黄なり荒き風吹き喰を吹けり　町二

恐らく日没の疲れた太陽であらう。弱々しい光である。それにも増して世に憎まれ兒のやうな風であることか。しかも陽の弱さを感ずる眼に一番つれなく當る風よ。と作者は詠つてゐる だがこの作者は冬の荒涼たる視野が只の風景として眺めてゐるのではない。コンクリートとスピードと雑音と乾燥の カクテルを滿喫して、たまり兼れた叫びを僕等に迄訴へてゐるのだ。そこに句主の息遣ひがあり強視さがある。又自由律川柳を志向する句主、この句は定型律だが）獨自のリズムが持つそれだけに誰でもが見做ふとうつかり川柳から踏み外す句境でもある。

雲の巣をうごかして汽車通るなり　大門

喜劇のスナップである。夢まどらかな二人の平和境を想到するとき、甘美な微笑が春風のやうに流れて來る。句を低誦して見ると思はず童謡的情操に誘はれる。句主の川柳眼はよく客觀事象の構想化に徹し、視野を多角的に放つてゐる。

叙法には 何の奇も巧みもないやうであるが、「うごかして」と假名を用ひたところなど、仲々周到な用意が窺はれる。

五尺六寸五分病床に丸く寢る　晨一朗

この句を「長身のわれ病床に丸く寢る」と改作して見る。月並的感傷の短文でしかないで原句を見直して、その表現の嶄新さと、迫力を感じないわけにゆかない。

この句には滑稽の精神が宿つてゐる。しかも悲痛と壁一重の滑稽である 笑ひの底に涙が湛えたユーモアである。そして飽くまで眞實が詠つてゐる。尊い句だ。

川柳塔より

なりわいのうたてやひとをかい抱く　翠夢

句主はヂンテイスト。毎日老幼男女に接して、商科工作に餘念がない。人妻も來やう、娼もあらう。が、老爺もあ、ば大皷持もある職業となれば仁も亦苦い。

人一倍情熱に富む句主、常に濃艶な句が多いのであるが、これはまた酸つぱゆい。だが生活が滲んでゐる。

晝を寢る仕事と云へば見直され　春光

春光君は自動車運轉者。夜間營業もあると見える。それで正直にその生活狀態を話せば眼をむく人もあるであらう。

この句は それだけのことを物語つてゐるのだとも見られるが、句主の純な初々しい人柄から發散した素直さが輕く笑ひの 拋物線を畫いてゐる。新味はないが調律のよさで救はれてゐる。

――鮎美

三味線を男にかせば裏を見る　末廣

たゞ男と名指されたこの男こそ おんなの

まへに個性表現を爲ーたのである。三味線のその裏をみてどうする氣ゝ問ひたい。風に吹かれてゐるわいなあの藝妓おかるさんの そこにあこがれがあつたのです。男＝I LOVE YOU とおかるさんは解いたのでせう。この男にもこの妓にも 言ひ得ない過去の辛酸のほのみへて三味線の裏をみたと言へば いひきれる。ひとつの凡事ながらなか〳〵この切實な人生の裏に觸るゝことこそ、男にとりておんなにとりて、よき魂の一要素ともなつてゐよう。三味線に輕妙洒脫を感ずるのも男なら、一生を通じてそれにふれぬのも男ではある 男と言つたところにこの句のいくど詠みかへしてみても、良きこゝろがうかゞはれるのであつて、たゞに三味線の裏のみではなく涙六先生の筆にありそうな、すつぱい人生詩ではある。

もみ消したバツトに心よまれたか

靜　波

一擧手一投足を描いたものとして、危懼の念にかられてゐるように 一應はおもはるゝもそうとつてはならない「心よまれたり」「よまれたる」らの如き表現は、かへつて強きにいでて句主のまるきこゝろが 消されてしまふのであろう。下五はやゝ弱き感あるも心のよはさが言つたもので、まるき心情吐露の如實眞人間の姿ともおもへよう。みつめてゐれば小生にうつるものは、虛飾なき體驗詩の貴さがさんらんたる水に若々しく ひかつてゐるようです。素直なこのバット級心理を歪めてはならない、握手した對談の親さがある。こうした手法の、眼にみへざるものゝおくそこに、ひそむものも味はふべきである。

スイツチを切つた心にすきがある

梨　生

スキツチでありませう。すきは有限的でもある。心靈は不滅と言はれてゐる。すでにむすばれてゐない。何れのときでもではありませぬが、この句の場合の心のすきとの表現はおかしく感ぜられる。この心のすきを十七字に詠ひたいのです。すでに息切れがしてゐると云へる。何故ならはつきりとスキツチを切つた事前があまりにも 迷宮であるからです。暗黑にある心のすきの性格がわからないいはゆる善玉惡玉の二つにわけられて ゐないものを川柳眼にも印象がでゝきません。きりむすんだ闇のなかに柳心を はたらかさればなりませぬ。あまりにも不透明な麗人と言へませう。

スキツチの手前に神がゐてくれる

卯　生

スパアクを神の怒りの如く見る

蒼梧樓

こうした、するどき佳い句にひきいられてゐる小生です。この上の御精進を希ひます。

ほろ酔ひのおまえは赤き菩薩さま

丹　路

ある甘露の渦にまきこまれた句主が、ほろよい人生を歩んでゐて夜明けも まぢかでつかまつた紅唇の女菩薩に 觸れないでゐられるのです。その芯。芯をひらけば幻とも夢のかけらともなるのですが、——君の眼鏡がくもつゐますよ、いや水晶ですぞくもりはしませぬ——こうしたことに言葉は盡きないでせう。凡そ指摘なきものこそ廣汎と言へるでせう このクローズアップこそ童眞心理をリードすることともなりませうね。丹路氏をおもふとき定規的な言葉はさけたい。

なほ次の佳吟を推賞してこの筆をおく。

手紙燒くけむりは空にれぢれゆく　某人
米粒のあばら下水の 底 に 有 り　花涙
奥の方に住めば裏か ら 雀 が 來　艸樂
落葉のなかで友を得たうれ しさ　月氏
咲く梅へ軍需工場の 黑けむ り　豆秋
決斷の鈍き男 を 醉 は しとき　新水
あゝ こゝろの 焦點がない 白 飯　羅門
煙突のない施 療 院 淋 しいな　蝶々

日本名所名物川柳

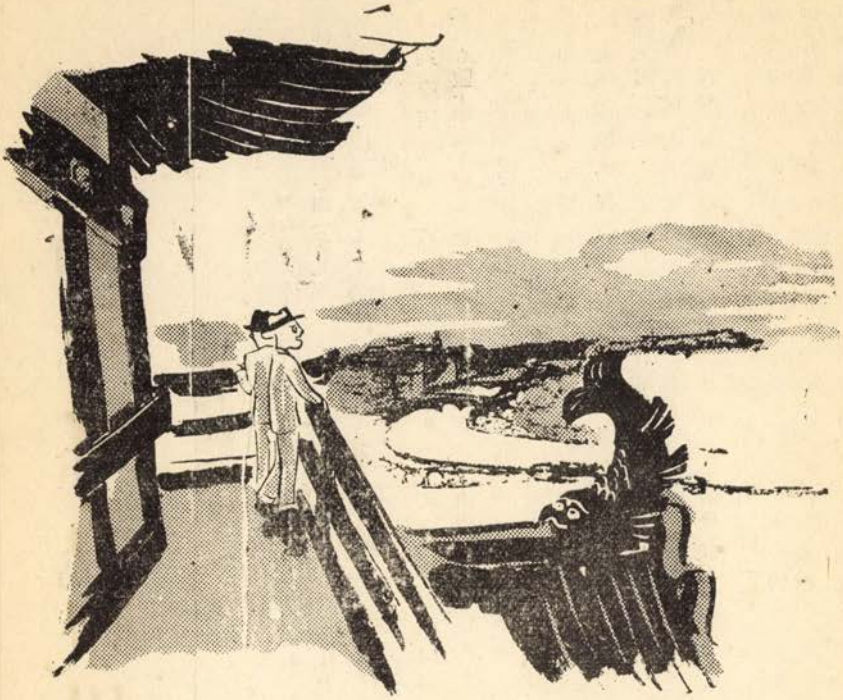
大阪の卷

麻生路郎選
大西長三郎畫

木欄は益々好評で既に道頓堀、大阪の夏祭四天王寺、ダム、築港、新世界、菜おこし、十日戎千日前、で賑いてゐる。盛んに俳吟を授ぜられたい。（路郎）

（一〇）大阪城

太刀さげて走つてみたい大阪城　バツト
大阪城我物顔には大きすぎ　輝親
大阪に住んで大阪城遠し　小樓
大阪城旗のうしろの國なまり　新市街
春が來た大阪城に雀の巣　柳夢
大阪城プランの中でいこふ人　百雷
大阪城歩調をとつて歩いて見　同
大阪城いま白銀の霧の中　四葉
旅客機へ鐵筋の城光る晝　亂・耿
二機三機今大阪の城の上　九波
見當は大阪城が見えてゐる　觀月
大阪市城で大分儲ける氣　豆秋
大阪城起床ラツパへ霞んで居　あや美
大阪城ネオンとどかぬとこに在り　末廣
天守から見る淀川の河蒸氣　同
大阪城石の出所を子に聞かれ　靜波
得意廻りのついでに見とく大阪城　かほる
興亡をよそに大阪城の月　喜由
大阪城疊のやうな石で出來　勇
故郷と呼んで大阪城に疎し　一羊
煙突の高さ大阪城をぬき　春秋



大阪城バツトの男與太を言ひ　變人
エレベーター城の中とは思はれず　角丸
龍石虎石大阪城の風　柳次
大阪城煙と風がありすぎる　綠雨
大阪城煙りか雲かはた山か　葉光
耳よりな儲け話に城を下り　明坊
大阪城あれあの旗が三越で　春峰
スタンプは大阪城も見て戻り　玉兒
照明にくつきり浮かぶ大阪城　利生
わてらかて壹圓ついた天主閣　房子
大阪城閣下が通る道をあけ　たけを
機影鮮かに大阪城の晝　萬雷
久し振り大阪城の影もよし　禿山
天守閣築港まではみへぬなり　曉童
セメントの城とは鳩も知らずゐる　豆秋
春や春大阪城が儲ける　雀踊子

天守閣街の空氣はあの通り　亂耽

川柳パイロット欄

句の重點

福田山雨樓

本號の題は「國旗」であつたが、投句者の多い割に佳句が少なかつた。そこで今回は投句全部に對して添削を加へて見ることにした。その結果作者の考へてゐた句意と異つたものがあるかも知れない。又叙法の點から餘り變り榮えのしないもあるだらうと思ふが句が無難になるといふよりか、何かそこに句としての重點をもつたものを求めたつもりである。

原句

日の丸の國旗尊し御代の春　蛇之助
山家にも監子生れませて旗を出し　柳夢
青空へ國旗平和な模範村　鷗月
燒物にも國旗が出てゝ紀元節　愚堂
百姓家國旗を出して野良へ行き　秀太
尊くも紙の國旗を揭げて有り　利生
日の丸を見つめ君ヶ代歌ひたく　市坊
ふる國旗萬歳の聲壓へ行く　トミヤ
君が代に推されて國旗昇りつめ　三九
日の丸は大和心の赤さなり　天秋
奉祝の國旗へ風はからみつく　清雄
國旗出す事丈忘れない誇り　騰天
末の子に國旗出させていゝ生活　晨一朗

添削句

元日の國旗何やら有難し
山の家皇子生れませた旗を出し
青空へ國旗靜かな模範村
紀元節旗へ太古がしのばるゝ
日の丸は門毎に立て野良へ行き
紙の國旗涙ぐましく拾ふなり
君が代合唱日の丸へ泣けてくる
萬歳の聲紙の旗さける音
惜敗も拍手國旗が昂げられる
日章旗九千萬の胸を搏つ
奉祝の國旗へ風のうなる音
早起きの主人國旗を出す機嫌
末の子に國旗運ばすいゝ生活

である。

川柳の優れた句には、川柳味がよく表はてゐるとか、着想非凡であるとか、感覺が鋭いとかの長所があることは勿論であるが、概括的に見て獨創味があることを見逃せない尤も句に個性が表はれてくるといふ風になるには、多年の作句精進を要する次第ではあるが、常に獨創を盛るといふ心懸けを忘れてはならない。この獨創と云ふことに注意して表理の技巧を修練してゐる内に、自ら個性が備つてくるのである。そして句が尊いといふ根本の理論には、其句が獨創であることに主として懸つてゐるのである。いくら優れた句でも他人の作つたものを眞似たのでは、三文の値打もないと共に、いくら自分の實感だと云つても既に他に同じ句があつたなれば、最早獨創として誇ることは出來ないのである

しかし川柳は僅か十七音字の中に自分の川柳感を詠み込まなければならないのであるから、他人が感じたやうな所謂類想に墜ちる事は豫め覺悟をしてかゝらなければならぬ。そこに作句の苦しみが蓄むわけであり、類想を脱して自已の獨創を盛り得たところに欣びは彌增する次第である。

一年生國旗で甲上ゝつてくるれんれこから兄様を見送る日章旗
童心へ日の丸の旗畫かれるおさな子は繪に日の丸の旗を立て
どの畫にも日の丸のある一年生旗の街暵の奥にならんでゐ
名譽ある家は國旗と撮される國旗まだ買つてゐません新世帶
日の丸に長屋のこかな風があり町内でうちの國旗がいつちさら
夜ふかしの家に國旗を入れてれる初めての國旗の門を妻と見て居る
兩隣見てからそつと國旗出し萬國旗世界は廣いなと思ひ
日章旗父の姿が見え相だ放涙の男へ國旗たれかゝり
ロシヤにはロシヤの國旗あるよ君日の丸を中心に張る萬國旗
新婚の國旗だすにも嬉しうて會場へフツツりきれた萬國旗
凱旋は國旗の彼方へ眼を見張りスクラムを組んで日滿國旗立ち
奉祝もしらずに國旗風になきけふ住き日産婆國旗をみて笑ひ
國旗だらり夕もやせまる補回戰
裏しさは遺骨へ國旗うなだれる

美笑　美ゝ坊　久米雄　久太郎（正一説有）　魚　葉光　冬呼　失名　清春　都留逸　蛙堂　銀杏子　里子　南葉　美津女　伶人　滑床　舜月　水客　ひろみ　默紅　晃路　一夫　照坊主　白葉　規堂

一年生國旗の丸さほめられる
日章旗兄を見送る母の眷
日の丸の旗クレヨンの赤が減り
日の丸を子供にやると振つて見せ
日の丸を畫きおとなしい一年生
旗の街暵の奥が熱うなり
子も孫も兵士國旗と寫される
新婚の國旗まだないまゝ外出
日の丸の長屋になびく風があり
裏町でうちの國旗がいつちさら
麻雀に更けて國旗を入れ忘れ
初めての國旗へ妻と朗かさ
軒並に遲れた國旗あはてさせ
萬國旗地圖でも知らぬ國があり
日章旗父は滿洲の土に居る
ルンペンへ國旗くすぐつたくなびき
ソビエツト眞赤な旗を愛する兒
日の丸を眞ン中にして萬國旗
新婚の今日眞つさらな旗を出し
會場を斜に切れたる萬國旗
凱旋の眼が潤へり日章旗
原頭にスクラムを組む日滿旗
奉祝の國旗へ踊り足らぬなり
けふ住き日國旗をくゝり産婆來る
補回戰國旗だらりと暮れかゝり
遺骨箱へ國旗まともにうなだれる

「國旗」の句にも獨創と見らるべきものがあるにはあつたが、どちらからと云へば獨りよりがりの程度に了つてゐる。獨りよがりではいけない。自分が斯く感ずると共に他人にもその樣に響かねばならない。例へば野球場等で優勝者の手に依つて國旗が揭揚される優勝戰に敗れた方は涙の拍手を送る、と云つた場面には誰もが泣かされるものだが、三九君の「君が代に推されて國旗昇りつめ」では或る莊重さを感じるだけで、さういふ涙ぐましさが迫つて來ない。（三九君の句意は他にあるのだらうが、國旗が恰も君が代の奏樂に依つて推し揚げられるやうに感じ見立ては理窟に走つた嫌ひがあるからとらない）それで添削句のやうに、多少ともさうした場面が表はれることに苦心して見たのである。この添削句に類想があるかも知れぬが、それは論外である。句の配列は同想に近いものを集めた。

次回課題

「母」一句。〆切　四月十日。
宛先　大阪市浪速區湊町保線事務所福田山雨樓宛。但　一般投句と共に事務所へ送らるゝも可

陰口

第一景（言ふ側）

楊井二南選

女の子陰口をして氣が晴れる　いね三
幼にして既に敵愾心に富むは婦女子の通有性。之が長じては次の句となる。

陰口の未だ言ひ足らぬ炭をつぎ　三汀

陰口は着物の柄も言ひ添へて　紅春峰

(佳)陰口の聲はゝからぬ意地がを
若にも通じ老にも通じてあな恐ろし。第三句、中七の妙賞すべし。

陰口へそつくりと言ふ似顔書け　勝二

陰口へ校舍の影が斜に落ち　吉左右
此の二句男性の陰口と見たは僻目か、淡にして邪に墮さゞる論駁以て許すべし。共に異句。

陰口も云はず勤續老ひたまひ　錦城子
若にして既に然り況や老に於てをや。

陰口の番頭だけが叱られる　リナ代

(佳)喜びの膳へ奉公人の口　春秋
雇傭人と陰口は關聯深く類想多々。而も右の二句稀異なりしを喜ぶ。

陰口を後悔させる日本晴　泉

(佳)陰口を合はす障子が白すぎる　新市街
陰口をきく電燈のあかすぎる　曉童
此の三句は真心を取材としたもの。所謂「氣のとがめ」を扱へる同想。之も類句少しとせず、新市街氏の障子は拔群。曉童氏の「きく」は「言ふ」意にとつたが「聞く」なれば第二景に屬す。

第二景（聞く側）

正直な人陰口を聞いて去に　白峯

(佳)陰口に氣の毒ながら興がのり　寒草
陰口を如才なく聞く結髪師　竹楓
三態夫々面白し、靜・朗・賑と比較し得て妙。

陰口に九官鳥は考へる　柳路

陰口を猫も一緒に聞いて居る　シズ女
相似句。九官鳥は一羽であつたが猫は十數匹現れた。

美しい妓の陰口を憎ふ聞き　菊路

陰口は寒い所で聞かされる　元山
再讀して此の二句第三景に屬すのではないかと疑つて見たが……。表現法を作者と共に研究したい。

陰口を夫はかるく聞いて置き　三汀

川柳家戸籍調（續）

（係）山雨樓

（1）姓名（2）雅號及別號（3）生年月日（4）出生地（5）現住所（6）職業又は勤務先（7）好きな句（8）自信の句（9）川柳以外の趣味（10）配偶者及子供の有無（11）嫌ひなもの（12）川柳に手を染めた年月

（363）　正木柳建寺

（1）正木準章、幼名薫、幼名にては四國の人にて同姓名あり、（2）鯨左衛門、元土左衛門、別號柳建寺、別號を多く用ふ、（3）明治廿一年十二月廿七日（4）横須賀市不入斗町一九八、（5）朝鮮京城府三坂通一九二（6）朝鮮總督府中樞院屬（7）餘りに多し（8）菊酒や天壌無窮の醉心地（9）1作菊、大正三年始む、昭和三年御大典紀念に朝鮮神宮菊花奉納の會を發企、以來審査員の末席を汚す、昭和七年明治節齋祓の爲菊湯を提唱、京城四十萬、咸興四萬、元山五萬、木浦四萬の四市地に菊湯あり、全鮮に廣まらん、2南畫、明治四十二年頃鄕左衛門氏の漫畫に誘導され、後南畫に轉、朝鮮美術展覽會に入選四回特選一回、（1）配偶者あり、子供長男廿二歲商業出、舊臘十二月一日入營目下滿洲派遣軍第十師團歩兵第四十聯隊にて精勵中、長女廿歲高女出未婚

第一景に於ける 同氏の句の對をなすもの

(佳)陰口を聞くものに丁稚居る　華　水

中七の手法老練なり、情景ほうふつ、第二景中での傑出句

陰口を乘せてエレベーターはひま　竹　楓

應募集句中類想絶無の異句。惜しむらくはリズムに難あり折角再究を乞ふ。

第三景（言はれる側）

陰口がどうであらうと貯めてゐる　晨一朗

陰口が何うであらうと子を育て　禿　山

相似句。「どうであらうと」は他にも澤山使はれてゐた。

陰口をいと朗らかに知つてゐる　玉　兒

陰口も知つて葉巻の煙が立ち　春　水

陰口へ反抗もなく妻は老け　文　醉

陰口へ眞つ直ぐにゐる支配人　春　秋

陰口をはつきりきいた女秘書　曉　童

無關心或は無抵抗若しくは厚顏に屬する之等の人達には陰口の機關銃も何等攻撃効果を現さないであらう。

中座して高い笑に氣がとがめ　猿　兒

陰口を母何處からか聞いて來る　文　醉

出戻の耳へ御近所怖くなり　柳　志

陰口の淋しい影が映り居る　青　兒

陰口もきいて給仕のさみしい日　晨一朗

以上の數句は奏効した陰口の句。疑惑を起し煩悶を抱き、感傷をはらむ。人生悲劇の陰口に起因すること少しとせず。

陰口の割に臍繰り持つて居す　新　水

同想ある樣でなかつた句。苦笑を誘ふに足る。

(佳)横柄に來て陰口を信じられ　萬　雷

(同)雑巾の濡れ手陰口聞かぬ振り　新　水

橋想の奇、表現の巧、三讀三嘆感を深うした。

(軸)否定する方へ陰口向き直り　二　南

初戀

それは恐しい夢にて初戀の傷痕　茜草女

理性の彼方に初戀が消えそう　茜草女

初戀のなかへ弟愛される　花　涙

初戀に土手の長さが親しまれ　春　水

初戀に大きな空のほゝえみよ　梟　人

初戀へ或日のガラス曇るなり　春　峰

初戀はかなし裸木のゆれ　一　雄

初戀を想ふ瞼へ森と星　春　光

(佳)轉勤の父が奪つた初戀よ　法泉子

廣江天痴人選

投句千數百句の中でこんなのが一句しかありませんでした。そして次のも——

(佳)初戀と知つて貰へぬ女給なり　一　雄

(同)初戀の思出も佳し寫眞帖　柳　路

相當な年輩の人の作らしく ゆつたりしてゐます 僕達も早くこんな境地を探りたいと思ひます 類句類想が多かつた事を全没の諸兄姉よ恨んで頂きたいです。一字一句同じい作品さへあつたのです。

（舊正月の日、天痴人記）

---

(11)威張屋、べてん師、連帶保證、蛇、しらみ、食物に嫌ひなものなし(12)明治卅八年暑中休暇中、大正五年以來十ケ年朝鮮新聞柳壇擔當、大正六年朝鮮嚆矢の朝鮮川柳會創立、大正十一年朝鮮初期の句六千を殘さん爲め朝鮮川柳一千部を上梓、目下六難誌を擔當

(364)　古谷盈光

(1)古谷英(2)古谷盈光(3)明治二十八年九月二十二日(4)埼玉縣所澤町(5)東京市澁谷區下通り五ノ二十五(6)呉服太物商(7)一、二句の摘出はなか〳〵の難事に候(8)昨日の自信は今日の自信とならずこれまた難中の難(9)ザル碁(10)妻あり一女一男(11)義太夫とソプラノ(12)大正三年頃と思ひ候

(365)　角本葬郎

(1)角本金藏(2)葬郎(3)大正二年一月十一日(4)東京市本郷區(5)東京市本郷區駒込坂下町一三五(6)專賣局(7)紅茶かきまわしまだうたぐつてゐる(超兒)この外超兒の句の多く(8)貧しく醉つてへツドライトに惑ふ。冬の子の機嫌りんごのまる嚙り(9)旅行と繪畫(10)ナシ(11)なんでも好きになれる性質(12)昭和四年九月

川柳動物園

岡田某人

狐

——ふゝん、勝手にしやあがれ。いくら位するでせうつ。馬鹿にするにも程があらあ。手前らの白粉臭え頭なんかにのつかつたり出來るかつてんだ。いまいましい。同類達の、あのぶらんとしたざまあ、見ちやあゐられねえや。くさくさする。いつそ寢てこませ。(空を見ながら)もう春だな。あの雜木林も、そろそろ雪が溶けはじめる頃かな襟卷だどうせと狐ふて寢する

狸

僕——ゐるのかい。

彼——ゐるさ。

僕——なあんだ、隅つこで、やに考へ込んでるぢやないか。

彼——大衆小說の構想を練つてるんだ。机は、部屋の眞中より、俺は壁にくつ付けた方が落着いていゝんだ。直木が死んだつてれ。彼奴も無理をしたもんさ。

ちんまりと狸、狸のものおもひ

鹿

彼女——近頃はお煎餅の臭れ手がめつきり減つたわれ。

彼——不景氣なんだよ。

彼女——そうでせうか。

彼——そうさ。見なよ、エテ君の前のお芋だつて、徒に干からびてゐるばかしさ。

彼女——あんた、その刀架、なんとかならない。

彼——駄目々々。昔は知らず、今どき安いからなあ。

青空や鹿の瞳にある回顧癖

カンガルー

——坊や、泣んぢやないよ。お母さんは今考へごとしてるんだから。それも、どう儉約して、坊やのジヤケツを買ふお金をこさへようかとれ。おや、もうこんな時間。そろ〳〵出かけなくつちや。

カンガルー公設市場へ行く形

駱駝

——なに、あゝそうか、紀元節ぢやつたな。道理で國旗が出とると思つたよ。須崎さんから、梅が咲いたといふて來よつた、明日でも行つてみようか。お湯が沸いた。ばあさんや、お茶を入れようか。ついでに新聞と眼鏡を持て來ておくれ。ラヂオに文樂でもあるとえゝのぢやがなあ。

駱駝もうトンビになるをじつと待ち

錦蛇

——いやもう、チエツコスロバキヤだの何だのと、かうガラス時代になつちや俺の自慢の九谷燒もぼつぼつ時代遲れかな。

錦蛇骨董商が二人立ち

水禽

雀——いゝ御身分ですね。お羨しいです

彼女達——でもよしあしですわ。外出一つ出來ないんですもの。

雀——その代り食ふ心配がないですからね。

水禽舎派出看護婦寄宿寮

孔雀

——今夜はとても愉快でございましたわ氣持よく疲れました。まあ、これから銀座へ、素敵でございますわね。是非御一緒に。何なら、それから一寸邦樂座へでも。あら、うちの運轉手がゐませんわ、どうしたんでございませう。あんなに云つてあるのに。

孔雀いま帝國ホテル出たところ

虎

——カボネ親分も到頭あげられなすつたらしい。ジムの野郎、きつと彼奴が裏切やあがつたにちげえねえ。おいらシカゴへけえりてえなあ　看守の奴、やにそつくりけえりやあがつて。この鐵格子さいなきやあ、四の五の云はせねえんだが。何とか早く出て、お馴染のマシンガンで、ジムのどて腹へ蜂の巣をこせえてやりてえもんだ。あゝあむづくすらあ。

あきらめてをれぬ強さを虎歩き

獅子

人間の親——どうだ怖かあないかい。無理ないふと此奴にやつてしまふぞ。

人間の子——怖かないや。出られないんだもの。

獅子の子——お父ちやん、あれ何て云つてるの。

獅子の親——知らないよ。人間なんていやな奴だ。今度出たら、たんまり振舞つてやるから待つておいで。お父さんはあの髭のある方にする。肉がしまつて美味相だ。坊やにはあの小さいのがよかろう。柔かくて骨ごといけるよ。

獅子の子——うん。

美味さうな奴が見てゐる獅子の檻

川柳雜誌社

松江、籔川八束、伯耆 **支部聯合句會**

日時　四月十五日（日）午後一時

會場　出雲ビル、四階（松江市白潟本町）

兼題　「團結」五句吐　福田山雨樓氏選

同　「吉日」五句吐　尼　綠　之助氏選

會費　金貳　拾　錢

（幹事、綠之助、天痴人、柳人、亂笑、都之介、美笑、巷二）

畔柳社吟行句會

日時　四月八日（日）

場所　醍醐（省線山科驛朝九時半）

兼題　「櫻」「握飯」「姿」各三句）

福田山雨樓選

會費　二十　錢

川柳雜誌社大鐵局支部

本社三月句會

三月三日夜　於道頓堀倶樂部

この日風強よく寒さ身にしみしも熱心な集りで感激のうちに句作三昧に耽ける。席匿名兼題〆切後本社同人楊井二南氏「鮫柳交錯」と題し熱辯を振はる。次いで主幹路郎先生拍手裡に兼題「大阪城」を選評の後例によつて輕妙なる口調で身邊近事並に一週間後に迫まれる滿洲國及朝鮮視察旅行の川柳家としての抱負の一端を述べられ、その朗らかさに　としく散會を惜しむ。十時半散會（角丸記）

（出席者）史呂、泉流、丹生、紫石、清美、觀月、一羊、しのぶ、昇鯉、比古、百雷、靜波、富王、ライト、勝二、彩泡、曼陀羅草、白葉、雀踊子。

（本社同人）路郎先生、綠雨、山雨樓、艸樂、豆秋、亂耽、二南、夕鐘、翠夢、沒食子、かほる、變人、禿山、九波、冬呼、青兒、春光、四葉、八歩、稔、柳次、角丸、春秋。

朝寢　互選

訪問着着てから朝寢起すなり　春光

寢過していつそ晝まで寢ると云ふ　四葉

大それた嘘ん朝寢で思ひつき　九波

朝寢せる〳〵と硝子戸寒く鳴り　紫石

雨の音朝寢ときめた日曜日　角丸

片ッ方の鼻が詰つてゐる朝寢　かほる

朝寢して釣瓶の音を聞くもよし　青兒

開き封帶封朝寢の枕元　春秋

母の智惠父の朝寢へ子を使ひ　泉流

朝寢しただけで治つた共稼ぎ　勝二

子守　春秋選

選屋上は子守の遊ぶ百貨店　史呂

今はやる唄で子守あやしてゐ　雀踊子

子守もう乳房のふくらみもつてゐる　山雨樓

酒藏を一べんまはる子守唄　亂耽

子守からまさかと思ふことを聞き　末廣

背の子を預けてピッチャーになつてゐる　清美

弟を背に曲馬の前に居る　同

子守には女給女王の樣に見え　九波

紙芝居見てる子守は子を叱り　觀月

もうぢきに夫が歸へる子守唄　同

今度來た子守へねんねこ大きすぎ　冬呼

めし時にかへつて來いと子守出し　白葉

子守する姿へ友がやつて來る　勝二

紙芝居子守一番前に立ち　比古

子守もう油斷の出來ぬ事を知り　同

道問へば子守のちよいとはにかんで　同

（佳）公園に來ると子守の氣が晴れる　山雨樓

（秀）子守まだ云ふ事があり子をすり　二南

（軸）編棒に見守られてゐる砂遊び　春秋

月給　沒食子選

月給とまつすぐ歸へるアパルト　雀踊子

月給の範圍の趣味で無難なり　九波

月給に妻も杯受けてゐる　靜波

月給の少けない事も承知なり　觀月

月給の單位がちがふ人とのみ　亂耽

月給日下宿のお内儀心得る　史呂

月給を無視する樣に妻は生み　丹生

妻子の心へ添はぬ月給　ライト

月給へ會費〳〵が多すぎる　春秋

（佳）おもむろに頭を下げた月給日　昇鯉

（同）月給日妻の望みを又延ばし　冬呼

（同）月給を思ひ會社の段を下り　かほる

（同）職員錄が恥しい月給を載せる　艸樂

（同）月給を渡すと直ぐに寢て了ひ　二南

（軸）嫁もらふまだ月給になつてゐ　沒食子

人だかり　夕鐘選

人だかり厚司の人が退いてくれ　かほる

人だかりはつきり言ふてしまひなり　百雷
夕刊へ載るよつぽどの人だかり　勝二
飲みすぎただけへ大阪人だかり　同
人の輪の香具師へ夕陽がとろけゐる　沒食子
人だかりのぞいて見たい女連れ　同
人だかりともかく一寸のぞくなり　白葉
人だかり巡査に負けぬ紺絣　泉流
人だかり食はねばならぬ人が居る　變人
いさかひに延引ならぬ人だかり　丹生
人だかり母を連れて〻惜しく拔け　しのぶ
制服の眞すぐに行く人だかり　同
人だかりさくら時々うしろを見　山雨樓
人だかり今嫁に行く姿　雀踊子
自殺者へ噂々の人だかり　清美
人だかりたちまちデマが飛んでゐる　艸樂
人だかりサア何處だつしやると伸び上り　同
(佳)人だかり素通りをする人を持ち　丹生
(佳)人だかりそろ〳〵伸びる白い指　泉流
(軸)人だかり話題を提げて戻るなり　夕鐘

病　床　山雨樓選

病床をなぐさめてゐる片ふくぼ　柳次
病床へ今日も無駄口寄つてゐる　泉流
病床に甘へて見たい母の顔　一羊
病　床で後姿を嬉しがり　八歩
氷だ！酸素だ！せまき病床　白葉
病床へ不吉な時計止るなり　丹生
病床の或日鏡をくれと云ひ　しのぶ
病む母の見えるところに花を活け　比古
病床へ集まる人のあはてやう　四葉
病床へ顧問辯護士呼ばれてる　清美
退院も近く笑ひを持つて行く　史呂
そのまゝに〳〵と病床押へつけ　艸樂
先輩も同病と知る絹蒲團　亂耽
働いて戻り病床慰める　觀月
月賦にはふれず病床ひきあげる　富王
病床に讀むものがない手の疲れ　同
病床へ別れの言葉見つからず　變人
(五)病床の思ひへ夕陽とろけゐる　沒食子
(同)病床へ林檎半分むいたまゝ　青兒
(同)半年もれてゐて人の氣がわかり　亂耽
(同)した事して來た病床死を悟り　勝二
(同)きつと治る妻に淋しく笑はれる　同
(人)病床の耳へも世辭がとゞかぜる　二南
(他)度のきつい眼鏡はずして病んでゐる　夕鐘
(天)病床の掃除をすれば怒るなり　しのぶ
(軸)ベットから引出す財布冷やゐる　山雨樓

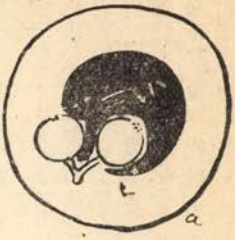
夜櫻と動物句會

天王寺動物園が擴張されて東洋一の偉容を誇つてゐます。夜櫻の觀賞旁々御出席下さい。

日時　四月十四日(土)午後六時半(晴雨不拘)
塲所　天王寺動物園
講演　林園長
兼題　「川柳と動物」
　　「リタ孃」三句　廓生路耶選
　　「夜櫻」三句　福田山雨樓選
同會費　金參拾錢（入塲券進呈）

（幹事）鶴峰、里十九、夕鐘、冬光

主催　川柳雜誌社



古狸窟雜筆（二）

梅本塵山

（一六）蕎麥搔餅

蕎麥粉を熱湯にて捏ねたるものを、今は蕎麥搔とのみいへども、昔は蕎麥搔餅といひたるが如し。「古今夷曲集」卷第九

蕎麥搔餅出しける座にてよめる

薄墨につくれる眉のそばがほをよく〳〵見ればみかどなりけり　法印玄旨

（一七）かはらけ

女子の○部に毛無きものを、かはらけといふ。此れは如何なる理由にや。一說にかはらけは、毛の寡きものを指す、河原毛の駒といふも、亦毛の寡きものをいふ也とあれど、其說確ならず。

「松屋筆記」卷九十五

體源抄（十末卷十九葉）練習事條に、少御前ハカハラケ音トテ非愛モヒタヽケテ誠ノ惡音也然而モ每調ニ愛敬アリテメデタク聞エシハ本性ノ心賢キ上ニヨク力ヲ入レルガイタス處也云々。此かはらけ聲といふも、瓦絃の如くつやけもけしきもなきにいふ也、男女○の○なきをかはらけと云ふはた同じ心也。

「鷹筑波」

毛のないものを土器といふ。

其頃は糸女の年や十二三

（一八）朧月

朧月は、俳諧にては春のものとされ居れども、和歌には、秋の夜の朧月をよめるものあり。

「躬恒集」

秋の夜の朧にみゆる月よりも紅葉の色ぞ照りまさりける

（一九）女相撲

江戸時代に、女相撲といふものゝ流行したる事あり。亦、諸侯の奥殿に於て、侍女等に相撲をとらせる話あれど、此れは往古より行はれたるもの也。

「日本書紀」雄略天皇紀

乃喚二集采女一、使下脫二衣裾一而着二犢鼻一露所相撲上。云々。

（二〇）獨笑人形

昔は○畫の事を、ひとりわらひといひしが、獨笑の人形といふもの有り。此れはをはせがたを斯く呼びたる歟。或はかかる人形の有りしもの歟。

「武道傳來記」貞享四年印本

ある時女たはむれて、ひとり笑ひの人形あるべし。慰みに見せ給へといふ。あらば何惜からじそれもたぬといへば、小間物賣のもたぬとは、我取出すと箱を明れば何もなく、云々。

（二一）暮三老人

昔、暮三老人といふ隱士あり。ある時己が家に宿せる一行脚より「降るうちに降出す音や五月雨」といふ句を、金一兩に買求めて己のものとなし、頓てこれを摺物にして、さる行脚より求めたる句に、と前書をなし、社中の人々に配布したりといふ。

（二二）按摩博士

學術の優秀なる者に、博士の號を授ける事は、昔も今も變ること無けれど、最珍らしきは按摩博士也。

「思ひの儘の記」仁孝天皇の御代に、山口按摩博士滿嘉といふ醫師ありしが、初平民なりしが、外療に妙手を得たるにより、御醫に補し、僧官に任ぜられん事を、關白政通より命ぜらる。

（二三）岩に口

壁に耳とくりに口といふ俗諺は、今も汎く行はるるが、古は壁に耳岩に口といひ、亦、石に口ともいひたるが如し。

「義經記」卷之七

男申しけるは、壁に耳岩に口といふ事あり、云々。

（二四）橋下の菖蒲

江戸時代の童謠に「橋の下の菖蒲は咲いたか咲かぬかまだ咲そろはぬ、妙々車を手に取つて看たらば、しどろくまどろく十さぶろくよ。」といふ有り。此橋の下の菖蒲云々といふことは、足利時代の童謠にはあらぬ歟。「狂言記」中の、山伏の祈禱する所に、屢々此語が用ひらるる也。

「狂言記」蟹山伏。

橋の下の菖蒲は、ぼろぼん〳〵。誰が植ゑた菖蒲ぞぼろぼん〳〵。

（二五）三月庭訓

學問技藝などを始めて、少時にして罷めるを、三月庭訓といふ。

「狂歌才藏集」卷第二　暮春　鹿都部眞顏

昔たれならはしそめて庭訓の三月ぎりに春の行くらん。

（二六）内八文字

遊女の道中する時の歩み方を、俗に八文字といふ。此れを外八文字といへど、内八文字といふ歩み方も有るが如し。亦、遊女にはあらねども、十文字といふも有る也。

「諸艶大鑑」卷二

先一番に立姿は都の三夕。各別世界の道中なり。内八文字にかいとりまへ。云々

「土佐日記」

一文字をだに知らぬものも、足は十文字にふみてぞ遊ぶ、云々。

（二七）日本三景

陸前の松島、丹波の天の橋立、安藝の宮島を、世に日本三景と稱すれども、其三景に今昔の相違あるものゝ如し。

「鹽尻」卷之七十三

或人描なしたる丹州天橋立の圖左に略寫す。陸奥松島、伊勢の二見と合せて三勝景と云ふ。

（二八）船幽靈

船幽靈といふものゝ傳說は、我邦のみならず支那にも有りて、我邦の怪異談と略同じ。

「乘穗錄」第二編

海槎餘錄に、鬼哭灘桎怪異、舟到則沒頭、隻手獨足短禿鬼百十、爭互爲群集來、趕舟人、以米飯頻々投之即止と。今、西國の海上にて、あやかしと云物と同じ。

（二九）青田

出産後の婦人を、青田といひ、青田八反ともいひて男子これを賞美すといふ。

「繪本美徒和草」享保五年印本

婦人の產後、俗に青田八反と賞美す。

「碁太平記白石噺」

後室樣は四十足らず、どうでも後家御の青田でも苅りかけたか、但し姫樣をかいわり菜ちよびと摘菜といふやうな事であろかいなう、云々

（三〇）三日月井

一の井戸の中央に、板を建てて左右に隔てたるを、三日月井といふ。其形新月に似たる故也。

「兎園小說」

三日月井戸は、井の水中に板を建てて、左右のしきりせしものなれば、そのかたち半輪のごとし。よりて三日月井戸と呼びなしたり。

（三一）狸眠

人の虛眠するを狸眠といふ。亦、猿子眠といふ有る也。

「一宵話」卷之二

貉睡は、懶眞子に出て、よく睡れども、又目覺はやく、物音きけば、直にけ行くから、佯眠して人を欺く樣に人の方にておもふなるべし。

「中陵漫錄」卷之下

墨客揮犀曰。貉行十數步、輒睡以物擊竹驚之、起既行復睡。

「一話一言」

壽世青編云。伏氣有三種眠法。屈其膝也。寒猿眠。抱其膝也。龜鶴眠。踵其膝也。今も俗に膝を抱いて眠るを猿子眠といふ也。

悼吉田晩春

水谷鮎美

はるあさき一月十七日 梅田支部同人吉田晩春君の早逝 遊歩の言葉はふるへてゐた肺を病みて郷里に靜養中の 君の俤をおもふとき涙はあらたにこにむ。二月二十四日方眠遊歩、鮎美は支部を代表して故人の郷里和歌山縣那賀郡中野上村を訪ふ。陽はあたゝか南紀の暖風にほころぶ白梅の にほふをゆけば、想はるゝ去年五月七日故人につれられて琴人、水車、夕鐘、遊歩、鮎美の野上支 創立句會々場宗光寺席上に列し 柳界の一峰を擧げしに今は空し、なつかしき土の想ひ出の歩一歩 門に訪れば實父母のはや涙、みせてはならぬに 吾ら三人の男泣き。死のありさまのあ やさきなゝお物語りに、なみだにむせぶ。慈父の導きに、俗名吉田伴助行年 三十歳釋清修信士の靈のまへに香を焚く、同人一同のこゝろからなる御供物の なにとはかくもの哀し。慈父のお唱名に 球數つまぐらるゝ御燈のさながら有心にまばたきぬ 聲なき眞晝のかぎりなく寂し。ふたゝび靈のまへに同人の追悼句を鮎美代りて披講す、一句々々に膺のあつくなるをおぼへぬ。

追悼句

山によし海によくとも君や亡し　水車
肩打てば笑顔で應ずる君なりし　靜波
ものいはぬきみとはなりしさびしさ　遊歩
思へども歸らぬ君へ今日も暮れ　白菊
追憶の涙に消へて君を呼ぶ　坊茄子
葉がひらり〳〵君が訃報きく　まさる
我が身より他人の身思ふ君なりき　鳴玉
君の訃や遠き花火の青くきゆ　ト居
白梅の惜まるゝまゝに散りそめる　夕鐘
思はざり君を弔ふ筆となる　里十九
手をもることも出來ずに君は逝き　觀月
魂はふるさとの土にかへれり　鮎美
君ひとりだけ揃はない茶をすゝり　古木
黄泉の旅極樂の鐘が聞へて來　方眠

やゝありて鼎座する、心して故人を偲ぶ言葉の次々に出でゝ、世話好きであり、義にあつき數々を語りて盡きず陽はかたむくにそ唱名念佛して辭す。ふりかへりみれば近く高野山連峰の銀嶺は陽に光りて美はし平和な村の故郷に永遠に眠れる故人「幸福のありかを知つて死が近し」の一句、魂のこもれる辭世句と言へよう。今この拙しき一文を靈に捧げ、若くして逝ける君が冥福をこゝろから祈り追悼の意を表す。（靈の前に合掌せし二月二十四日記）

晩春句抄

たわむれの戀へ半襟買ふてくる
ひがしの空に乙女のほゝの色を見る
禁酒の俺に麥酒の泡のふくよかさ
うち落された姿のまゝの黄金虫
海水着お羞しいほど痩せてゐる
新枕からオイと云ふ聲が出た
階級はついても昔の君と僕
笑ふだけ笑ふて春の寄席を出る
氣にかかる夢だと父を問ふ手紙
毒草に宿かりて露ひかるなり
毒草のやさしく伸びた立姿
就職へうれしい辨當持つて出る
マッチの火彼女がふつと消した儘
幸福のありかを知つて死が近し
氣かゝりな子のれ息なり冷へる夜
膝の子に湯呑みとられた子煩惱
なつかしい訛りに更ける歸郷の夜
せなの子にあたらぬように風吹く
白壁に戀が叶ふた羞しさ

各地柳壇

いのちあるかを創れ

路郎・雨絲・二南整理

麻生路郎先生歡迎會（京城）

三月十二日夜　吉川夢月報

宿題　雨　路郎先生選

絵に書いた樣に渡場で雨に濡れ　柳雅朗
雨の音なんか聞えぬさんざめき　秋外
濁るだけは濁れと片隅蹲まり　柳雅朗
日直へ腹の立ない花の雨　柳也
相傘で戻るつもりへ雨が霽れ　可敷
俄雨　皆卒業の記念傘　雅月
春雨へ派手に廣がるネオンの灯　竹翁
(人)猛烈な應援團も雨を逃げ　樂文
(地)雨宿り娘の居るに心づき　雅月
(天)自動車で行く土砂降の向白し　夢月

席題　戀　路郎先生選

駈落といふ風でなしモボとモガ　錦魚
マドロスの戀を忘れるドラが鳴り　秋月
戀などは笑つて過去に觸れるまい　柳也
勝つ戀に何ものもなく活きてゆき　兎角
初戀の蕚の同じ社から退け　春魁
戀といふか歯痒い其の日〳〵なり　京平
(人)振袖は察して欲しい胸を抱き　可敷
(地)戀知つてい、そ淋しい身の廻り　夢月
(天)銀幕の戀を覗ひたい母となり　京平
(軸)その戀をまがしがらせる金のこと　路郎
(同)戀ごゝろ死にたいさびふこゝろもいひ　同

席題　最合傘　可敷選

言傳を只頼まれた最合傘　京平
最合傘後へ鼠鳴をきゝ　春魁
最合傘自動車迄のお伴なり　京平
行き過ぎたのにふと氣付く最合傘　夢月
父ちやんは背を丸めてる最合傘　京平
(人)せめてそこ迄/嬉しい最合傘　夢月
(地)最合傘雨はそんなに降つてない　秋外
(天)急用の女房の傘に久し振り　柳也

席題　持寄　春魁選

持寄といふ景品へムラがあり　可敷
持寄りの花見音頭に興がのり　兎角
持寄つた料理〻花とおけさ節　京平
持寄の世帶を示す星條旗　錦魚
持寄た智慧に詫びてる不幸な兒　柳也
持寄つてまゝごとの子に陽の溫さ　夢月
持寄りは人の物から箸をつけ　可敷
避難所へ皆持寄りの鍋と釜　秋外
(人)持寄りの福引同じ物がある　錦魚
(地)チグハグな道具へ今宵目出度し　柳月
(天)持寄つて刀劍の座の靜なり　夢也

畔柳社一週年
川柳雜誌社支部創立句會（大阪）

昭和九年一月十四日(日)　於大鐵局倶樂部

席題　餅　披講　互選

餅こげて來て口實が見付からず　某人
子の歳〻餅を一臼つき加へ　同
父と子の餅やく晝を笑ふなり　鮎美
小包の餅の宛名は早稲田なり　某人
餅は子のものにして上戸なり　明坊
餅の數若かつた頃思ひ出し　秀太
殘業へお鏡餅を燒いてくれ　水車

席題　羽織　吉田水車選

意見きく息子の羽織ぬげしくる　鮎美
紙捻の羽織の紐で酌いでくれ　呑舟
病上り羽織の紐が大きすぎ　一蜂
おちついて呑むに羽織をぬがされる　緑雨
八百屋とは見へぬ羽織で年始に來　村夫子
(客)背の子へ羽織の襟は伸びたまま　某人
(同)看病の羽織の線も痛々し　亂耽
(同)羽織紋違つたまゝで義理がする　秀太
(同)はですぎるけどものが羽織　九天

席題 大聲　須崎豆秋選

大聲の行衛仰げばちぎれ雲　鮎美
大聲で只吳れ相な歳の市　某人
大聲の電話嬉しい知らせなり　九天
大聲で呼ばして母は後に居　緑雨
機關手と別れる聲が大きすぎ　亂耽
大聲で呼べばそこらで笑ふ聲　水客
大聲になつて終つた應接間　水車
(佳)階段で遲參大きな聲を出し　亂耽
(同)大聲にみんなが威壓される也　緑雨
(同)突然に大聲をきく交叉點　亂耽
(同)大聲で大佛の歳敎へられ　某人
(同)大聲に水が光つた川の巾　鮎美

席題 忘れ物　福田山雨樓選

選忘れ物氣嬢なほして取りに來る　鮎美
忘れ物思ひ出せないしつけ糸　某人
汽車はいま名古屋あたりの忘れ物　亂耽
忘れ物しきりに鼻のかゆい夜　同
忘れ物同じおもちやを買はされる　秀太
忘れ物ないかと座布團あげてみる　水客
(佳)忘れ物追けて來だ妓のゑくぼ　同
(同)口實のうまく土產物忘れ　九天
(同)聞きなれた鉦だと出れば忘れ物　ひさし

川柳雜誌社 御旅句會（大阪）

二月十八日　於 心交社

兼題 愚痴　路郎選

髮結ひに夫婦喧嘩の愚痴も聞き　久郎
預金帳出さず女は愚痴になり　四葉
愚痴一つ言わぬ女のたゞならず　同
嗚咽ともきこゆる日あり父の愚痴　同

愚痴つぽい丸い背山へ雪が降り　豆秋
蝸船へひつぱつて來て愚痴を言ひ　同
愚痴をいひ〳〵目藥を入れ　同
(人)朝ぼらけ愚痴言ふ事のなかりけり　あやみ
(地)爪彈きに愚痴は流れてしまひけり　豆秋
(天)嘲笑ふ瞳と知らず愚痴み言ひ　四葉

兼題 味　緑雨選

鯛壽司へ味覺ばかりの人となり　四葉
漬物の味だけ賞めて箸をおき　豆秋
指先にとめて珍味の由緒きく　冬呼
若竹の味覺も春の夜のもの　翠夢
立食も大阪らしき味を見せ　勇

席題 交番所　紀太選

人だかりまだ解決がつかぬなり　緑雨
交番できけば管かつ違ひなり　翠夢
火の種を貰つて歸る交番所　久郎
喰逃げがあつた廓の交番所　冬呼
交番所異人へオシの型も見せ　四葉

席題 咽喉　路郎選

千圓の話をきくに咽喉が鳴り　冬呼
御馳走も咽喉を通らぬぶあいそう　禿山
咽喉聞いて貰ふに南地まで出かけ　豆秋
咽喉のあたりが寒い淚人　同
(秀)咽喉佛までしか見えぬたのみごき　紀太

席題 名刺　翠夢選

久し振り名刺を出してうなづかせ　緑雨
言ひにくい事を名刺の裏へ書き　豆秋
名刺から言葉が違ふ給仕なり　勇
紹介の名刺に義理の判を押し　冬呼
保險屋はいらぬ名刺をおしつける　四葉
名刺には勳八等のポロマント　紀太

(軸)花名刺ゆうべののろけきかされる　翠夢

阪大川柳會（大阪）

二月二十三日　丸島利生報

兼題 見送り　路郎選

見送りへ靜かに働くパッカード　たけを
見送りが半分切れた交叉點　同
見送りの隅に恩師の小さく居る　同
見送へフェルトの音も混つてゐ　氷炭
出帆へ義理のテープを投げてをさ　柳秀
見送りに坊やは高くさし上げる　楽
見送りへ胸一ぱいの人となり　正甫
見送りに行つて女のあるを知り　橙舍
氣がゝりは見送る妻の若さなり　同
送る人もなくて青森行はでる　路生
(人)見送りを恐縮してる終列車　柳秀
(地)見送りへ富田屋の妓も混つてる　青一路
(天)一本の外はどうでも瓦いテープ　橙舍

兼題 長襦袢　路郎選

河べりで喜憂を包む長襦袢　一杯
長襦袢急かされてゐる足袋を穿き　楽
長襦袢に金歯を見せてかぶりふり　同
長襦袢持病の癪もあつ〳〵瓦し　橙舍
寢たふりをしてりや泣いてる長襦袢　同
煎藥にもうあいて來た長襦袢　たけを
朦朧として長襦袢の夢に入る　正甫
長襦袢着ても女工の肩であり　路生
長襦袢のまゝ二階から人を呼び　同
大節季越してゆれてる長襦袢　氷炭
長襦袢になつてから一寸まつてゝれ　柳生
長襦袢生活の色識の色　方正
(人)長襦袢太さに過ぎて悲しけれ　橙舍

(地)行く年へせて襦袢を派手に着る　芳一
(天)どう見ても長襦袢組に御座候　一杯
雑　吟　路　耶選

夢に見る母の姿は驛に立ち　柳秀
レザスターロフキルの位置に居り　楽
ポチ袋貰ひつけてる方が持ち　利生
席題　外　科　路　耶選

手術場へ擔ぎこまれたまで覺え　利生
この足大根ぢやありません先生　同
手術場を地獄のやうに見て通り　同
五針も縫つた後で聞かされる　同
生れもつかぬ片輪となつて退院し　楽
五六人繃帯の男連れてくる　同
諸肌をぬいで縫目を見せるなり　同
石炭酸くさいで外科とあてられる　路生
少しは痛いよと外科におどされる　同
一應相談してからと手術去に　青一路
その手術母親だけが反對し　同
今すんだ手術先生無口にて　たけを
神様のお告の方の外科へ行き　同
手術日を手輕に決める外科の醫者　一杯
子供より母が切られる思ひして　燈舎
命令のやうと切つたが助からず　方正
繃されるやうな氣のする手術臺　柳秀
(人)難工事今日も戸板で運ばれる　同
(地)鉢巻をなりなと外科を迎ひ入れ　路生
(天)人事のやうに手術とぬかしよる　方正
(軸)二十三貫これが男の手術臺　路耶
(同)五六人切つて外科醫者飯にする　同
(同)人生五十一札を入れて切る　同
(同)手術臺君はそつちで待たまへ　同

(同)繃帯の白さ櫻は眞ッ盛り　同

川柳雑誌社 **今里支部句會**（大阪）

二月十七日於今里新地よしのや居　没食子報

兼題　舊　正　水　車選

舊正を女中が居つて思ひ出し　友帆
舊正に戻り不作も聞いて來る　丹生
大阪に住み舊正を働けり　鮎美
(軸)舊正で歸へつたまんまやつて來ず　水車

席題　奉　祝　友　帆選

奉祝を踊つて見たい氣で眺め　清子
奉祝のアーチも夜の色となり　喜由
階級もなく奉祝の渦に居る　しのぶ

席題　入　學　雀　踊子選

くせの無い帽子へ入學嬉れしくて　昇鯉
校門へ來て入學の氣が引ける　喜由
欠勤をして入學を連れてゆき　没食子

席題　小　説　禿　山選

小説へ女は派手に泣けるなり　雀踊子
小説のヒロインになる過去をもち　没食子
小説があかるくみへる青疊　鮎美
(佳)小説の魅惑に醒めて雨を知り　丹生
(同)小説の頁へとまる夜の蠅　鮎美

席題　成　功　鮎　美選

成功の頓り嬉しく機を織り　丹生
成功の故郷は寒い霜柱　喜由
成功の眼に故郷の低い屋根　友帆
(佳)成功の後姿にある噂　雀踊子
(同)成功を祈る心へ動く雲　水車
(同)成功に瞼に母を悲しめり　没食子
(軸)成功の顔がギヤマンに歪むなり　鮎美

席題　花　嫁　没食子選

花嫁の化粧くずれもあつてよし　水車
(佳)花嫁の鏡にうつりひとりゐる　鮎美
(同)ロボットの樣に花嫁すわらされ　友帆
(同)花嫁の心に溫しさくら炭　鮎美
(同)足の先ばかり花嫁見、歩き　喜由
(同)昂奮のまゝ花嫁へ夜が白み　友帆

川柳雑誌社 **松山句會**（松山）

二月十五日夕　於ABC樓上　春峰報

兼題　手　料　理　大　觀選

いくらでもあると手料理盛つてくれ　五健
會席と別に手料理出してくる　素泉
割烹着少しよごれてテキが燒け　春峰
手料理へ親友甲斐の醉心地　五健
手料理のフライお膳に巾を取り　柳女
手料理へ皆んな揃ふた箸の音　虹子
褒められた料理へ妻は爛をたし　柳女
(秀)手料理でもてなす舊師まだ獨り　一風
(同)手料理のやたらと味の素がきく　春峰
(同)手料理の味へ迂闊な評を入れ　大樓
(同)手料理は祭の蒿に積れたり　曉童
(同)手料理の名前を聞けば支那料理　春峰
(人)お手料理喰つてしまへば河豚であり　東白
(地)手料理で珍客ながら事か足り　臥龍
(天)手料理へ土産の海苔があつた筈　五健

席題　一　對　流　矢選

一對の箸も嬉しい新世帶　虹子
仲人は好一對にしてしまひ　拓水
(秀)渡り初め先ず一對の尉と姥　五健
(同)あなたなら好一對ノ高砂社　凸坊

兼題　日の丸　五　健選

日の丸に風つきまとふよい天氣　春峰
日の丸がいつそ戀しい領事館　虹子
(秀)裏長屋暮しと別な國旗あげ　東白
(同)日の丸へ命のいらぬ氣が揃ひ　雨城
(人)隣居所の日の丸丁稚立てに來る　大觀
(地)日の丸の渦か勇士の巾にあき　虹子
(天)日の丸は住き日とも日の風に立ち　耕一路

席題　現　代　大　樓選

現代はどうであらうと折れて居る　松石
金が物言はす現代とは淋びし　春峰
現代の女性としての付け黒子　虹子
現代の女と申し膝を組み　五健
(人)現代を論じて職にありつけず　素泉
(地)現代の世相を論じ露路に住み　春峰
(同)有難い現代にして職がなし　五健
(天)欠禮を謝せず現代的にされ　飛四郎

席題　かくれ家　虹　子選

自動車をここから返すかくれ茶　五健
しんみりとしてかくれ家の日が暮れる　時雨樓
かくれ家にただ忍從の日を送り　春峰
(秀)かくれ家で見舞くすぐつく受る　大觀
(同)かくれ家の晝ねすぐに湯がたぎり　時雨樓
(人)あやす子も無くかくれ家の朝淋し　大樓
(地)防彈着かくれ家襲ふ命を待ち　五健
(天)家傳藥かくれ家で包んで居　耕一郎

川柳雜誌社　**玉造句會**（大阪）

一月十五日　於東雲倶楽部　佐藤しのぶ報

本社より紋雨氏の同人數氏、溪花坊、鷄牛子氏等の御出席九得、甚だ盛會であつた。

俗席題三光に　溪花坊句集を寄贈下された

溪花坊氏に誌上よりお禮申上ます。

兼題　相　談　綠　雨選

相談へどちらも金がないと云ひ　昇鯉
相談が決まり話題に變へて出る　丹生
相談みして來た返事吃るなり　艸樂
相談の揚句實附押してやり　柳堂
(佳)相談へ興奮をする事が出來　溪花坊
(同)相談の顏がそろつて坐りかへ　八歩
(同)相談につむじ曲りが一人ゐて　溪花坊
(向)相談の一人はホームへ歩みより　みよ坊
(同)相談の其の糸口をまた逃し　水車
(同)相談に酒落を云つては叱られる　鷄牛子
(人)相談が出來て近道から戻り　白峯
(地)ひつこみがつかぬ相談とはなり　四路平
(天)相談が露骨になつて向き直り　村句茂
(軸)相談に一人默つて歸へるなり　綠雨

席題　理　性　溪花坊選

ぐん〳〵と迫るは朝の理性なり　紫石
眞直ぐに戻る理性の靴の音　八歩
パッチリトと理性の瞳動かして　四葉
口紅へ理性の奥を見透かされ　丹生
秋風に理性をふつと取り戻し　八歩
(人)理性とは獨りぼつちにさせるなり　春踏
(地)なぐられて理性と云ふけ損なも　白柳子
(天)理性からはるかに遠い酒の色　四路平

席題　脚　本　鷄牛子選

脚本を生かす女優の聲となり　しのぶ
脚本へ電氣カバーの好きな色　雀踊子
床山へ脚本持つたまゝ八重子　柳堂
脚本へ氣高く九條武子逝き　四路平
脚本家赤い帽子で通すなり　同
(佳)脚本を蝶六ひよいと忘れたり　艸樂
(同)近松の作に照明明るすぎ　溪花坊
(同)賣れもせぬ脚本を讀む酒場の灯　四葉

席題　地下室　柳堂選

地下室の暗さを丁稚なつかしみ　八歩
地下室へ魔窟の樣なバーが出來　丹生
地下室のある日一三社長來る　溪花坊
地下室の壁へ泪の字が一つ　紫石
地下室へ氣の毒そうな陽が覗き　艸樂
犯人へその地下室もうつされる　雀踊子
(人)地下室の階段僕の靴の音　青踏
(地)地下室のホールへ消へタキシード　耕之介
(天)花の日のまひる地下室で事務　溪花坊

席題　女店員　白柳子選

とんでもない事を聞かれた女店員　紫石
女店員別な瞳にふと氣付き　八歩
女店員神經質な髮を梳き　紫宵
女店員梅田の煙少し吸ひ　鷄牛子
女店員まばらな客へ歌となり　丹生
女店員同士笑つてつりをくれ　四葉
(人)三線味も少しは彈ける女店員　柳堂
(地)女店員の從妹を見に行く氣　耕之介
(天)弟は左傾したとの女店員　青踏

席題　速　記　艸樂選

速記する蒲柳の質の鼻眼鏡　青踏
險惡な空氣に速記ふと氣付き　八歩
早口のくせと速記者氣を張つて　柳堂
表情をちらりと速記續けてる　鷄牛子
速記錄その時笑ふ聲がする　白柳子
硬軟の議事へ速記の手が冷へる　溪花坊

聞きもれたところあけてる速記録　彌次られてしばし速記の筆ハ置き　某氏退席ハ速記者見逃さず　漫談へ速記眞面目な顔でゐる
（佳）ときどきに顔もながめる速記録　（か）速記おオールバックを撫でる障　（同）水を飲むとこ速記者顔を上げ　（軸）速記録その亢奮が躍如たり

絲雨　八歩　絲雨　八歩　溪花坊　同　耕之介　同　艸樂

川柳雜誌社　**御旅句會**（大阪）

一月十日夜　於いし堂

兼題　好奇心　路郎選

好奇心女給の家庭調べ上げ　あや美
さはされど好奇心にも當る籤　多郎
ものずきなお方と輕くあしらはれ　四葉
引裂いて仕舞へば子供しまひなり　舟々
マネキンは腰に好奇の目を受けて　清美
浮世繪を穴のあくほど見つめたり　勇
好奇心たかゞ女の一人なり　みつる
（人）アヽ遂にダブルベットへ急ぐ　四葉
（地）哀れ好奇心と共にホテルに來　翠夢
天檻の猿ズンベラボウでほうし　舟々
（軸）ブローズが干しるので興がめ　路郎
々選

兼題　當番　舟

當番は先づ先生の机ふき　清美
當番へ今日の日曜日本晴　みつる
當番は別に味ふ酒の味　紫石
うとましゆう當番除夜の鐘をきゝ　翠夢
當番が遲れ逢ふたことをいひ　路郎
當番は下駄まで出して吳れるなり　勇
（天）當番が鼻を眞ッ赤にして出か　路郎
（軸）當番と云ふ口實を持つて出る　翠夢

兼題　面　舟々選

だしぬけの面に仰山らしい聲　路郎
戀かつた面も懷かしい思出　舟々
お面とは別に踊りのよい妓　紫石
（五）ひょつとの面ハ輕々笑ひはれず　紫石
（同）表面はあくまで白を切るつもり　四葉
（同）帽子掛けされて天狗の面もつれ　路郎
（同）廣告の面が子供を買收し　同
（同）その假面はけばけばやつぱり女なり　みつる
（人）お面一本雪は卍といふところ　路郎
（地）お多福の面がフラ〳〵歸へて來　清美
（天）煩惱のさら〳〵見ぬデノマスク　舟々
路郎選

兼題　湯

湯殿から使は返事聞いて去に　舟々
湯の町で咲かせた戀ハどうしよう　清美
朝の湯へ丁稚は洗みそうに入り　舟々
湯上りへ思ひもよらぬ工面なり　紫石
（軸）青柳が鳴つるなアと湯に洗む　路郎
（同）夢選

兼題　切符　多郎選

よれ〳〵の切符で二人驛を出る　紫石
云ひわけへ燕の切符を出して見せ　翠夢
乘りこしに決めて切符を手に握り　同
切符まで買つて歸した女なり　みつる
切符はあとゝあごでしゃくた日那　路郎
（五）赤切符國は九州薩摩潟　路郎
（同）切符だけ二枚握つた驛の風　紫石
（同）切符持ちながら立ち通しな　舟々
（同）あつつ雪ですと見送の切符買ふ　路郎
（同）切符捨てゝ歸りい程待たされる　舟々

川柳雜誌社　**畔柳社句會**（大阪）

二月十五日　於大鐵局クラブ小倉議室　植山九天報

兼題　犬　互選

犬の値を聞いて驚くくらしなり　濁涙
見送りに犬改札をぬけて來る　天八
儲け度いつもり心知らシエパード　苦樂公
犬などを飼うて嬢樣淋しくゐ　水客
先輩にもらつたテヤもてあまし　同

兼題　灰皿　清記互選

灰皿の煙愛人の咳を呼び　杏林
灰皿の葉卷に社長居ると知れ　秀悅
灰皿へ小さな見榮を張つて去に　晃路
金箔へ灰皿だけが置かれてゐ　喜山
灰皿へ思案に餘る殼をすて　秀太

兼題　交叉點　九天選

交叉點車掌の聲が聞へかれ　秀太
交叉點急ぐ心へ赤になり　晃路
交叉點一度荷物を持ち直し　天八
（佳　交叉點或る日巡査の機嫌よし　苦樂公

兼題　代表　苦樂公選

代表は吉報ちかつて青ざめる　濁涙
代表は秀才と言ふ肩をはり　九天
（佳）緣起かついで代表朝を出る　同
（同）潛越ゝ言ふ代表のそれでよし　喜山
（同）代表で來てゐゝ筈のふがいなし　晃路
（同）日本間代表軸かゆめゐなり　九天

兼題　カンテキ　苦樂公選

分讓地誰が七輪捨てに來る　濁涙
女房の留守をカンテキ煙だ過ぎ　某人

カンテキに獨り身と言ふ火が殘り　同
風向きを見てカンテキの向をかへ　喜山
カンテキが出てから友はよくしやべり　久米雄
針金に卷かれカンテキよくいこり　同
(佳)火を吐くカンテキの路次をぬけ　坊
(同)カンテキの傍で女中は故郷のこと　明
(同)カンテキが來て茸が座が定まり　秀悦
(軸)妻病んでカンテキの塲所かへられる　喜山
兼題　愛　人　山雨樓選　苦樂公
愛人の涙はじめて知つた夜　呑舟
愛人とパツタリ遇つたエレベータ　天秋
愛人の無口へ窓かあるばかり　喜山
愛人へ贈る毛糸のはかどらず　天八
愛人は昨夜を知らぬ顔で來る　九天
毛糸店愛人明るい頬で出る　秀悦
愛人と新婚記事になる覺悟　秀太
愛人と寫す寫眞の塲所がなし　水客
愛人の髮のうすさを見てしまひ　某人
愛人の欠伸みつけた花曇り　南枝
(五)水鳥の足掻ぎに君の影ゆらぐ　水客
(同)愛人へ女給素顏を見せて晝　比良也
(同)愛人の足は意外に太いなり　秀悦
(同)愛人の話を切らす鳩時計　秀太
(同)愛人が採す瞳のすみ切つて　天秋
(人)愛人の妹も行くと言ふ日和　天八
(地)愛人をもてなす母の口が過ぎ　苦樂公
(天)だまつて歸る愛人の肩　某人
(軸)愛人のどちらの親も揃ふてず　山雨樓
兼題　工　塲　山雨樓選
起きられぬ朝へ工塲の笛がなり　喜山
工塲の天窓だけの青い空　同
工塲の髭の門衛唯心派　某人
(五)工塲に俺の力の音がする　秀太
(同)大陽へ朝の鐵槌ひゞくなり　明坊
(同)旗立てた工塲の朝の澄んだ朝　喜山
(同)辨當のからへ工塲の陽があたり　水客
(同)サイレンニ女工白粉瓶を置き　久米雄
(人)サイレンの元氣な工塲へ父がゐる　某人
(地)工塲の汽笛は冴えへゐる　大寒
(天)面會へ工塲は鐵と鐵の音　喜山
(軸)工塲はミリタリズムを眞似て無事　山雨樓
角力吟　題　世　界
じつと見る小鳥の世界羨ましし　喜山
國防へ世界地圖の張り出され　晃路
滿洲が生れ世界の色がふへ　天八
いたづらがある子の世界なつかしの　秀太
人情と義理の世界でやせてゐる　秀悦

雜誌社　川柳　**鶴町句會**（大阪）

二月十四日　於自助會クラブ

兼題　丁　稚　大西八歩選
丁稚もう嘘にはなれた聲になり　しのぶ
早朝の靜けさ丁稚水を打ち　昇鯉
掌を強く見つめて丁稚ゐる　白峯
見込まれた丁稚の色が白いなり　機見女
角帶が結んで貰ふ朝を起き　同
御隱居は丁稚の望聞いてやる　岩石
(佳)誰も居ぬ部屋は丁稚の泣ところ　同
(同)電車まで丁稚が送る雨になり　變人
(同)荷作りへ力のほし丁稚なり　同
(軸)露路の灯を拔ける丁稚のまなこ　八歩
席題　食　堂　機見女選
落ちぶれても食堂へ遠く居る　丹生
食堂の隅に小さく新入者　よし美
つるやでは手ものの足らぬ上戸黨　彩泡
サジおいて買へる着物をれだるなり　しのぶ
食堂へ女の事を忘れて來　白峯
打明けるつもり食堂こんでゐる　變人
食堂の椅子に嬉しき國なまり　岩石
食堂の隅で二人の氣が揃ひ　同
席題　夜　勤　變人選
いゝ月をほめて夜勤は戻つて來　丹生
夜勤フト自分の影におびえたり　八歩
夜勤の歸り登校の子に出合ひ　寛柳
夜勤フト心にかゝる消防車　彩泡
我が家のやうに夜勤の獨り居る　しのぶ
(人)儲からぬ話ゝ夜勤のはなし　白峯
(地)大空が眺めて夜勤者同志　同
(天)ベルトの風も冷たゝ深夜業　寛柳
席題　成　績　白峯選
あまり良く出來ても親は氣にかゝり　彩泡
成績を上げるオーバのえりを立て　岩石
成績を案ずる顏へ汽笛なる　變人
成績と別に就職決るなり　寛柳
傷痕があつて成績よい巡査　丹生
成績を氣にする程の年になり　しのぶ
(佳)成績をほめて入學のつゝがなし　丹生
(同)成績上等水は洩りません　變人
(同)成績へゆうべの酒を氣にして居　八歩
(人)成績が案じて國の父が來る　同
(地)成績を上げる女給のコンパクト　岩石
(天)成績の話にふれたのゞ佛　八歩
席題　相　性　互選

相性の女はそこらに居ないもの　昇鯉
相性を云ふて斷るつもりなり　しのぶ
相性へ易者の顏が曇つて來　白峯
嫌氣がさして相性の事を云ひ　寛柳
相性を氣にする母が氣に入らず　彩泡
相性の更くるを忘れ語り合ひ　よし美
相性を氣にして舊家へ嫁がくる　丹生
二三人出來て相性云ふとれず　岩石
相性ハ言ふ〻年寄叱られる　變人
相性へ念をおしてる女氣の　八歩

川柳雜誌社　神戸句會（神戸）

三月四日　於八宮神社　西村明球報

兼題　草　華水選

買收をしきつて草を茂らせる　寄舟
泣く背の女へ光る月の草　卯生
草原の中を送つてくれる義姉　亂耽
友達も空を見てゐた草いきれ　九葉
草にれて雜誌昨日の折り目から　明球
ハンチを敷き若草の色を褒め　秋彦
草に來て馬の手綱もゆるめられ　竹楓
早いめにする辨當へ草いきれ　二南
摘草もこゝまでといふ流れに來　路郎
（人）春の草青し月賦の家に住み　同
（地）威壓的な立札の下草が生え　亂耽
（天）炭燒の毎朝伸びる草を踏み　一狂

席題　青空　亂耽選

青空へ岬の先に立つ子供　幸捐
靜太へ
青空のまたにきみのたよりつき　貧兒
晴れ切つた空へ伸び切るアドバルーン　德三
青空へ心のとげが消えてくる　柳坊
待たされてゐる男あり空青し　翠夢
青空が送つてくれる許嫁　かほる
青ぞらを長方形にする窓よ　路郎
（人）青空に懷疑の靴をきしませる　二南
（地）青空の下で手金を入れて置き　かほる
（天）妻へ迫る青空の幾日か　路郎
（軸）青空にカメラの位置を叱られる　亂耽

席題　戀敵　かほる選

酔ふた目にいつまでもある戀敵　靖弘
戀敵同志へ春は訪れる　繁堂
戀敵今日はおんなじバスに搖れ　竹楓
戀敵自惚きつた足を組み　秋彦
文筆に生きる戀敵を怖れ　柳坊
失職をしてゐるそうな戀敵　卯生
としよりと話がうまい戀敵　一狂
戀敵舞臺のやうにこつちも居　春秋
戀敵きつちりつりをとつて去に　九葉
戀敵同じ寫眞を知つてゐる　二南
戀敵撞球も百ほどつけるなり　亂耽
飯食ふて來ゝのかしらん戀敵　明球

席題　無心狀　二　南選

無心狀何んでもないと膳につき　春秋
無心狀紙屑籠が傍に在り　華水
無心狀返事も書かず氣にかゝり　德三
無心狀こゝらに嘘があるとして　柳坊
無心狀記念スタンプ押して來る　竹楓
すぐあへるとこから寄こす無心狀　九葉
早婚の後悔もあり無心狀　一狂
無心狀母では出來ぬ高と知れ　路郎
無心狀二度目は妻が見たつきり　明球
（人）遊らひもせず無心狀書き終り　同
（地）無心狀學校を出た文で書き　九葉
（天）無心狀一べん來いと返事來る　艸樂

席題　鼻　路郎選

金貸をゆうつに見る鼻の艶　靖弘
存在を忘れられまい鼻を塗り　竹楓
鼻の穴向けて冷めたい事を言ふ　秋彦
醉へば亦鼻をなめるてふ女給　翠夢
行過ぎた女奇麗な鼻を持ち　幸捐
理智が勝つ女の高い鼻を見る　德三
漫畫家に鼻をすばやくみつけられ　亂耽
鼻隆き劍客賽をもてあそぶ　一狂
高慢の鼻それだけにしか見えず　艸樂
履歷書の字ゝ違ふ鼻見ゝめられ　柳坊
（人）鼻じろむ話かんざにして歸り　二南
（地）お互ひは鼻の丸るさが似て　明球
（天）白粉のせいだと鼻をかばてやり　二南
（軸）あの鼻が命令してやるように見え　路郎

席題　足袋　互選

女中まだ乾ききらない足袋を履き　秋彦
替足袋も持つて藝妓の遠出なり　翠夢
裕福を何より足袋の裏に見る　柳坊
寒空を足袋だけ買ふて歸るなり　九葉
案内をしてをき足袋をはきかへる　かほる
足袋を脫ぎながら辭職をあける　路郎
足袋ぬいだとこゝ風呂の板が鳴り　華水
白足袋へまつすぐに來る砂埃　靖弘
郊外の足袋屋に合はぬ足袋を買ひ　幸捐
押入にたんと子の足袋妻のたび　卯生
病みふして大きな足袋になつてゐる　寄舟
ニヒリスト火鉢で足袋を焙つてゐ　亂耽

川柳雑誌社

螢ケ池句會（大阪）

三月四日　石森靜太報

兼題　廊下　靜太選

避けられぬ廊下氣拙い人が來る　浮鬼
折れてくろ廊下噂の人がゐる　愚寵
（佳）言ひわけを考へてゆく長廊下　青鬼
（同）春陽ぼか〳〵廊下で足の爪を切る　綠紅
（秀）廊下に沿うて朔日の風が吹く　春太夫

兼題　少年　愚寵選

奉祝の踊りなれたる美少年　秀明
少年の泪を見たり立志傳　青鬼
（佳）少年の日よ左樣ならと着る　同
（同）少年の夢キャラメルが落ちてゐる　靜太
（秀）金持の虚榮少年少年の夕べなる　同
（同）貧しき少年に冬のやはらかい陽である　同

兼題　傷　靜太選

かすり傷涙の顏を笑はれる　志津女
傷みせて看護婦さんとの日向　一更
（佳）君をみる瞳が痛い日となりぬ　愚寵
（同）白粉の顏に傷ある赤電車　後水
（秀）ひび茶腕暗いにふれるなり　綠紅
（軸）風音のこころの傷が痛みます　靜太

席題　梅　公平選

梅便り微熱のベットにとどくなり　松雨
風落ちて梅のつぼみの尖りある　愚寵
血を吐けるる女へ梅がほころびぬ　靜太
白梅が散る片戀のわたしです　同

席題　紫　松雨選

紫の羽織で彼女逢ひに行き　公平
むらさきの表紙少女のゆめふかく　愚寵

席題　泡　互選

みかへればシャボンの泡のやうな戀　綠紅
春の泡僕を寂しくしてしまひ　靜太
やみながく金魚の泡をながめてゐ　同

席題　眼鏡がきれいです（讀込み）互選

（七）あきらめた空眼鏡がきれいです　愚寵
（八）ふりむきてかへる眼鏡がきれいです　靜太
（十一）耐えてゐる戀に鏡がきれいです　同

川柳雑誌社

松江句會（松江）

三月二日夜　於ミドヰ園　冷兒報

題　つぼみ　小説　共選

やがて來る春をつぼみのかたくとじ　卷二
スタンドを暗くともして丸沙土　同
倫落の女つぼみを淋しめり　蕓路
ゆうつの小説を書く氣にもなり　兵一
手枕は失戀したと云ふ姿　冷兒

川柳雑誌社

高知句會（高知）

二月廿一日　於ブラジル樓上　中澤濁水報

席題　闘犬　互選

闘犬の引分けてからまだ猛り　紫白
闘犬に朝の胃弱は引ばられ　同
闘犬の紐に脚氣の癒えかゝり　濁水

席題　咳　互選

晩酌を咳に悪いと知つて酔ひ　紫白
講堂へ來て厳粛な咳になり　春水
演説の稽古眞面目な咳をする　珍景
いささかの優越感の輕い咳　同

席題　人形　互選

人形は臍のあたりで泣いて見せ　紫白
人形へ何か我が子の獨言　春水
人形と暮す氣でゐる稼きもどり　濁水
人形に寢かす構へも女の兒　珍景

席題　宮　樣　互選

閲兵の宮に吹雪もしやんとなぎ　濁水
宮樣を抱き參らす葉山驛　紫白

兼題　頬冠　濁水選

頬冠空の一升瓶を負ひ　紫白
頬冠父祖傳來の畑を打ち　同
日蝕がまだ解らない頬冠　同
（人）ひろゞ〳〵と我が田に立つた頬冠　春水
（地）此の村の疲弊を語る頬冠　珍景
（天）名優の眉が動いた頬冠　春水
（軸）まだ投げぬ棟紋付の頬冠　濁水

川柳雑誌社

松江句會（松江）

三月一日夜　於天神ミドヰ喫茶店にて句作に耽る。

兼題　英語　都之介選

異人街車夫の英語も異人街　砂詩朗
外人と對話も出來る輕母しさ　九紫
オールトーキー英語は物足らず　砂詩朗
混血兒英語で食つてる事を言ひ　卷二
英文科出身にしてオルドミス　砂詩朗
レターペーパー英語も書いて嬉し春　柳人
獨唱會英語を知らず銀狐　蕓路
三味線も彈けて英語も讀めるなり　砂詩朗

席題　意地　九紫選

片意地のそれから戀に破れて居　蕓路
意地で勝つ妻の態度のおそろしく　祥月
石蹴つて意地の捨て場がないのなり　砂詩朗

安來拳男の意地を見せるなり　卷二
席題　兄弟　天痴人選
兄弟のどつちも髮を分けたがり　卷二
挨拶は拔きに兄弟喧いで吳れ　柳人
兄弟の眼に南洋の儲口　祥月
兄さんを泣かした頃がなつかしい　砂詩朗
兄弟は同んなじ主義で暮さうよ　柳人
兄弟の荒い言葉は羨まれ　砂詩朗
(秀)兄弟よ銚子の數を知つてはなら　都之介
(同)搾られて行く兄弟の群に着おう　柳人
席題　過去　柳人選
倫落のそれから過去がなつかしく　莞路
過去は過去今は葉卷を吹かしてる　砂詩朗
涙ある過去を書いたり主婦の友　卷二
過去を捨て强く生きようと誓ひ　玲人
過去の日の思ひ出となる濱の月　祥月
眞っ黑なむかしが眉根にある　都之介
答ふるに餘りにみじめな過去でした　玲人
途に過去となり南無阿彌陀佛　天痴人
(軸)平凡な過去が續いて無事にある　柳人
席題　心の讀み込み　卷二選
心まるめて紫煙をなつかしむ　都之介
どうしもなれない心を泣いて吳れ　砂詩朗
心をぶちまけて失戀になつたです　天痴人
眞心が煙草の吸殼踏み付ける　柳人
童心に返り渚の砂を踏み　玲人
耳垢除男の心を知つてゐる　莞路
心配をかけてすまない好い月夜　祥月
席題　片思ひ　互選
氣前よくなげ出すチップの片思ひ　評人
片思ひ女の下駄を借りただけ　卷二
パラソルをくるり廻して片思ひ　砂詩朗
物干で爪を剪んでる片思ひ　同
あの人の名ばかり書いて片思ひ　九紫
氷雨降る窓で片戀だと分り　莞路

いかだ詩社（松江）

三月五日夜莞路居にて句作に耽る。
席題　共鳴　莞路選
共鳴に一もなく女學生　利郎
政治家の共鳴金を待つてゐる　順風
共鳴はやつぱり酒に醉つてゐる　祥月
金のない顏が共鳴してくれる　卷二
(佳)俺は共鳴した春の無軌道に　磨須雄
(同)溶鑛鑪プロレタリヤの叫びを煮る　都之介
席題　趣味　祥月選
食ふて寢てそれで無趣味な男です　梟人
趣味なかちつともないですと酒をのみ　利郎
(佳)戀の技巧は趣味から合そう　莞路
(同)廉雀にばかりこつて、文士とが　卷二
(同)唇のスタンプを夜な〳〵集め　都之介
席題　秋　須磨雄選
秋の色から戀がみつかたよ　卷二
灯をさけて秋のしわを直すなり　都之介
席題　移氣　梟人選
女を歪めたほろ風をかなしむ　都之介
蝶々に似た移氣を悔ひてゐる　莞路
移氣の指の白さにだまされる　卷二
席題　出來心　磨須雄選
出來心灰皿につもる想ひは　卷二
惚られた弱身にふつと出來心　莞路
いゝ月をまともに濱の出來心　祥月
(佳)フト剃刀をといで見る出來心　卷二
(同)出來心友の愛人ほしくなり　順風
席題　科白　都之介選
花道の巾が科白となつて來る　卷二
捨科白殘して女給泣いてゐる　莞路
科白黃いろく妖婦うごめく　梟人
戀の公式科白は無價値に終つた　磨須雄
捨科白相手をのんだ態度なり　祥月
映畫狂途に覺へたり名科白　利郎

ABC吟社句會（島根）

三月十二日夜開く。來る四月川柳雜誌社松江鍛川、八束三支部聯合大會に對する協議に夜更けとなつて散會した。（於春朗宅）
兼題　奧の手　春朗選
奧の手、知つて今夜を約束し　一雄
生きんとして生きる男の奧の手よ　六郎
奧の手とは知らず戀の道　鹿之介
卑劣なる奧の手までを見すかされ　青波
(秀)奧の手はそりそりでよいのなり　一雄
兼題　反省　天痴人選
反省をすれば淋しき春なりき　一雄
反省をしてよの涙の有難さ　鹿之介
反省をして夜おそく歸つて來　鈴鹿
反省を促す輿論の聲となり　青波
反省のその日大空澄みわたり　春朗
反省をすれど消されぬ過去のきず　青波
(佳)反省へ出獄統制一歩出る　六郎
(同)反省の隅にごつたゝ溜り　同
席題　敷布團　一雄選
敷布團にみだらな句を殘すまい　天痴人

病身を包む慘めな敷布團　青波
(人)薄つぺらの敷布團で甲種合格だ　春朗
(地)寢小便の敷布團が長屋を暗くする　同
(天)敷布團が涙を吸つてくれました　天痴人

席題　芽ぐむもの　六　耶選

彈壓の底に生あり芽ぐむもの　一雄
子供らが唄つて柳の芽が伸びる　春朗
芽ぐむ春乙女の乳がふくらめり　青波
空の青さへ三月芽ぐむものばかり　天痴人

席題　不意打ち　青波選

不意打にやはり女としへの媚態　春朗
臨檢にダブルベットがあはてたり　一雄
不意打に肱鐵砲を喰はされ　鈴鹿
不意打を喰はせてやろう子が忍び　六郎

席題　マッチ　互選

マッチで酒を掃除して五圓借り　六郎

—(球場風景)—

(三)マッチを借りて同じファンなり　春雄
(三)マッチを貰ふほどのチップなり　一朗
(四)夜泣蕎麥マッチで探す錢が落ち　春朗

へちま會句報(愛知)

三月十一日　於文醉居　くいち報

加藤文醉を取圍むへちま會なるものが產れてから二回目の句會を、會員はいづれも美香誌時代に文醉氏から敎を受けた熟の所有者で仲々盛會でした。

宿題　瞳　岐洲溪選

(佳)愛し合ふ瞳は言葉眞く通じ　蘇芳
(同)絕望といふ瞳が熱くなつて來る　文醉
(同)鏡臺にあの目こい目が浮ばれて　清泉
人)醉つた瞳の方に明るい灯が亂れ　文醉
(地)義理故の別れ話へ瞳が出合ひ　くいち
(天)改心をした瞳に母の溜涙　文醉

宿題　汽車雜觀　席上互選

(二)車窓からもう一口を動き出し　吉山
(同)二等車で來た成功を取り圍み　文醉
(三)二等車に乘つてもみた錢は持ち　吉山
(同)發車ベル護國の鬼となる氣なり　岐洲溪

席題　戀　吉山選

打ち明ける戀がレターへ書き切れず　文醉
飽きらめなければない戀へ今日も醉ひ　岐洲溪
角封のそれから母は淋しがり　くいち
クフス會戀しい名前書いて消し　清泉
あきらめて居れども殘る女文字　蘇芳

席題　夜　文醉先生選

(佳)酒の味はつきり知つた吹雪の夜　岐洲溪
(同)眞夜中をはつきりさせる非常線　清泉
(同)寢れぬ夜を貨物列車が長う行き　くいち
(秀)心から妻へすまなく思ふ夜　岐洲溪
(軸)炭をつぐ音をはつきり夜番聞き　文醉

天痴人。春朗對座吟(松江)

昭九、三、二夜　於春朗居　春朗報

題　果樹園　我儘　警笛

果樹園で祖父に腰伸す用があり　天痴人
果樹園の三月忙しい陽が當り　同
我儘を次男三男許される　同
警笛へいと淺ましく離れたり　同
果樹園を潛つて歩く父若し　春朗
果樹園の實り便りに書き添へる　同
我儘が言へてふたおやは無事　同
言へるだけ我儘言つて淋しき夜　同
灰色の空へ警笛鳴り響き　同
駈落は不圖警笛へ立ち停り　同

川柳雜誌社神戸支部

部友句會(神戸)

二月十八日　於明珠居

兼題　明暮　竹楓選

明暮の小言になれた臺所　吉左右
明暮へ話の多い合宿所　幸捐
あけくれへ女房の顏古うなり　春秋
明暮の小言にひゞが直らない　二南
(佳)明暮を疲れ通して意氣地なし　明珠

席題　左前　華水選

風呂敷を忘れて歸る左前　幸捐
どもつて眞似が上手な左前　吉左右
左前鍵かあんまり多すぎる　春秋
左前やつぱり朝の戸をあける　竹楓

席題　間食　明珠選

おはぢきがちらばつてゐておつにゐ　華水
間食の子供へ雜誌屆けられ　幸捐
間食をお菌者樣から許される　竹楓
(佳)間食を睫の光る子へゆるし　二南

席題　溫室　二南選

溫室へ話題をかえて連れて來る　吉左右
溫室へ鳴る敷板を踏まされる　春秋
あした摘む花へ溫室覗かれる　明珠
(佳)溫室の父は眼鏡をはづしてゐ　竹楓

席題　釘　春秋、吉左右共選

五寸釘母引出しへなほしてる　吉左右
箱の釘拔いて揃へる果物屋　幸捐
釘を打つ背へ不平は伸び上り　二南
釘拔いて簞笥の置場かへられる　明珠

佳)二本目の釘は眞直ぐ打込まれ　明珠
(同)晩の釘隣りへ耳ふ立てゝ打ち　二南

貧兒、明珠　對座吟

二月二十八日　西村明珠報

　　甌　私

念佛に私心かすかにあるばかり　明珠
私をはつきり知つた氣まずさに　同
ひとり歩るきてたゝしの影をいとほむし　貧兒

小女郎吟社(新居濱)高橋白羽報

　　募集吟　工場地、出産　越智虹子選

初めから男を生んでほめられる　愛好
ウエトレス遠い身寄へ産みに行き　皷多朗
工場地今日將軍の御講演　平凡子
工場地のあそこ、こゝらにうごめ眼　白羽
産聲が高い五燭の四疊半　同
ナツパ服于ゝた日和へ紙芝居　默紅
アジビラが蒔かれた噂灯がともり　同
(人)眞ン中の川で區切つた工場地　白羽
(地)工場へ蝶々が春を告げに來し　默紅
(天)御産聲九千萬のぼんのくぼ　綠村
(軸)資本主義煙の色を言ふのかれ

甫三居小集(京都)　司郎報

二月二十日

　　席匿　注油所　惠輔選

禁煙のビラ動かない注油所　曉聲
注油所動物園は人まばら　司郎
注油所吹雪の中にともつてる　光風

　　席匿　陽炎　司郎選

陽炎につれる女は無口なり　甫三
陽炎へ土人形がかはいてる　光風
ハモニカの少年陽炎を來る　豐次
(優)戀すてゝ立てばかげる春の土　光風
(軸)陽炎のレールの果は我心　司郎

綠雨居偶會　橋本綠雨報

三月七日夜

人絹が肌をすべつて寒い春　豆秋
千人の心を兵士肌につけ　彩泡
陽にやけた肌を男が見せるなり　葉光
肌寒うなつて電柱數へてる　新市街
十六の春から肌をみせぬなり　綠雨
湯上りの素肌を母に叱られる　同
鏡臺に肌をみせてるよい女　同

梅田誌上句報(大阪)　鮎美報

　　甌　隣の子　かほる選

鏡臺の横へ座つた隣の子　觀月
(人)おさらひの子へ隣の子よしやべり　同
(地)隣の子歸して妻は膳を出し　靜波
(天)寢不足のまゝに隣の子の笑ひ　鮎美

　　甌　庖丁　かほる選

庖丁の加減ゝあつてよい日なり　鮎美
(佳)庖丁をおいたへ蠅がとんでくる　靜波
(佳)庖丁をはなさぬ父のはちまきよ　鮎美

ひかり集(その二十三)　鮎美報

　　泡

とらへた泡のまだきえやらぬ宿命よ　卜居
泡だちゝ肌は思春期うれりぬる　同
陽のなかに泡ひとつづゝ消へてゆく　鮎美
紅椿流れて泡の下にあり　同

鮎美卜居對座吟

二月八日

蚊のいのち血ぶくれたまゝなる　卜居
生命がおかしい朝のほろよひ　鮎美
いのちをもちふでにんげんを建てる　同

川柳風呂(その十二)　鮎美報

　　蠅

愁しさを見せまい蠅が殺される　卜居
一匹の蠅へだん〳〵眼かさへる　觀月
蠅おふて他人行儀になつてゐる　同
冬の蠅いつそいたわる氣にもなり　靜波
一茶さま蠅がめがれのかほしてる　鮎美
牛おふて歸れば蠅もかへなり　遊歩

吹揚吟社例會(今治)

二月十五日　伊豫相互貯蓄樓上　渡邊曉童報

　　兼題　亂　心府選

片戀に亂れ〻宵のあわれなる　十靜
喫煙へ亂れた心取りなほし　健二
仲直り亂れた髪がてれくさし　紫陽
亂れたる心抱いて酒だ酒　逸居
潮体の列が亂れて何が見え　紫陽
騎隊旗一糸亂れぬ靴の音　小樓
亂れし心にコ、ア冷へきつて　曉童
夢一ツ心亂れた朝となり　小樓

　　兼題　夕陽　曉童選

銀行の扉に夕陽半分あり　心府
夕陽の鐘は野の果草の果　健二
部屋の隅まで夕陽に覗かれて　史郎
(佳)腹立てゝ出れば夕陽のまもなる　紫陽
(同)夕陽を一杯浴びてナツパ服　逸居
(同)さすらいの夕陽へ長い道しるべ　靜明

(同)故郷へ遠く夕陽の丘に立ち　小樓
(軸)一すじの夕陽佛間へ流れ込み　曉童

兼題　舞　史郎選

お師匠の癖を舞妓は知つてゐる　紫陽
憂うつな瞳につゞと蔦の舞　紫陽
お隣りは舞の師匠と云ふくらし　小樓
唄へ舞へジヤズが奏でる青春譜　宵明
金屏風にとけこみそうな舞姿　曉童
華やかに舞ふて私に母が無い　宵明

席題　姿　紫陽選

姿見て暫し女のうつろなる　史郎
惜別にせめて姿の消へるまで　逸居
倫落の姿になつて強く生き　同
(軸)鏡臺へ腰向けて見るいゝ姿　紫陽

席題　男の子　小樓選

泣き乍ら喧嘩に勝つも男の子　健二
泣かれてから強くなる男の子　心府
縄飛びをひとり見てゐる男の子　一風
一ッみか脱がせば走る男の子　健二
男の子握りこぶしが太いなり　曉童
男の子父にそつくり似てうれし　宵明
お茶椀は大いのが良い男の子　曉童
男の子男の子としての意地をもち　心府
(軸)男の子母の泪を知つて居る　小樓

席題　光　宵明選

蓮の露光るたんびに轉げ落ち　曉童
逢曳をヘッドライトが撫でゝ行き　一風
坑口を出た瞳に光り強よすぎる　紫陽
ろうそくの光りとなつた默禱よ　健二
軸)銀翼が軍都の空へ光るなり　宵明

光笑會（大阪）

三月十三日　於カナメ喫茶店永田里十九報

兼題　草鞋　綠雨選

變裝の草鞋で渡る交叉點　葉光
嫁貰ふはなし草鞋のこそばゆし　白葉
すり切れた草鞋へもらひ少なすぎ　しのぶ
旅芝居草鞋も入れた荷物着き　秀山
ピクニック草鞋は少し遅れてゐ　里十九
怒つてる樣に草鞋の紐をしめ　かほる
花道を歩いただけで脱ぐ草鞋　豆秋
エキストラ草鞋がちびてばかりゐる　同
(軸)はきかへる草鞋に山をほこらるなり　綠雨

席題　エプロン　かほる選

インテリのエプロン姿寫される　彩泡
エプロンのぬれ手で渡す衛生費　友帆
エプロンを外し通ひのほつとする　秀山
エプロンのまゝ話し込む珍客　綠雨
市場から出るエプロンの足早し　里十九
エプロンの新らしいのが指圖する　同
エプロンをとつてお化粧して歸り　豆秋
恥かしい時のエプロン短かすぎ　同
(軸)桃割に結ひエプロンがよく似合ひ　かほる
(同)エプロンから肌色のコンパクト　同

席題　俎板、出齒　互選

晝休み大工俎板たのまれる　友帆
ほめられて俎板の前でおとなしい　白葉
俎板をジヤガ芋一つ二つ逃げ　秀山
俎板のそばに招き猫がゐる　綠雨
集金を待たせ俎板片づける　里十九
まな板の音も夕暮れ近くなり　同
豆秋

俎板をはみ出してる蛸の足　里十九
まな板の端にパセリの落ちかゝり　同
齒ならびを氣にして娘無口なり　白葉
二次會へ出齒の幹事はよく喋べり　しのぶ
特徴は出齒と書いてる尋ね人　彩泡
出齒かくし乍らたどんに灰をきせ　かほる
仲人は出齒のことだけ言ひそびれ　友帆
腹立てゝ出齒しやべること〳〵　豆秋
出齒にしてよく笑ふくせがあり　里十九

川柳雜誌社籤　川句會（出雲）

三月十三日夜　於尼綠之助居

兼題　春ひらく　綠之助選

土を踏む足の裏にも春訪れる　草路
憂鬱をつき地のぬくみ陽のぬくみ　田鶴緒
春ひらく空を見上げて牛とゐる　沈丁花
ネオンのかげに春ひらく〳〵　朴泉
(人)春が生れて—私も一日伸びる　大朗
(同)さあ春に春に植木鉢の置き替へに　華村
(地)春ひらくどうやら職に就けさうに　與詩雄
(天)春ひらく希望の眉を上げやうな　同

同　秘密　綠之助選

ひとりゐて蓑の影の持つ秘密　好郎
秘密今淡く殘りて憂ひにぞ似し　華村
ネクタイのゆゑ言へない事の出來た宵　沈丁花
大げさな秘密なんのと新妻の　與詩雄
秘密を解消今夜は呑めるんだ　朴泉
秘密をかぐ月さやかにひとり　大朗
(秀)秘密が渦卷く不發か爆發か　同
(軸)春の秘密捷毛に宿すもの　綠之助

席匿　卵　比佐緒選

共稼ぎ卵を呑んで出る支度　緣之助
(秀)春ひらくある日七面鳥産み初め　同
(同)卵を貪り試驗地獄にゐる　好郎
(同)卵の殼によはき月ありもうき日　與詩雄

席匿　注射　華村選

信仰の裏の哀愁日に増す注射　好郎
子の注射へ夜を白々とゐる　沈丁花
おゝ父よ注射だけの人生か　淨二
絶望のベットに注射の日が續き　比佐緒
(人)初めての注射呼吸を嗟ひし　緣之助
(地)青春へ影深くさす注射針　與詩雄
(天)注射針春にそむきし光りやう　緣之助

席匿　祝　與詩雄選

高砂や祝座敷の嗄れ聲　大朗
本祝歌高々と露路を通り抜け　沈丁花
祝賀會はるか向ふに主賓ゐる　緣之助
本祝の此處にも狂ふステップよ　華村
環境もよし友の祝盃に走る　邪氣　好郎

席匿　茶　田鶴緒選

母一人子一人茶漬の日が多し　比佐緒
茶を入れる妻の姿も老ひたなあ　與詩雄
醉ひざめのお茶、茶柱を見つけたり　緣之助
茶の冷え切つた月と對す虚無　好郎
(人)叱られて呑めば冷えて濃いお茶　緣之助
(地)お茶ばかり呑んで待たされてゐる　同
(天)茶摘唄字治は日和がつゞくなり　同

川柳雜誌社　今治句會（今治）

三月五日　伊豫貯蓄樓上　渡邊曉童報

明　逸居選

燈明へ孝行息子になつて座し　心府
打ち明けて云へば相手も男なり　一風
更生へ明るい今日は誕生日　星湖
夜が明けりや何とかなる氣で眠り　心府
光明をめざして若き血はおどり　小樓
夜明けふと子供の寢息氣にかゝり　心府
(人)黎明へ大日本の聲をきく　曉童
(地)産聲は明るい日本男の子　小樓
(天)黎明の空へ働く腕が伸び　健二

男　曉童選

つきあいに男としての意地をぶち　小樓
ルンペンの男と見れば男なり　逸居
男手の愛に育つたフラッパア　一風
あどけない言葉に男泣かされる　心府
太平洋を守る日本の快男子　鶴聲
男系の男子太平洋の初日出　星湖
(軸)男でまる産婆の眼鏡落ちかゝり　曉童

眉　心府選

淋しさを眉に現はし窓に立ち　小松
眉墨に塗つても母の個性あり　逸居
眉毛一本氣にする女　史朗
晩婚の女、眉の理智めきて　曉童
眉書いたとこへお座敷ですと來る　同

音　一風選

御機嫌が煙管の音にうかゞはれ　心府
待つて居る手前時計の音をきゝ　健二
初戀の心へせまる鐘の音　小松
鐵瓶が障子へひびく晝下り　曉童
セコンドの音病院の日長さ　星湖
筆の音代書の人の無表情　曉童
漬物を嚙む音母に羨まれ　心府

高利貸　小松選

高利貸の子が級長でないのなり　曉童
職業へ高利貸とは書いて居ず　史朗
高利貸慘めな過去を持つてゐる　心府
高利貸ぐつとくはへた銀キセル　健二
高利貸或る日電車の隅に座り　同
高利貸の娘にしては美しい　心府
(佳)高利貸或る日我身を考へる　史朗
(同)高利貸妻をなくした日を想ひ　曉童
(同)氣の弱い女房をもつた高利貸　一風

四國川柳大會

日時　四月二十二日　開會正午　閉會終列車時刻
場所　今治市金星町　熊の井
兼題　初對面三句　前田五健先生選
同　港　同　福田山雨樓先生選
同　力　同　廉生路郎先生選
（三光星賞）
會費　金五拾錢（送句者二十錢）
送句先　今治市松本通渡邊曉童宛
記念撮影
川柳講演　席上揮毫等々
主催　川柳雜誌社　四國支部聯合會
後援　川柳雜誌社

Nishi No Cho MEMO

▼主幹路郎先生が鮮滿地方へ三月九日午前九時四十六分大阪發列車で川柳行脚に旅立れました。當日御多忙中左の方々が態々御見送り下された御厚意を感謝致します。長崎柳秀、長野晴濱夫人、岸本水府、安井ひろし、小川百雷、永先芽十、森半疊、道田葉平、石田沐天、杵家七美佐、阿部閑生、庄萬よし、福田山雨樓、住田亂耽、永田里十九、吉田水車、生田翠夢、朝田新水、高橋かほる、日野蕣水、毛利九波、奥野禿山、芝四葉、須崎豆秋、竹内機見女、近藤勇、市塩沒食子、西いわを、桑原清美、植山九天、林秀太、關天八、濱田久米雄、栗花青吾、宮野一蜂、岡田某人、潮田明坊、竹田杏林の諸君と私

▼主幹路郎先生が鮮滿地方へ川柳行脚されるに當り、渡滿後援會を設けて同人、有志から淨財の醵出をお願ひ致した處各位の絶大なる御後援を忝ふし、路郎先生に多額の金をお渡しすることが出來ましたことは感謝に堪へませぬ。

▼京城で三月十二日夜路郎先生を迎へた悦びの方々から寄せ書が送られる。柳健寺、言也、大口坊、青芳、水行、清流、とした、麗日冠、諸氏、路郎先生の句「旅の人かくしきれない語尾たもち」

▼松江、簸川、八束の三支部の大會が四月十五日花の松江で開催されます盛大ならん事を祈る

▼加藤文醉君が同人評議員から同人理事に推薦されることになりました。

▼村松夢裡君は商用で三月十日から今治から琴平を廻つて、途中得意先の方へ川柳の宣傳もされて歸阪されましたそうです。

▼本社四國支部聯合大會がいよ〳〵今治で開催されることに決定されて、支部幹事並に客員の前田五健君が極力奔走されてゐます。本社から路郎先生外數名出席の豫定です。

▼川柳さやり吟社の十五周年記念大會が四月三日に催されるので、本社かに住田亂耽君が幹事として外數名出席の豫定です。別稿の會報參照下さい。

▼大島濤明君は三月一日大滿洲國帝政實施の祝賀に行かれて、左の句を寄せられました。

「闘の香に王土の民の闘の聲」

▼荒井英賀夫君は商用と支部聯合會の事で本社事務所へ來社されましたが、妻の病氣のため不在中でお目にかゝらなかつた事は實に殘念でした。

▼松江、八束、簸川の三支部合同の句會が催されるその相談に左の方が集つて寄せ書を送つて來られました。天痴人、緣之助柳人、巷二、冷兒　祥月、春朗莞路、外數名

▼平岩司郎君は四月一日から住友生命保險會社へ勤務されることになりましたので、當分嵐山から通勤されるそうです。

▼加藤文醉君がスタンプ蒐集座談會の席上で、川柳の作句まで して半日を愉快にすごされましたそうです。

▼川柳へちま會を文醉居で三月六日創立され左の方々が集られました。文醉、香童、吉山、岐洲溪外數名。

▼岸本水府氏川柳二十五年祝賀會が三月十八日夕棉業會舘で催された。餘興の藝術浸談等あつて、本社賛助員池澤樂居、長崎柳秀、客員前田雀郎の諸氏が出席されて盛會裡に散會されたそうです。

▼溪花坊川柳隨筆が發行されました。送料共二十四錢京都市北白川伊織町川柳叢書刊行會

▼川合舟々、枝松規堂、今江勝太郎の諸君が三月九日一泊で湯の山湯泉へ行かれました。

▼前田義風子君は三月上旬山中溫泉へ湯治のため行かれました

▼關本雅幽君は病氣で郷里（和歌山）へ歸られました。一日も早く全快を祈ります。

▼きやり同舟會から寄書を頂きました。太郎丸、雨吉、不倒人茶六、周魚、花川洞　啞三味、瀧の人、自樂人、玉兎朗、芽朗

▼日本大學川柳會から二月十九日附で寄書を頂きました。角戀坊、明朗、鷹男、青瞳、鷦六、捨朗外數名

▼中見光路、岸上錦石の兩君は本社のため多年活躍されましたが今回家事の都合で退社されることになりました。一日も早く復活を祈ります。

▼妻が引續き大阪帝大病院北二階三十一號楠本内科へ入院、各位から多數の御見舞狀を頂きました。御厚意を誌上からお禮申し上げます。

▼本紙の編輯は山雨樓、鶴峰、豆秋の諸君と私で致しました。

（緣　雨）

編輯の窓

山雨樓

▼時惟れ麗春。行樂のシーズンを迎えた。四月三日いきやり十五周年記念句會を初め、十五日の本社山陰各支部聯合句會、二十二日社四國各支部聯合句會等柳壇の收獲も豐饒である。切に柳友諸兄の御自愛を祈る。

▼長野吉高氏の「是の如く我れ聞く」は「改造」三月號長谷川如是閑氏の「笑の社會性とユーモア藝術」に對する所見で、氏の透徹した藝術觀の一端を窺ひ得たことは嬉しい。

▼本誌の權威　武玉川初篇研究は本號を以て愈々完結された。次號から第二篇が續載されることになつてゐる。御期待を願ひたい。

▼東京の綿谷摩耶火氏から「武玉川研究落穗」が届いてゐるが誌面の都合で次號に割愛した。

▼閑生氏は「句をめぐりて想ふ」の續篇を執筆されて愛讀者に應へ、艸樂氏は「詩價の測定」に健筆をふるつた。僕も前號で豫告した通り「時評」を書いた。

▼雜筆春秋にはいつも原稿が殺到するので選擇に困る次第。久し振りでかほる氏の「街に住めば」が表はれた。柳路氏の「熱河の話」は異國情緒濃厚の好讀物である。

▼梅本翁の「古狸窟雜筆」は益々好評で、何が飛び出すかわからないところに、懷古趣味的ジャーナリズムが盛られてゐる。

▼月評は皆の都合思はしからず會合の機を失したので、鮎美君と僕とが別々に筆を執つた。

▼「川柳物園」の筆者、岡田某人君は曾て純文藝にも筆を染めたことがあり、句作にも熱心な新進作家である。

▼本號は原稿が豫想以上に輻輳したので誌面の都合上「川柳天神緣起」の續稿其他次號に廻したものが尠くない。筆者及讀者諸君の御恕諒を乞ふ。

▼本紙の表紙繪は東京の森田ひさし蕭伯を煩はした。藤を取入れた四月のすばらしい風景、柳味たつぷりである。

▼路郎主幹鮮滿川柳行脚に就て各地で非常に歡迎され、歡待を受けてゐられるとの趣度々お便りがあつた。鮮滿川柳家諸君の御厚情に對して誌上から厚く感謝の意を表する次第である。尙主幹は元氣一ぱいで愉快な旅を續けてゐられる。

▼二十三日迄の御通知では京城平壤、安東、奉天で歡迎句會が開かれたさうで、各地の柳友に對し非常に感謝してゐられる。

▼いづれ本月末路郎先生御歸着の上は「鮮滿川柳行脚講演會」を開催して、彼地柳壇の狀勢と興趣盡きぬ旅情とを拜聽することになつてゐる。御期待を希ふ。

▼同人加藤文醉君は中京方面の旅行界に活躍してゐるが、街の興味雜誌「鋪道」に柳壇を設けて川柳の宣傳に努めてゐる。

▼刀根山支部の石森靜太君が愚寵、噴兒、松雨、寒子（今は故人）の諸君と共にプリント句集を出してゐる。體裁に雅味があり、內容が張り切つてゐるのが嬉しい。

▼三月十五日本社西條支部幹事の荒井英賀夫君の來訪を受け、四國支部聯合句會を中心に懇談を重ねた。

▼三月二十一日の國館市大火の報には驚愕措くところを知らない。本社客員、龜井晟修氏其他柳友諸兄の安否が氣遣はれてならない。晨修氏の本邸も多分灰燼に歸したことゝお察しするが御家族共健在を遙かに祈る。

轉居

▼姫田夕鐘君は大阪市港區西田中町四丁目四へ

▼岡田陽喜亭君大阪市住吉區天下茶屋一丁目一七へ

▼二盛社大阪市此花區上福島南一丁目三二へ

▼川柳きやり吟社東京市淺草區小島町二ノ二七番地變更

▼平井冬呼君は大阪市浪速區西關谷町一ノ六五谷口方へ

改號

▼加藤史城君は史鶴と改號

前號の正誤

一二頁涙する母の口說が苦手ですいれい三

一八頁自らを汚す仕事が錢になり　正夫

二八頁月經帶乙女心の一轉機　喜由

二九頁自己陶醉冷たき蒲團出して寢る　竹楓

三五頁一人づゝ抱いて千日前に居る　變人

三八頁預つた植木朝晩氣をもませ　濁水

投稿規定

▼投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▼「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る

▼「川柳塔」への投句は同人に限る。

▼各地會報は半紙判の原稿紙に清記の事。

▼文章は二十字詰半紙判原稿紙に詰める事。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記する事。

▼締切は嚴守されたし。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入の事。

募集

第十一卷第六號課題

四月五日締切

（各題十句以内）

▼櫻　水谷鮎美選

▼祝儀　生田翠夢選

第十一卷第七號課題

五月五日締切

（各題十句以内）

▼團扇　阿部閑生選

▼凉臺　喜多春秋　姫田夕鐘選

毎號募集

▼近作柳樽（雜吟十句）麻生路郎選

▼各地柳壇（會報）

▼文章（評論研究感想吟行漫文）

社告

社務一切（編輯に關する件、投句、購讀廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます。

定價

一部　金參拾錢

半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢

壹箇年前金（特輯號共）參圓六拾錢

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中にでゝ頂ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和九年三月廿五日印刷

昭和九年四月一日發行

第十一卷　第四號

（毎月一回一日發行）

編輯兼發行印刷人　大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地　麻生幸一郎

發行所　大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地　川柳雜誌社　電話天下茶屋二五七九番

事務所　大阪市住吉區平野西之町八三番地　川柳雜誌社　振替大阪七五〇五〇番　電話天王寺一一六七番

賣捌書店

（大阪）大賣捌　二盛社書店（明文堂其他市内各書店）

（東東仲見世）玉森堂（神戸）米田、寶文館（圖館）石塚

（京都）三宅（名古屋）靜觀堂

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます

川柳雜誌社關係の人々

（順はろい）

賛助員

池澤樂居　伊藤彦造
長谷川一徹　鳥山一歩
大道弘雄　大島濤明
岡本一平　大谷五花村
片岡直方　岡田三面子
笠原路生　亀井晟修
嘉納純　田中辰二
長崎柳秀　長岡半太郎
長野晴濱　國枝史郎
藤村作　藤本卯之助
赤井清一　淺田一
末弘嚴太郎

客員

原春雨　姪子省二
藤里好古　森東魚
村松夢裡　村田新市街
山本雨迷　四葉芝水
平井春光　平井蒼太
阿部閑生　朝田新水
福田鶴峰　夕鐘
姫田野華水　日野關本雅幽
東谷聞路　平井冬呼
熊谷紅　江戸みつる
阿形一杉　毛利九波
石柳次妹尾變人
近藤勇須崎豆秋
眞田幸捐　田角丸
笹田翠夢　北川あや美
春元紀太郎　西田艸樂
吉田水車　高橋かほる
首藤竹楓

同人

岩崎柳路　奥野禿山
増位汀柳　松下小柳子
石脊根民郎　市塲沒食子
長谷川三汀
西村山月　西村明珠
大鶴喜由　後藤青兒
大西八歩　吉川啞人
中西おさむ　中澤濁水
加藤文醉　谷村稔
立井登美坊　北山悟郎
喜多春秋　宮岡白峰

同人

道頓堀支部（大阪市）幹事庄司耶
九三會支部（大阪市）幹事北山悟郎
神戸支部（神戸市）幹事西村明珠
函館支部（函館市）幹事亀井晟修
高知支部（高知市）幹事中澤濁水
梅田支部（大阪市）幹事水谷鮎美
螢ヶ池支部（大阪府）幹事石森靜太
田邊支部（和歌山）幹事辻左馬
籔川支部（島根縣）幹事尼子之助
豐橋支部（愛知縣）幹事白井梅里
京都支部（京都市）幹事平岩司耶
鳥取支部（鳥取市）幹事中島鐵州
堺支部（堺市）幹事八木美夜路
松山支部（松山市）幹事石丸春峰
守口支部（大阪府）幹事朝田新水
御旅支部（大阪市）幹事生田翠夢
高岡支部（富山縣）幹事越田久水
天王寺支部（大阪市）幹事福田鶴峰
鶴町支部（大阪市）幹事妹尾變人
御池橋支部（大阪市）幹事村松夢裡
松江支部（松江市）幹事梶谷苍二
塗青支部（大阪）幹事熊谷紅
大鐵局支部（大阪）幹事植山九天
西條支部（愛媛縣）幹事荒井英賀夫
光耀會（大阪）幹事竹内機見女
萩ノ茶屋支部（大阪）幹事奥野禿山
北濱支部（大阪）幹事谷村稔
今里支部（大阪）幹事市塲沒食子
奉天支部（奉天）幹事江戸みつる
八東支部（島根）幹事平塚亂笑
玉造支部（大阪）幹事清水友帆
今治支部（今治）幹事渡邊曉童
光笑會（大阪）幹事永田里十九
新居濱支部（愛媛）幹事越智虹子
伯耆支部（鳥取）幹事湯原美笑
永田里十九

編輯局（同人）

橋本綠雨　福田山雨樓
麻生葭乃　楊井二南
住田亂耽
麻生路郎

主幹

川柳雜誌案內

六號活字十四字詰三行金五十錢、一行增すごとに金十錢（但し廣告の手代用可）改號、移轉、句會案內、柳業廣告、その他

並製 **合本特賣**

「川柳雜誌」の合本第二卷より十卷まで

各壹卷 **金壹圓五十錢**

大阪市內送料壹册六錢
市外送料壹册廿四錢

▽申込期日四月十五日〆切
發部少數に付至急御申込下さい。

大阪市住吉區平野西之町八三
申込所 **川柳雜誌社**

創刊十五周年記念

川柳きやり 川柳大會

日時 四月三日正午
會場 淺草公園傳法院大書院
會費 金五十錢
宿題 第一宿題「大丈夫」（二句吐） 周魚 選
（〆切三月二十日 用紙はがき）
（俳句は大會後）
第二宿題「年頃」（二句吐） 當日持寄 雀郎 選
五題 出席大家選
（題題〆切午後三時）

御出席の各位へ記念品並記念繪葉書呈上

記念句會散會後午後六時より神田明神開華樓に於て有志の懇親會を開催（會費金參圓）當日大會會場でも受付けます。

懸賞募集

「軍旗」三句醉月選「乳房」三句栗坊選「雜詠」五句史城選締切四月七日嚴守

秀逸全部へ美賞及發表誌贈呈いたします。どなたも奮つて御投吟下さい。

東京市日本橋區浪花町十六（井口方）
川柳日輪詩社

川柳雜誌投句用箋

本社制規の投句用箋を左の價額でお頒ち致します。なるべく此用箋を御使用下さい。

五〇枚綴二冊 價金拾二錢（送料共）

▼御申込は本社事務所宛。（一錢切手代用可）

川柳きやり

菊判毎號七十數頁
毎月一日發行一部廿五錢
東京淺草區小島町二の二七
川柳きやり吟社
（取次所）川柳雜誌社事務所

診察 午前九時ヨリ
時間 午後十時マデ
第一第三 日曜午後休診

花柳病科

大阪市西區梅本町三七
本田外科醫院
電話西五〇九四

診療 午前九時
時間 午後五時
入院隨時
日曜祭日午後休診

肛門病科

大阪市東區船橋町四三
大阪久枝肛門病院
電話南六八六

清酒

白鶴禮讃

白鶴の瓶たまることたまること
白鶴へみんな揃ふたいゝ話
いゝ酒と言へば白鶴持つてくる
白鶴を一本つけてからの事
百事意の如く白鶴呑んでゐる
當選に白鶴樽のままで來る
貧乏の中に白鶴だけの味

摂津灘 嘉納合名會社釀

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和九年三月廿五日印刷納本　昭和九年四月一日発行

川柳雑誌（第一二三號）

定價金三拾錢　送料金壹錢

にきびとり美顔水

新装品

スマートで、お徳用な新装品が出來ました！

ニキビ吹出物の代表的良薬としてまた美容料としても最も優秀な「にきびとり美顔水」は、最近著しく海外市場へ進出したのを機として、瓶、箱、包装に一大改良を加へました。
新装品は實用新案の特別の瓶口で、一滴もムダにならず非常にお徳用です！

▲ニキビ吹出物の治療に……
▲入浴後、洗面後、お髭剃後等に
▲美容藥として御常用に……
▲アブラ性の方のお化粧下に……
▲蚤蚊南京虫等にさゝれた時に……

定價
35セン
50セン
1エン

舗本水藥美りとびきに

株式會社 桃谷順天館